
P300A

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P300A

【Nコード】

N3727U

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

天才脳神経外科医、所 創太郎は、神経細胞とその伝達効率を飛躍的に向上させる P300A の開発に成功する。秘密裏に実験を進める彼は、人体最初の被験者として中学時代の同級生で、医療機器販売会社に勤める冴えない営業マン、伊都淵孝之に白羽の矢を立てる。しかし、P300A の効果は所の想像を越え、伊都淵に思わぬ能力を目覚めさせてしまった。

或る目的のため研究を諦めようとしないう所、手にした能力と引き換えに数々の大切なものを失って悩む伊都淵。異なるスタンスから、

彷徨える人類の魂が目指すべき進化の方向性を探る二人に接点はあるのか、。

この長編は、自身のブログ記事からの転載です。全四十話完結予定です。また、僅かではありますが性的な描写も含んでおります。お読みになられる側の配慮をお願いいたします。

所 創太郎《ところ そうたろう》

二メートル立方の檻おりの中、プラスチック製の知育玩具を慎重に組み立てていたアカゲザルが、いきなり立ち上がって暴れだした。甲高い声で叫び続け玩具を振り回す。人体の形を成しかけていたその手足がもげ、頭だった部分はステンレス製の檻に叩きつけられて無残にも破壊される。男は時計を眺めた。

「ラット、うさぎ同様、サルも三十六時間で消滅したもよう。クー・コールは投薬以前のレベルに戻っている。効果及び持続時間は新大脳皮質のサイズに左右されな**い**と思われる」

ICレコーダーに続いてパソコンにもデータを記録する。佳境かきようだな。自宅地下室に作られたラボ（研究室）で革張りの椅子に深く腰掛け、所 創太郎は大きく伸びをした。無影灯の作り出す灯りが、打ちっぱなしのコンクリートに囲まれたラボに寒々とした感を与える。デジタル表示の温度計に目をやった。

「室温は一定、マウスも猿も完璧。残すは人間のみか」

全ての機器の電源を落とし、革製のチェアに深くもたれ込む。

事故の可能性は限りなく低い。自身を実験台ちゆうちよにすることに躊躇ちゆちゆはないが、その場合、観察者と被験者を同じ頭脳に混在させることになる。果たして、それで正確なデータ収集が可能だろうか。焦るまい、ここまで来たんだ。人類にして最小サイズの新大脳皮質を持つ誰かが見つかるのを待とう。直情径行型で本能的な振る舞いを見せる人間、己を知らぬ傲慢さを撒まき散ちらす、まだ見ぬ彼か彼女に分別と知恵を授けてやろうというのだ、感謝されて然るべきだろう。姿なき抗議者への返答を頭の中で唱え、所はふんと鼻を鳴らした。

勤務先の病院にも講義に通う大学にも、適当な実験対象は見当たらなかった。最近の若者は押並おしなべてクールだ、言葉を代えればバイタリティが感じられない。ただ息をしているだけなら、このサルと変わらない。自己保身には最大限の労力を費やすが、アドバンテー

ジのないフィールドでは簡単な受け答えすら覚束ない。そんな彼等が医師になった時、この国はどうなっていくのだろう。階段教室に首を並べた無個性で無気力な集団を見るにつけ、所はそんな危惧を感じたものだった。

遅いな、既に十日も経っているのに候補者の一人も見つけられないのか。

「性別は問わない、理性的と言いつても難しい人間を見つけて欲しい。年齢は…、出来れば四十歳までぐらいがいいな」

個人・企業調査全般 大山興信所 加藤祐二と書かれた名刺を手取る。風変わりな依頼に調査員は不思議そうな顔をしていた。

「探した後は、どうすればよろしいのでしょうか」

「候補者のリストをもらってから、また指示するよ。身上調査を頼むことになるだろう」

カルテに残っている患者はまずいが、いっそ出入り業者の誰かでも特定してやればよかったな。知り合いか、そう考えた途端、所の脳裏にある男の顔が浮かんだ。名刺に書かれた電話番号をコールする。

—— そうだ、卒業生名簿の住所しか分からない

—— ああ、よろしく頼む。ヤツが見つかったら、そのまま身上調査に移ってもらっていい

そうだよ、あいつが居たんだ。あいつなら、きっとこの条件を満たしてくれるはずだ。せいぜい不幸で居てくれるといいが。悪意を内包した含み笑いを小さなノック音が破り、ちっと呟いて体を起す。

「創太郎、居るの？ 夕飯の支度が出来たわ」

所は不機嫌そうな声で返す。

「考え事をしているんだ、今は俺に話し掛けないでくれ」

「ごめんなさい」

消え入りそうな声と、スチール製の階段を登る足音が遠ざかって行く。所は再び、自身の思考に沈み込んだ。

伊都淵孝之（いとふちたかゆき）

地域医療の現状は、慢性的な医師不足により縮小傾向にあると聞
くが、この病院に限ってはそれも当てはまらない。常にベッドは万
床、入院待ちの患者がストレッチャーに乗せられ廊下に列を成して
いたことを、二年前に亡くなった父が入院した時に僕、伊都淵孝之
は見えてきていた。

ベッド不足を解消すべく野放図^{のほうず}に増築を繰り返した結果、良く言
えばケルト族が女神のシンボルとして崇めた^{あが}五芒星形、悪く言えば、
あちこちに触手を伸ばしながら肉体を蝕^{むしば}み続ける腫瘍にも見えるよ
う、建物は異形へと変化を遂げていた。

九月の太陽が駐車場のアスファルトから陽炎^{かげろう}を立ちのぼらせる。
ゆらめきの向こう、厳然と佇^{たたずむ}むそれは、悪意に満ちたオブジェのよ
うに僕を萎縮させる。

「ここは、業者とCEが、がっちり結びついてますからね。うち
が入り込む混む余地なんてないんすよ。課長も無理なことを伊都淵^{いとふち}
さんに押し付けたもんすよ」

先輩社員、といっても僕より七つ年下の松井良太君が明るい声を
上げた。

「露ほどの可能性でもあるなら、それに賭けてみないと。いつま
でも給料泥棒と呼ばれてる訳にも行きませんしね」

「あ、いつも言ってるけど、敬語じゃなくっていいっすよ、俺の
方が年下なんだし」

課長の嫌味の対象とならないだけの営業成績を、この松井君は上
げている。その彼が、七、八年前とはいえ、機器納入実績のあるこ
の病院を僕に紹介してくれようとしているのだ。言葉だけでも丁寧
にならざるを得ない。

技術畑のみを歩んできた僕は、概^{がい}して営業畑の人間とは折り合い
が悪い。好転^{きでん}の兆^{きざし}の见えない不況と震災による消費マインドの停

滞で、ただでさえ売上の伸びない時期に突然参入してきた、ど素人の営業マンを彼等が快く思うはずはない。企業というものは、退職金の高騰対策と福利厚生費の節約のため、基本給を低く設定することに腐心する。売上イコール生活のゆとりに直結する営業職に於いて、競争相手は一人でも少ないに越したことはないのだ。例えばマグレでも、僕がどこかに何かを売れば、それは他の営業マンからパイをひと切れ奪ったことになる。

畢竟、僕の立場は営業所内で孤立して行った。ただ、この松井君だけは、何故だか僕の面倒を見てくれようとする。今や珍しい存在となった、気のいい青年だったのであろう。僕の首がなんとか繋がっていたのは、間違いなく彼のお陰だったのだ。

「まあ、ビギナーズラックってこともあるっすよね。瀬戸さん、まだ居るといいんだけど」

数年前のリーマンショックから、ようやく立ち直りかけた我が国を、未曾有の大地震が襲ったのが半年前。多くの地域産業に甚大なダメージを与えたそれは、この国の経済を根底から揺さぶった。

当時、僕が勤めていた機械設計の会社も例外ではなく『うちの商品は技術力だ。サプライチェーンの寸断や八百キロ彼方の被災が我が社の業績に影響を及ぼすことなどないだろう』と、タカをくくる三代目社長の強がりも虚しく、関連倒産の憂き目を見ることがなる。

某自動車メーカーCEOの語った『我々はこの地を見捨てない』に、この東海地方は含まれていなかったのだろう。それに実際は彼の言葉も額面通りではなかったようで、多くの生産業務は北米やヨーロッパに移されたと聞いている。フランス人であるはずの彼の迅速なアクションは、放射線被害に対して神経質過ぎるのではないかと思われたのだが、もしかすると原発大国のフランス人である彼だからこそ、環境汚染数値の示す意味を知り尽くした上での判断だったのかも知れない。

妻と二人の娘、更にはマイホームローンを抱えた僕だ。のんびり

待遇の良い職探しをしている暇などなかった。しかし、腕に覚えのある機械設計は軒並み雇用が厳冬期。仕方なく、国が推進する職業訓練を受け、^{あっせん} 斡旋された数軒の企業を訪問したものの『即戦力ではないと…』と、シュミレーションのみが実績の即席エンジニアでは相手にもされない。直接的対価の要求なく職業訓練を受けさせていたでいて文句は言いたくないが、この国の施策は、いつも少しズレているように思う。求人募集ゼロのネイルアーティストコースを選んでいた人々は一体どうなったのかと、他人事ではあったが若い女性達の行く末を案じてしまう。政府、関連官庁はデンマークのモビケーションシステムを見習うべきなのだろう。

結局、義兄の義弟、平たく言えば赤の他人なのだが、その伝手でなんとか潜り込んだのが、この医療機器の販売会社だった。

頑健な体に生んでもらった両親には感謝すべきなのだろうが、その反面、入院はおろか骨折も未経験の僕は医療にも病院にも全くと言ってよいほど知識がなかった。白衣さえ着ていれば医者か看護師なのであろうとの乱暴な分類しか出来なかったのだ。臨床医と病理医の違いどころか、技師との区別さえつかない。機器を売り込もうにも、その窓口すら分からないのだから、営業成績はいつもグラフの右端に陣取る。たった一センチの青い帯は、松井君のおこぼれに預かったものだった。

彼とて生活がかかっている。大量の取引があった時でもなければ、そうそう営業成績の横流しもしてはくれないだろう。このまま数ヶ月が過ぎれば、折角、手にした職も再び失いかねない。機械設計以外、何の取り柄もないアラフォー男に、条件の良い再就職口などないことは四ヵ月前のハローワーク通いで思い知らされていた。この仕事を失うようなことになれば、（大変、失礼な言い方だとは思いますが）警備会社のガードマンとなって、ひたすら誘導棒、若しくは紅白の旗を振る業務に明け暮れることになる。誰かを応援している場合ではないというのに。

建物の圧力に怯んでいる訳には行かない。僕はビジネスバッグを

提げた左手に力を込めた。

Irony (奇遇)

「ちょっと、ちょっと、オタクら、どこの業者？ 勝手に医局に入られちゃ困るんだよね」

三十前後のCE（臨床工学士）が、ぞんざいな口調でドアを開けた松井君を背後から呼び止める。

「あっ、失礼しました。私はKYメディックスの松井と申します。ええと、瀬戸さんはおみえではないでしょうか」

松井君が差し出す名刺に目もくれず、彼の肩越しに放り投げる。一番手前のデスクにひらひらと着地した。

「瀬戸さん？ 聞いたことないなあ、どこの先生だろう。ねえ、藤井さん、瀬戸さんなんて人、居たっけ？」

同じ制服に身を包み、書き物をしていた四十絡みの男に訊ねた。「ああ、ずいぶん前に辞めた人だろう、放射線技師の。ほら、業者との癒着ゆちやくで…」

「はいはい、あの瀬戸さんね。なに？ オタクらも、あの人に相当注ぎ込んだ口？」

「いえ、私どもは別に……」

松井君の言葉の語尾が揺れる。とっかかりから、つまづいてしまったみたいだ。

「あ、KYさんだから、空気読めないのも仕方ないな」

若いCEが、出来の悪い駄洒落だじゃれに手を叩いて自画自賛する。むっとした僕は彼の前に身を乗り出そうとするのだが、松井君が立ちはだかって、それを許さない。

「そうでしたか、それは大変失礼しました。今日のところはご挨拶だけでも。伊都淵さん、名刺を」

元来、僕は営業が勤まるような温厚な人間ではない。CEの心無い発言に簡単に腹を立て、後先考えずに暴挙に出ようとするのが、それを如実に物語っている。年下の松井君に目線であしなめら

れ、おずおずと名刺を差し出した。

「何？この人、おっかない顔してるねえ。医療機器じゃなく、喧嘩売りに来てたりして」

？ Clinical engineer 福井？ 書かれた名札の男が、けたけたと笑った。

「申し訳ありません、こんな顔で。彼の両親にも、よく言っておきますっ……て、遅いっすね、もう。ええと、こちらのように公立病院の場合、機器の納入は入札制ですよね。業者の指名はどちらで行われるのでしょうか。お教えいただけませんか」

松井君の台詞にもカチンときたが、怒りを簡単に顔に出してしまふ僕に非があったのは明白な事実だ。この侮蔑を生み出したのは、他ならぬ僕自身なのだ。短気は損気とは、よく言ったものである。

こうやって、医局では一番下っ端扱いされる彼らのストレス解消に業者がターゲットにされるのが慣例となっているらしい。

僕にはラグビー部に所属していた高校時代から、ずっと疑問に思っていることがある。こういったストレスの順送りは、どこが終着点となるのだろう。高校で最上級生となっても、大学に入れば、また下っ端からやり直し。社会に出れば出たで上司の鬱憤うつぶんの捌け口に。非生産的な負の連鎖は、どこかで誰かが断ち切るべきではないだろうか。

この野郎、どこかのコンビニでも見かけたらサングラスにマスクで正体を隠して足腰立たなくしてやる。と、いったささやかな怒りの炎をぎこちない作り笑顔で包み込む。よろしくお願いしますと、言って頭を下げた。

「新規さんかあ、事務長さんは気難しい人だからなあ。ま、そんな顔で行っても無駄無駄。可愛いお姉さんでも連れておいでよ」

再び、怒りの煩悶はんもんに身を震わす。自分でもさっと顔色が変わるのが分かった。僕には営業マン必携の堪え性というものが全くないようだ。

「確かに、ここ数年はお取引もございませんでしたが、数年前に

LD100を一基、納めさせていただいております。まるっきりの新規という訳でもないんですよ。なんとか、事務長さんに御目通りできませんでしょうか」

『ならぬ堪忍するが堪忍』　を頭の中で念じ続けることで冷静さを取り戻しつつあった僕は、人懐っこい笑顔で食い下がる松井君に感動していた。

松井君のにつこり攻撃が功を奏したようで、調子に乗る福井のバカにアポを取らせ僕達は事務長室へと向かっていた。すれ違う全ての白衣にへつらいの笑顔を投げかけながら。

「しかし松井君は凄いですね。あれだけ好き勝手言われても怒り出さないんだから。僕には、とても真似出来ません」

「怒ってますよ。怒ってるから、なんとか商売に持ち込んで儲けてやりたいんじゃないっすか」

何を今更。そう言いたげな顔で僕を見る松井君の額に　”　営業マンの鏡　”　という文字が浮かんで見えた。

「伊都淵、伊都淵じゃないのか？」

階段を降りてきた白衣の男の声に僕は足を止める。伊都淵などという変わった苗字は多くない。ということは誰かと間違っちやうしんそつくて声を掛けたのでもなからう。僕は振り返って頭を下げた。長身瘦ちやうしんそつく躯の、その男はメタルフレームの眼鏡をかけ、一筋の乱れもなく髪をオールバックに撫でつけている。ええと、誰だっけ？この病院に何一つ納入実績がない以上、機器のセットアップで顔を合わせた医師も当然、居るはずがない。

「あつ、先生。お世話になっております」

とりあえずこう言っておけ。顔を出し続けたどこかの病院から移ってきた医師が、珍しい名前を覚えていてくれたのだろう。呼び捨ては構わないが、せめて何か買ってからにしてくれないものか。げんなりする心情を顔に出さぬよう、営業笑いにひた隠して相手の素

性を探る。首から下げられた名札は、無情にも裏返しになっていた。

「違うよ、バカ。俺だよ、所だよ」

「はあ」

誰がバカだった？ 顔で笑って腹で怒って、所某の正体を探る。

記憶の引き出しをひっくり返してナノサイズの僕らーズが総動員で調べものに当たる。そのうちの一人が正解のカードを引き当てた。

「あっ、所か。中学の同級生の」

「そうだ、お前は全然、変わらないなあ。こんなところで何をしているんだ」

勉強は出来たが大人しくて目立たず、ついによく学校を休んでいた、所 創太郎だった。いや、壮一郎だったか？

だいたいにおいて、中学生男子の一番の関心事など女の子のことに帰結してしまう。自分よりハンサムなヤツ、運動能力に秀でたヤツ、口の上手さで女の子を惹きつけるヤツ、それ以外は、ライバルと目することもなく、無害（僕にとって）と、一括りにしていた。そこに分類された所を、どちらかといえば僕は軽視していたはずだった。何せ、ファーストネームの記憶すらかのごとく曖昧なのだから。当然、話も続かない。どんな、べんちゃらが医師のプライドをくすぐるのだろうと考えを巡らす、焦るばかりで何も思い浮かばない。

相反して、所の立ち振る舞いたるや威厳と自信に満ち溢れ、ウダツの上がない営業マンである僕との差は歴然としていた。人は変わるもんだな。感慨に耽っていると情けなさに涙がこぼれそうになるので、遅ればせながらの自己紹介に転じる。

「実は今、ここで働いていて、これから事務長さんのところへ行って次回の入札の氏名業者に入れてもらうよう、お願いに伺おうとうかがしていたんだ」

所は僕の差し出した名刺にちらとだけ目をやって、怪訝そうな顔をする。

「KYメディックス？ 知らないな。石田から、お前は機械設計

の会社に居ると聞いていたぞ」

共通の知人の名前を挙げる。といっても、その石田とも、ここ十数年は逢っていなかったのだが。失職した事情を数十年ぶりに再会し、立派な医師となっていた同級生に語るほど侘しいものはない。

「いろいろ、あってね」と、誤魔化す。

「医療機器販売の営業マンか、大変だな。でも、うちも入札とは名ばかり、C E連中の専門学校時代から業者は張り付いているっていうからな」

「そうなのか……まあ、種も撒かねば芽も出まい。とにかく指名業者に名を連ねさせてもらうところから始めるよ」

「おう、頑張れ。そのうち、どこかで飲もう」

会話の舞台となっていた階段の踊り場に所は背を向けた。

そのやり取りを黙って聞いていた松井君が僕にハッパをかける。

「先生が同級生なんて、正に天佑。大チャンスじゃないっすか、名刺をもらっておかなきゃダメっすよ」

男なら、自分の持ち物で勝負しろ。亡き父の時代遅れの教えを叩き込まれて育った僕はコネの使い途にも疎い。はっと気づいて階段を下りる所を追いかけた。ちなみに、ここで言う持ち物とは度量とか肝っ玉とかいう類のもので、断じて怪しげなものではない。

「所……、もとい、先生。名刺をいただけませんか」

「他人行儀なやつだな。生憎、今は名刺を持ってない。この病院のうしんけいげかじゅんきょうじゅで脳神経外科准教授は俺一人だから、用がある時は、そういつて呼んでくれ」

いや、ほぼ他人だし。それは口にせず、そそくさと松井君の許に戻り小声で訊ねる。

「准教授って偉いのかい？」

「伊都淵さんと同級生なんすよね？ だったら三十七歳か、大出世の部類でしょうね。事務長さんへの口利きをお願いして指名業者に入れてもらいましょうよ。上手く、ことが運べば課長も伊都淵さんに、二度と給料泥棒なんて言えなくなるっすよ」

降って湧いたような幸運を喜ぶ僕の背中に、よく通る所の声が届く。

「おい、今夜は空いてないか？」

Admiration (憧憬)

「さっきはどこかで飲もうと言ったが、俺も研究一筋の人間でな、夜の街に詳しくない。どうだ、今夜、家へ来ないか。会わせたい人も居るんだ」

会わせたい人？さっき話に上がった石田だろうか。

我が社に交際費といった支出名目はない。営業マンは各々のポケットマネーを潤滑剤へと融解させては営業成績への期待を抱く。さもなくば学会発表資料の作成を手伝う（これも、出来が悪ければ厳しい叱責に遭うのだが）といった労働力の充当で、決済担当者のご機嫌を伺う。単価の張る機器の単独導入、単価は小さくとも大量導入を期待して悪戦苦闘するのだが、その代償が血圧計数セットだったりもする。抱いた期待は気体へと昇華されてしまう訳だ。営業手当が売上げのたった三パーセントでは、個人の収支損益が赤字になることなど珍しくもない。と、松井君は言っていた。財布の中はなけなしの福沢諭吉が一枚きり。そしてそれは月末までのランチ代であり、タバコ銭でもあった。そんな僕にとって、所の申し出は願ってもないものだった。勢い込んで首を縦に振る。

「そうか、良かった。論文も書き終えたし、今夜は昔話に花を咲かせられるな」

僕の肩をポンと叩いて踵を返す所の袖を、都会の人混みを不安がる迷子のように必死に掴む。

「待ってくれ、家はどこなんだ？」

「昔、学校からの配布物をよく届けてくれたじゃないか。家は立て直したけど、場所は変わってないよ。じゃあ十九時にな」

何なんだ、この急展開は。僕は松井君と顔を見合わせた。

世の中、そう甘くはない。事務長の対応は門前払い同然。

「はいはい、YKメディックスさんね。覚えておきますよ」

その時点で、既に社名を覚え間違えていらつしやった。

休みがちな所のため、彼の自宅が帰路にあつた僕は、三日と空けずに足を運んだものだった。広大な敷地はぼんやりと覚えていたが、家は日本家屋だったように思う。機能のみを追求したような伶俐な建築物は、見上げる僕に場違いを申し渡すように思えた。

学校のどうでもいい配布物を届けていた程度の恩義で家に招こうとする所の酔狂さに得心は行かなかったが、腐れ事務長とバカ福井には、これっぽっちの期待も持てない。僕にとって所は最後の砦だったのだ。

地位や名誉というものは人間とその所有物を大きく見せるものなのか。そういった意味では、僕の、この・尾羽打ち枯らした姿も当然のことと言えよう。課長とのやり取りを思い出す。

「すいません。G病院の准教授から食事に誘われているんですが、あがらせてもらつていいでしょうか」

営業成績の芳しくない者は女子社員業務も手伝うべし。そんな不文律に縛られた僕のタイムカードが十七時三十分に記録されていても、社を出るのは毎晩二十時過ぎ。黙って帰れば、それこそ翌日の嫌味がエンドレスになりそうな予感に断りを入れる。

「ほう、やっと給料泥棒の汚名を返上する気になったのかな。松井から話は聞いている。准教と同級生なんだって？何で、こうも差がついちやうもんかねえ」

あんたに言われなくとも、今日は散々それを実感させられたよ。僕が営業成績の左端に來た暁には覚えてやがれ。いつか、あんたを追いつ越して、その剥き出しの頭頂部を灰皿代わりにしてやる。取らぬ狸の皮算用もいところではあったが、言葉の暴力に耐え続けた僕がこの程度の企てを夢想してもバチは当たらないだろう。

「まあ、しっかり食い込んできてくれ」

そうだ、あの沙悟浄を見返してやらねば。やる気の燃料は復讐心ばかりでもないのだろうが、今の僕にそれ以外の持ち合わせはなか

った。

石には詳しくないが、きっと大理石なのだろう、御大層な門扉ごたいそうもんぴに付けられたチャームを押して来訪らいほうを告げると、開いてるから入ってこいと所の声が返ってくる。重厚なドアを開けて入った玄関ホールは三階まで吹き抜けになっていた。本当に一般家庭か？　ここは。絢爛豪華けんらんこうかなシャンデリアを、ぽかーんと見上げる僕を、部屋着の所が出迎えてくれた。半袖のポロシャツの胸にはD & amp; Gのロゴがある。おそらくバミューダパンツも揃いのブランドなのであろう。上下\3,980のジャージが部屋着な誰かさんとは、えらい違いである。

進められるままに、肌触りの良いスリッパに足を入れ、リビングへと通される。僕より遥かに背の高い置時計や明らかに舶来品はくらいひんと思しき調度をキョロキョロと見回す様は、いきなり都心に放り出されたオノボリさん以外の何物でもなかった。

「ビールでいいか？　今、持ってくるから、寛いでいてくれ。首尾はどうだった？」

「提出する書類に不備がなければ入札業者としての資格は与えられます。そうは言われたけど、事実上の門前もんぜん払いだばらな、あれは。MSSの連中とゴルフ談義に盛り上がってらしたよ」

「MSSか、確かあそこはメーカー直営だったな。数字じゃ勝負にならんかもな」

「入札は出来ても納入は不可能だってことか？　ですか？」

「病院じゃないんだ。敬語は止めるよ、ばかばかしい。同級生として招いたんだぞ、仕事の話もナシだ」

「う、うん。そうだな」

ちっとも、そうだなではなかったのだが、最後の砦の門を閉ざされても困る。アルコールの回った彼が鷹揚おつようになってくれるのを期待するしかないな。僕は自身に待機命令を下す。

奥のドアが開いて、所の細君なのだろう。上品なパープルのブラウスを着たショートカットの女性が、ビールとグラスを載せたトレイを運んでくる。僕は立ち上がって二つに体を折った。

「お邪魔しております。この度は先生にお招きにありがた、図々しくも……」

「お久しぶり、伊都淵君は全然変わらないわね」

白い歯を見せ、えんぜん 艶然とほほえ 微笑む女性のくだけた口調に、中腰のまま彼女を見上げる。

「へ？」

理解が及ばずまばた 瞬きを繰り返す僕に、所がにやにや笑いを向ける。

「会わせたいといっていたのは女房だよ、岩下梓。覚えているだろう」

僕の頭の中は一気に二十数年を駆け戻った。忘れっこない。若干、個性には欠けるが、本来、美人というものはそういうものなのだろう。勉強も出来て、成績は常にクラス一・二位。さいえん 才媛を地でゆく岩下梓に憧れる輩は山ほどいたのだが、神々しいばかりの美しさにお 気圧され、中学校の三年間、誰一人声を掛ける者がいなかったという伝説の女性だった。当時の所との組み合わせなど、誰が考えたろう。「確か、大学を出た後は、看護師になったとか聞いていたんだけど」

一度だけ顔を出した同窓会での記憶を口にすると、梓は明るい声で答えた。

「ピンポン、覚えていてくれたのね、嬉しいわ。そこに研修医で来た創太郎と再開したって訳。運命的でしょう」

元来、女性というものは、なんでもかんでも運命と結びつけるのが好きな動物だそうである。中学生だった頃の僕にその知識はなかったが、何とかして学校以外で彼女を見る機会はないものかと、自転車で梓の自宅周辺を走り回った記憶が蘇よみがえる。あれだけ通って一度も拝顔出来なかったのだから、僕と梓の運命は太陽の昇る水平線と沈む地平線ぐらいかけ離れていたのだろう。

「こいつは、看護師にしておくには勿体ないぐらい医学に造詣^{ぞうけい}が深い。結婚しても子供が出来るまではと病院に引き止められたんだが、優秀な研究助手として手元に置いておきたかったんだ」

憧れの梓をこいつ呼ばわり出来る幸運に気づいてないかのように平然と語る。建物にも豪華な調度にも、感心こそすれ羨望^{せんぼう}を抱かなくなった僕に、不毛な嫉妬心^{しつとしん}が沸き起こる。

「えへへ、だから料理はあまり得意じゃないの。口に合わなかったらごめんね」

美人で看護師として優秀で、その上、料理まで上手だったら、僕の嫉妬心が発毛してしまつたろう。あくまでも、これは比喻である。梓の謙遜は、ほどなくして証明されるのだが、嫉妬心に毛は生えてこなかったのだから。

そして、その時間が到来する。テーブルに並んだ料理は玄関ホールで見上げたシャンデリアのように豪華だった。置時計同様、一般家庭の夕食に並ぶような食材ではない。一般庶民の僕は、いちいち「これは何？」と確かめながら料理を口に運ぶ。テレビで見えることはあっても、北京ダックを食したのは生まれて初めてのことだった。なんとしても学生時代のネットワークを復活させ、欠席裁判において所の有罪を立証する。その検事役に僕はうってつけだった違いない。

「今期の機器納入はお前の会社が一手に引き受ける」

アルコールと豪華な食事、さらには美貌の人妻が三位一体となつて作り出す空間に酔いしれ、待機中だった僕の営業マン魂は、来訪の目的をすっかり忘れ去っていた。当たり障りのない話題であつても高嶺の花の一言一句は、リビングを竜宮城へと変容させるものだ。

「え？」

「入札だよ、売れないと困るんだろう」

「そ、それはそうだけど、また何で？ それに、准ってくらいだから、教授の意向とかもあるんじゃないのか？ 事務長さんも居られるし、お前の一存で決められるものでもないだろう」

「小出さんか、あの爺さんは手先が器用なだけの手術職人だよ。俺が論文を書いてやったからこそ、今の地位にある。もっとも、俺が引き上げられた理由もそこにあるんだがな」

教授の名前は小出というのか、酔いの回ったパペッツの回路に、みみずがのたくったような文字で書き込む。

「入札とはいえ、お前のとこのような弱小がMSSに太刀打ち出来るはずもなからう。例え、お前のところが出した数字が適正だったとしても、事務長権限で一括納入の利点を主張。全てがMSSにといったことは過去に何度もあったんだぞ」

一気に良いが醒め、沙悟浄の頭でタバコを揉み消す光景が遠のいて行く。そんな僕に構わず、所は続けた。

「だから、俺が助けてやろうと言うんだ。ただし、条件がある」

「ええと、交際費は出ない僕だから……」

金品や賄賂の要求に対応出来る僕だったら、会社であんな目には合っていない。あの置時計は幾らぐらいするのだろう。先行投資の名目で、娘達の学資保険を解約したら妻は怒り狂うだろうか。僕の懊惱を所の笑いを含んだ声がバツサリと切って落とす。

「バカ、そんなじゃないよ、お前の脳波とCTをとらせて欲しい。研究の検証には、どうしても数が必要となる。病院関係者や医学生かたよの偏った脳味噌では不十分なんだよ」

「たった、それだけ？」

「ああ、準備を含めて約二十分。事務長に呼ばれたとでも言えば、会社は抜けられるだろう」

「勿論、でも、こんな脳みそが、お前の研究に役に立つのか？」

「確証はないが、かなり高い確立で、俺が探していた脳の持ち主だと思う」

「ふうん、これ以上、悪くなることがないなら僕は構わない」

「そうか、ありがとう。恩に着る。では、そっちの仕事の話に戻ろう。入札である以上、誰もが納得する形で落札してもらわねばならん。全ての数字を明かしてやるよ。お前はそれを会社に吞ませる

だけ。万が一、MSSやよその業者の数字がお前の会社を上回っても、今度は俺が一括納入の利を事務長に解^といてやる」

どの学業に於^おいても平均点以上は取れなかった僕の脳味噌に、こんな使い途があったのか。これが願望が高じて見せられた幻覚でないことを、僕は切に願った。

Booby Trap (ブービートラップ)

しかし、人は変われば変わるものである。僕の記憶にある中学時代の所は決して目立つ存在ではなかった。何せ、週に三日登校したら担任が驚いていたくらいだったのだから。誰も明言はしなかったが、自閉症ではないかといった噂もあつたくらいだ。

それが今や、上司たる教授は傀儡扱い、病院内での政治力までものにしてしまっているという。そんな彼の自信に満ちた物言いに、僕は畏怖すら覚えていた。

中学の三年間、皆勤賞だった僕は所家への連絡係を仰せつかった幸運を、数十年を経た今、実感している。昼間に感じた両親への小さな不平は、調子良くも健康な体に産んでくれた感謝へ姿を変えていた。

「また、検査を頼んだの？　これで何人目？」

片付けを終え、リビングに戻った梓が呆れたように言う。

「へえ、そんなに数が必要なんだ」

「石田君も深尾君もよ。伊都淵君の知らない高校や大学の同級生も含めたら二十人は下らないんじゃないかしら。家に招いた人全員に頼んでいるんだもの」

石田や深尾は僕より早く、成長し、妖艶さを身に着けた梓に謁見出来ていたのか。腹立ち紛れに架空裁判の検事側証人リストから、その名前を削除する。それはともかく、二十分の検査で大きな取引をモノに出来るなら、躊躇う理由などない。疎遠になっていた石田達だったが、命に別状をきたすほどの異変を伴う検査なら風の便りぐらいには聞いたはず。で、あるなら脳波の検査など怖るに足りず。それにもし、僕の脳に重病の余兆でもあれば、所が知らせてくれるだろう。無料検診ぐらいに考えて置けばいい。何より僕の正面に座った梓の笑顔が、全ての不安を優しく包み込んでくれる……と、そ

の時は思った。

「で、いつ行けばいいんだ？」

「放射線科にCTの予約を入れないとな、二三日後ってところかな。決まったら知らせるよ」

「わかった。それで、えっと……」

「入札の件だな。任せておけ」

言い難くそうに交換条件の確認を申し出る僕を察知^{さつち}して所が答える。頭のいい人間との会話は、これだから助かる。

「また、いらしてね」

社交辞令と分かってはいても、こんな美人にそう言われ、のぼせ上がってしまうのは男の性なので仕方ない。玄関まで見送りにくれた梓の表情に、ほんの少しだが翳^{かげ}が射したように見えた。

「社交辞令じゃないの、私……」

僕は固唾^{かたす}を吞んで次の句を待つ。

「ううん、何でもない。おやすみなさい」

脳内で、恩人である所の細君を呼び捨てにし続ける後ろめたさは残ったが、あの時、梓は何を言おうとしたのだろう。後ろ髪を惹^ひかれつつ所の屋敷を辞した僕の思考は、それに埋め尽くされていた。

数日後、検査の準備が出来たとの連絡をもらい、僕は所の務める病院へと出向く。約束の時間に外来受付まで迎えにきてくれた彼に、放射線科へ脳波検査へと連れ回される。脳波を調べる間は、本でも読んで寛いでいろ、ただし絶対に眠るなよと、所から渡されたのは学術書だった。閉じようとする瞼の圧力に必死に抵抗したが、数分は夢の中だったかも知れない。難しい顔をして脳波計を眺めていた所には気づかれなかったようで安心した。

「よしっ、これだ」

所の声が僕に覚醒^{かくせい}を促す。

「え？どれ？」

「お前の脳波だよ、CTの方は後で見るが、俺の要求を満たして

くれるのは、どうやらお前の脳味噌のようだ」

「これがか？」

僕は自分の額に指を当てた。学業において、傑出した成績を残せた分野は何もない。その脳味噌を有難がる所が不思議ではあったが、所の期待に応えられるイコール僕の営業成績アップといった図式の完成に近づいたように思え、笑みがこぼれそうになった。

「念の為に聞くんだが、変な病気なんかないよな？」

「お前の脳にか？ああ、健康そのものだよ。どうだ、今夜も家へ来ないか？例の数字を渡せると思うんだ」

行くさ、行かいでか。思い切り首を振る僕の頭から、いくつかの電極が外れ落ちて所は顔をしかめた。

玄関への出迎えが梓だったのは嬉しかったが、ガレージに所のボロボロがなかったのが気になった。今回の訪問の主たる目的は豪華なディナーでも梓との胸弾む会話でもない。例の数字を一刻も早く手に入れたかった。所の所在を訊ねる。

「夕方に一度戻って、伊都淵君に渡せて封筒を置いていったわ。急な手術が入って、助手についたみたいなの。折角、来てくれたんだし上がって行かない？うちは子供が居ないから、一人じゃ、だっ広さが余計に寂しく感じてしまうわ。話し相手が私では不満かしら」

数字の入手が確実なら、梓と二人きりで話すひと時に不満などあらうはずがない。

お父さんは、決して変な気持ちではない。お前達を養ってゆくためのコネクションを深めるために、その人の奥様の退屈を紛らわせてあげるだけで…訳の分からない言い訳を、一瞬、浮かんだ妻と娘達の顔に、ぐいと押し付ける。

「お腹は空いてない？創太郎が戻らない時は私も夕飯はとらないの。でも、ビールとお飲みぐらいなら用意出来るわ」

「どうぞ、お構いなく」

梓がくすつと笑う。

「石田君達は、昔のように岩下って呼ぶわ。話し方も昔のままよ。伊都淵君もそうなさいな」

「僕は、その…ほら、仕事でお世話になる訳だし」

「なんだか、寂しい」

目を伏せた梓の横顔に、僕の胸は高鳴る。

「伊都淵君、昔は僕なんて言わなかった。クラスのリーダーシップをとっていたあなたは、俺についてこいって感じで、セクハラ教師も弾効してくれてたじゃない。男らしく頼もしかったあなたを私は大好きだったのよ」

同窓会などで「俺は昔、君が好きだった」などという明らかにラブアフェア狙いの台詞を口にする連中は少なくないが、それはすべからく男の所業である。そんなタブーがこぼれ出る梓の唇に僕の視線は釘付けになっていた。二人目の娘を産んだ後、腰周りとショーツの面積が肥大していった妻の方が三つ若かったが、その妻と目の前の梓には、例えるなら秋刀魚がメインディッシュの和食と、高級ホテルのフルコースディナーほどの開きがあった。

「こ、こんな立派な家に住んで、調度品も凄く高そうだ。何不自由ない暮らしってのは、こうゆうのを言うんだらうね。所は立派なお医者さんだし、僕とはえだいちがいだで」

唾液の分泌が滞り、語尾に余計な濁点が増える。

料理が金額差だけだったら、即座に道徳心を投げ捨てていただろう。しかし、所への恩義と家族への責任まで放り投げる蛮勇は奮えない。

「彼が必要としているのは、優秀な助手としての私。妻でも女でもないの」

口腔の乾きを潤すべく梓が注いだビールをあおる。いつもより苦く感じられるのは、後ろめたさがそうさせているのだろう。

「…お願い」 そう囁いて僕の首に腕を巻きつける梓の胸の膨らみを肩に感じ、僕の股間は怒張す…るはずが、そうはならない。そ

れほど飲んではいないのになど、股間に視線を落とした僕の顔をグ
イと捻じ曲げ、梓が唇を重ねてきた。しかし、挿し入れられた舌の
感触を堪能する間もなく、僕の意識は遠のいていった。

この時……いや、僕がかんせい陥穽に墜ちたことに気づくのは、もう数時
間を費やすことになる。正しくブービートラップ（バカが引っかか
る罠）であった。

Confinement (幽閉)

目が覚めた時、僕に先ず課せられたミッションは状況の把握だった。体を起こそうとするのだがびくともしない。四肢はおろか、胸部も頭部もきつく固縛されているようだった。何が起きているんだ……視線が届く範囲で周囲を探ってみる。頭部に感じる違和感は電極でも張り付けられているのか、ワイシャツもズボンも脱がされていた。となると先ほどの出来事は夢で、未だ脳波の測定中だったということなのだろう。と、安堵の息を洩らしかけて気づく。壁の色が違うし助手も居ない。と言うことは……

病院で見たのと同じ脳波計と数基のモニタに向かう背中中は所のようだった。

「所か？」

悩んでいても仕方ない。僕は声を上げた。所が振り向いた。

「おう、起きたか」

「うん、ここは病院か？ 部屋が変わったのかな？ 眠ってしまったようだ、すまん」

「いや、ここは自宅地下のラボだ。眠ったのは薬のせいだよ、気にするな」

薬？ 頭部CT前も、脳波検査の前もそんなものを口にした記憶はなかった。

「ええと……これは夢か？」

「夢なら、こんなにしつかりした会話にはならんだろう」

所は、くつくと笑って僕の足元に歩み寄った。梓との密事をどうにかして知った彼の怒りを買った結果がこうなのか。あちらは未遂で終わっている。それに、僕は決して積極的ではなかった……はずだ。ちゃんと説明すれば入札の件にも猶予が与えられるのではないか、と僕は粘り腰を見せる。

「すまん。他にも謝ることがある」

「梓が誘ったんだろう？ お前が謝ることはないさ」

え？ やはり知っていたのか。しかし、怒ってないなら何故、僕を縛るんだ。それに梓はどうなった。数十年ぶりに再開した同級生をこんなふうに扱う男だ。殴られてでもないなければいいが。健気にも彼女の身を案じる僕の頭の上から涼やかな声が聞こえてきた。

「そうよ、伊都淵君はハルシオン入りビールを飲むのが早過ぎだわ。私はお楽しみの後でも全然、構わなかったのに」

声の主が僕の視界へと姿を現わした。頭痛が明瞭な思考に枷をかけていて次の言葉を見出すのに一分ほど、かかってしまった。

「グルだったのか……」

「その表現は正確ではないわ。あたしは創太郎の共同研究者なの」

「お前ら夫婦だろう。俺が梓を抱いてたらどうするつもりだったんだ。梓の不貞未遂は責めないのか」

僕の幼き憧憬につけ込んだ策略への抗議と、あわよくば嫉妬心が仲間割れを引き起こしてくれるのではないかとの期待を、所の言葉は無残に打ち砕く。

「くだらん、生殖行為など犬やサルでもする。動物との差異を見出そうと、そこに愛だの恋だのを絡ませようとするから、ややこしくなるんだ。そうは思わんか？」

「思わんね、セックスは本来、愛情の交換であるべきだ」

女性の裸体は美しいと思うが、それを商品化した行為に僕は価値を認めない。いわゆるアダルトビデオを僕が観ない理由はそこにあった。友人達は、そんな僕を変人扱いしたものだ。

「見解の相違だな、まあいい。俺はそんなことで梓を責めないし、お前に俺の意見を押し付けるつもりもない」

「それなら、お前等は僕をどうしようというんだ」

「研究だよ、最終段階に入っている。その被験者をお前に頼みたい」

「これが人にものを頼む態度か。まず、これを解いてくれ」

「だめだ」

「そうよ。伊都淵君が、うんって言うはずないもの」

うんと言うはずがないようなことを、されようとしていた僕は考えた。とりあえず時間を稼がねば。今が何日で何時なのか分からないが、帰らぬ僕を心配した妻が何かしらアクションを起こしてくれるはずだ。『重役出勤とは大層なご身分だな』 若しくはそんな課長の嫌味メールでもいい。そうだ、携帯は？ そしてはたと気づく。梓と二人きり、あらぬ期待に携帯電話の電源を切っていたことを思い出した。それが入った上着もここにはないのだろう。マヌケは罪であることを悟った。しかしマヌケにも自分を守る権利ぐらいはある。この窮地は自力で乗り切ってやる。僕は抵抗を試みる。

「聞いてみなきゃ分からんだろう。説明ぐらいしろよ」

「よからう」

所がラップトップPCの乗ったテーブルを僕の目が届くところまで滑らせてモニタをこちらに向けた。

彼の説明は、ERPがどうの誘発電位がどうのと難解を極めたが、要約すると、おそらくこんなところだ。脳波というものは神経細胞の電位的変化を表したもので、物事を認識した時にP300波というものが発生するらしい。300ミリ秒で大きな減値を示すところからそう呼ばれる。その300という数値を限りなくゼロに近づけることが出来れば、脳は飛躍的な進化を見せるはずだ。ある薬品がニューロンの増殖とシナプス伝達を活性化させるのを発見し、ラットやサルでは画期的な実験結果が得られた、と――

脳に関して、持つてはいても活用は苦手。無論、観察などしたこともない僕である。多少の誤謬は含まれているかも知れない。

「探したよ、頭のいい人間なら病院にも大学にも多くいる。しかし、新大脳皮質のサイズがサル並みというと、そう簡単には見つからない。そんな時、お前の中学生時代を思い出したんだ。弱いくせに喧嘩っ早い、内申書も気にせず教師には突っかかる。そんな人間を探していたんだ」

肉体の自由が効いたなら、僕は同級生を殴りつけていただろう。言うに事欠いてサル並みの脳とは何ごとか。

「次からは病院で見かけた知り合いには知らんふりをするでしょう」
「病院に現れたお前と俺が逢ったのは偶然ではない。興信所に頼んでお前を見つけ、ああなるように仕組んでもらったんだ。KYの課長も協力者だよ。俺は狙ったものは必ず手に入れる」

僕は本当におめでたい。こんな男に義理立てして梓の誘惑を拒もうとしていたのだから。いや、誘惑には乗ろうが乗るまいがこうなっていたか。いっそ……不謹慎な考えを頭の奥に追いやり、沙悟浄への新たな復讐を誓った。その機会が訪れてくれることを願って。

「ここで頭を開かれるのか」

「安心しろ、そんなことはしない。手術の設備は揃っていないからな。投薬だけだよ」

どうして安心など出来るものかとは思ったが、頭を切り開かれないうちに安堵してしまう僕の新大脳皮質は、やはりサル並みなのかも知れない。

「とんだマッドサイエンティストだな」

「その言葉が当時あれば、エジソンもアインシュタインもそう呼ばれていたのだろうな。俺にとっては賛辞にしか聞こえんよ」

興奮が失態を犯しやすくするそうだが、冷静沈着に語り続ける所の牙城は難攻不落に思えた。もし、それを攻め落とすことが出来たとしても、梓が残っていた。諦観が僕にのしかかってきた。

「考えてもみろ、人間が如何にひ弱かを。これだけ科学の発達した現代でも地震一つ満足に予測出来ない。自然の猛威は去るのを待つしかないんだ。情けなくはないか？ しかも、技術の進歩は頭打ち。時代はソフトウェアの進化を要求しているんだ。つまり脳の開発だよ。俺はそれに気づいたんだ。お前に進化の先取りをさせてやろう。神の領域を見せてやるよ」

「本当にそんな事が出来ると考えているのか？ だとしたら、お前等は狂ってるぞ。進化ってのは遺伝子に環境が働きかけた結果に起こる突然変異の積み重ねなんだ。そしてそれは必ずしも調和のとれた変化をもたらすとは限らない。僕の脳味噌が壊れてしまうことだ

ってあるんだぞ。そんなゼロサムゲームに同級生の僕を付き合わせようってのか」

僕は何かの本で読んで覚えていたフレーズを口にした。後半が泣き落しみたいになってしまったのは情けなくもあったが。

「うろ覚えの知識をひけらかすなら相手を選べ。俺は脳神経外科医だ。遺伝子に関する知識なら梓だってお前より遥かに詳しいんだ。それにゼロにはならん。ラット、うさぎ、サルと失敗例は皆無だ」
物言うモルモットの運命は風前の灯火だった。

「創太郎、時間がないわ」

梓に促された所が、弁舌に終止符を打ち、テーブルの引き出しからポリ容器をつまみ上げた。

「時間稼ぎは終わりだ。これがそのP300A^{アクセラレータ}だ。細かな理論や成分を説明したところで、お前には理解出来まい。新大脳皮質のサイズはそのままにニューロンの濃度を上げる。俺達はそれを脳度と呼んでいる。

何とでも呼べ、嚙下しなきゃ済む話だ。僕は口を固く結んだ。

Arousal (覚醒)

「嚥下しないつもりか？」

何故、分かるんだ？ きつく結んだはずの唇が痴呆のようにぽかんと開く。

「脳波計が繋がってることを忘れるな。そういうこともあるだろうと思って、お前が眠っているうちに投薬は完了している。薬効があらわれるのに約四十分、そろそろのはずだ」

え？ もう飲まされちゃったの？ そんな殺生な……きつと僕の眉尻はだらりと下がったことだろう。

「ははは、いちいち判りやすい反応を示してくれる。お前なら、脳波計などなくとも表情を見ているだけで十分だったな。ついでに、もうひとつ、がっかりさせてやろう。さっきの時間稼ぎの目的は、会社か家族が行方を探してくれることを期待したんだろう。お前を見つけた出した興信所の調査員が、学会のお供に五日ほどお前を借りると伝えてくれている。奥さんにはどうぞと、言われたそう
だ」

あのバカ……うだつの上がらない営業マンに医師のお供が勤まる訳がないだろう。不貞未遂は棚上げして呑気な妻を責める。

「五日だって？ 今日は何日だ？ 入札の説明会はどうなる？ あの約束もバックれるつもりだったのか」

「この前、お前と一緒に居た青年が行くさ。まあ、見ていろ。お前が覚醒したら数字なんてものは何の意味も成さなくなる。理論通りに行けばの話だな」

「理論通りに行かなかったら、僕はどうなるんだ。死ぬのか？」
「失敗例は皆無だと言ったろう。さあ、お喋りは終わりだ、楽しかったぞ。こいつは覚醒した時のお前を思っていることだ。悪く思ふな。梓」

所の合図で、梓は僕の口にマウスピースを押し込み、皮製のベル

トでベッドに固定した。睨みつける僕を見返す梓の瞳は、子供を
やす母親のように穏やかだった。

激痛、そんな言葉で表現し切れないほどの痛みだった。万力に頭
を挟まれ、ぎりぎり締め上げられ破裂する寸前だともいえば分
かってもらえるだろうか。元はといえば彼等のせいである。恩など
感じないが、マウスピースと拘束バンドなしでは舌を噛み切ってい
たかも知れない。

苦悶の海に溺れかける僕に、所の声が届く。

「身体に関わる情報は全てシナプス伝達で脳内情報に置き換えら
れる。誘発脳波の値が尋常ではない。自然脳波を越えるレベルで発
生しているんだ。微弱な痛みも増幅されているはずだ。生存本能に
頼って無意識に行われていた操作を意識下に置き。アドレナリンの
分泌も、痛覚の回路遮断も、今のお前なら制御出来るはずだ」

他人事だと思って好き勝手言ってくれる。僕の脳味噌のどれがそ
のカタカナ名称の部品で、どうやって回路の遮断をすればいいんだ。
分泌のコントロールも聞かされていないぞ。これか？ 違うな……
しかし、これほどの痛みによく気を失ったりしないもんだ。そん
な思考が幾つも並行して頭の中を流れて行った。

「肉体、感覚、全ての指揮権はお前の脳にある。そのことを自覚
しろ」

分かったってば、これか？ 一気に苦悶の海は消え、ヤシの木が一
本だけ生えた小島にうちあげられたイメージが湧いた。ふう、痛み
は去ったぞ。あの回路を覚えておかねば。その司令に正確なアドレ
スが刻み込まれた。

どうしちゃったんだろう、感覚が研ぎ澄まされるというのは、こ
んな状態を言うのだろうか。全ての思考がクリアで規則性を保ち、
雑駁な情報が奔流の如く迸っているのに、感情には小波ひとつ立っ
ていない。

「痛みは治まったか？」

問い掛ける所が、痛みを堪えた涙で滲む。

「ああ、ひどい目にあわせてくれたもんだ」

「感覚に変化はある？　今まで見えなかったものが見えるとか、聞こえなかった周波数域に聴覚が反応するとか……」

梓に目線を振った。この部屋で同じ苦しみを味わった実験動物の怨念が見えると言っても言って欲しいのか。幼き憧憬を弄ばれた僕の怒りが、携えたバインダーにペンを走らせる梓へと向かった。

ぐわっ、と獣のような声を発して梓がしゃがみこむ。人の好い僕は、怒りを忘れて梓を案じる。視界からはみ出した彼女の姿は見えない。

「どうした？　大丈夫か？」

「ええ、今、何か大きな圧力が、私の頭の中に」

「それは自責の念ってヤツだろう。僕のじゃないよ、他の実験動物君達のだろうな」

助け起こした所によりかかったまま、梓は僕をきっと睨みつける。ゴルゴダの丘で磔にされたメサイア同様、未だ身動きひとつ出来ない僕だったが、案外、気の利いた嫌味を言えるものだ。今のところ命に別状はない。拘束が苦にならなく思えてきたのは、彼等に一矢報いることができたせいなのか。よし、もういっちょ。

「悪魔に魂を売り渡した罪深き子羊が二頭見えます」

「俺に言わせれば悪魔はお前だよ、徐波、速波共にデタラメでアーティファクトも雑多だ。こんな波形は動物の脳波にもなかった。お前は今、何を考えているんだ」

「僕をひどい目に合わせた二人を誰にいいつけてやればいいかと考えてる」

「余裕だな」

言葉の端々《はしばし》に戸惑いと狼狽が感じられた。所の目から、先ほどもまでの冷淡な光が消え、視線は彷徨いがちになっている。精神的な立ち位置はイーブンにまで押し戻したようだ。

「次はどうする？　俺がどう変化してればお前は満足なんだ？」

「とうとう？俺？になったか。言っておくが被験者と観察者の立場は何も変わってはいないぞ。身動きの出来ないお前だ。筋弛緩剤^{きんしかんざい}でも静注^{せいちゅう}すれば一巻の終わりなんだからな」

物騒な台詞ではあったが臆^{おく}する必要などない、と、どこからか声が聞こえる。《拘束もなきが如し。ただ、今は、まだその時ではない》所に病院で出会った時に雇ったナノサイズの僕らーズ、彼等のそれぞれに人格と知性、そして適正なポストが与えられたような感覚だった。彼等のアドバイスに従っていれば間違いないとの確信が生まれていた。

所の指摘通り、変化した一人称に合わせて彼等の呼称もオイラーズへと昇格させておこう。オレラーズでは些^{ちか}か語呂^{ごりよ}が悪い。

Escape (脱走)

「さすがにサルのようにには行かないようだな。このまま脳波の記録を続ける。CTを撮りたいところだが、こいつが大人しく病院まで連行されるとも思えない。勤務の間に善後策を考えてくる」

「私は、もう暫く観察を続けるわ。可愛い奥様役は当分、休業。食事は外で済ませてきてね」

「ああ、分かった」

重い扉の締まる音、スチール製の階段を上る足音が轟音きょうおんのように鳴り響く。聴覚のボリュームをミュート寸前まで絞ってみた。それでも、たくさんのノイズが入り込んでくる。それは五感の全てに間断なく降り注いでいた。なのに思考の透明度は下がらず幽谷の湧水のように澄み切っている。俺はどうなってしまったのだろう。所の言った通り、これが進化の具現なのか。既に自己の位置把握からは脱却し、そんなことを考えていたのだが、所と梓の会話が声の抑揚まで包括して保存される。脳の情報処理能力は格段の進化を遂げていた。俺は聖徳太子か、不遜なつつこみが、唇の端を持ち上げさせた。

「では、検査開始。怖がらないでね、血圧、脈拍、体温を調べるだけだから」

所の去ったラボに梓の声が響く。

怯えているのは君のほうだろう。梓の声が、呼吸が、体温が、恐怖に侵食されていた。感じる？ いや、見えるのか。上手く説明出来ないが、何故だか分かってしまう。それが一番正しい表現だった。DNAは出来る端からから精緻な規則に則って折り畳まれてゆくという。あれと同じで、自然に分かってしまうのだ。そして目を凝らすと、梓の頭部付近に色とりどりの細かく震える繊維状の物がちらちらしている。あれは、一体、何なのだろう。そう思った瞬間、蓄積しているはずのない記憶。病院での脳波検査の際、所から手渡さ

れた学術書に書かれた文字の羅列がぱつと浮かんだ。あれが、脳波か……空間に漂う種々雑多な電位は静電気や電子機器が発する電磁波なのだろう。それらとの干渉を避けながら、梓の脳波は振幅を繰り返す。驚きを表わすのがあれ。恐怖はこれ。情報は速やかに整頓され、アドレスを割り当てられては格納されてゆく。はあ、所が言っていた数字は意味を成さないというのは、このことだったのか。もう少し脳のコントロールに長ければ、俺は心電図にも脳波計にもなれる。腐れ事務長や沙悟浄課長にへいこらすする必要などない。神の領域は大袈裟だが、他人の意志に介入出来るということは、大きな権力を手にしたのと同じことだった。

元来がお人好しな俺は、梓を気の毒に思い、怯えの突起を静電気を用いて滑らかにしてゆく。彼女の瞳に落ち着きが戻った。同時にかなりの確率で、先ほど梓に苦痛を与えたのが俺の仕業だったのだと気づく。

その昔、読んだ本にあった”大いなる力は高潔な精神に宿るべき”との行を思い出す。人工的に能力を持たされてしまった俺は、どうすればよいのか。これからでも頑張って高度なモラルを構築すべきなんだろうか。意趣返しの後でもいいよな？

その問い掛けにオイラーズは揃って沈黙する。

拘束も無きが如しのフリーズを思い出し、革製のベルトを緩めてみようとするのだが、髪の毛一筋ほども動いてはくれない。力の使い方が間違っているのか、それとも微細電流の操作だけが俺に芽生えた能力なのか。これにもオイラーズは答えない。自分の内にはない知識は語れないということなのだろう。

当事者の俺に把握出来てないものを、所や梓が理解しているはずはないが、この力をもたらしたのはP300Aであり、それを開発した所であるといった事実^{あなた}は動かせない。彼の頭脳を侮^{あな}ってはいいけない。能力の全容把握に力を注げ。彼らに先んずることが出来ねば、今、梓が抱いているイメージ——テリーヌのようにスライスされた俺の脳味噌——そんな運命が待つのみだ。

「何を飲ませたんだ？ A R A か、 D H A か？」

「あら、凄い。そんなのどこで覚えたの？ 早速、 P 3 0 0 A の効果が発揮されたのかしら。でも、残念。そんなありきたりなものでは老化の抑制にはなってもニューロンの増殖は起こしてくれないの。ついでに言うならアルギニン酸でもなければ H G H でもない。アルファ S A とでも言うておこうかしら。ソウタロウ & アズサの頭文字を冠してね」

凄い、その言葉とは裏腹に俺の問い掛けなど歯牙にもかけない様子で、梓は淡々と語った。

「ねえ、教えて。伊都渕君の頭脳は、どう変化したの？」

テリーヌを思い浮かべたままの質問に、まともに答える気になどなるもんか。

「さあね、その波形や数字の意味するところを理解するのは君の仕事だろう。皮肉は上手くなったかな。それ以外は、頭の悪い俺には分からんよ、何せサル並みの新大脳皮質なんだし」

俺の意識操作が、梓から怯えを取り去ったという自覚はないようだ。

「意地悪ね、ご褒美をあげるから教えてよ」

妖艶に微笑んだ梓が、トランクスから巧みに俺の代理人格をつまみ出し、あつという間にそれを口にふくんだ。眠剤の効果は切れていたはずだが、そいつはだらしなく弛緩したままで、俺の脳に何も伝えてこない。

「レイプされてる気分だな。女性が濡れないように、俺も反応しない」

痛覚のネットワークと一緒に快感の回路も遮断してしまっていたようだ。愛情のない性交に価値を認めない俺だったが、ちょっとした悪戯心が起こった。

「あなた、勃起障害なんじゃない？ え……何、これ？ 凄い……」
血流のダムを解放し、ついでに腹直筋を海綿体基礎岩盤として送り込む。俺の代理人格は偽りの猛々しさをもってそびえ立った。

「平常時の倍？　いいえ、それ三倍はあるわね。大したコストパフォーマンスだわ」

梓の目がネコ科の捕食動物のように妖しく光る。

「創太郎はマスターベーションで、抑制しているみたいだけど、私はそうは行かないの。このまま放って置くのも残酷でしょ？　鎮めてあげる」

何度も言うが、幼き懸想捧げた梓だ。排泄も放屁もしない女性だと信じ続けた彼女のそんな姿は見たくもなかった。

「後悔するぞ」

俺の忠告を無視するように、冷たい笑みを浮かべた梓は無言で視界の外に消える。衣擦れの音が聞こえる。

再び、視界の内に現れた梓が、白衣の裾をたくし上げ、俺に跨るように立った。ショーツは脱ぎさっている。彼女がしゃがむ動作に合わせて、すらりと伸びたきれいな足の付け根が、ゆっくりと俺を呑み込んで行った。瞬間、小さく艶かしい声を上げた彼女は、完全に俺を飲み込んだことを確認すると、エロティックに腰を揺すり始めた。

俺は梓が発する快感のうねりを探し当て、つまみ、ひねり、そして大きく揺らす。その都度、彼女は喘ぎ、叫び、嗚咽のような呼吸を繰り返す。そして、梓が歓喜の頂に近づくと、俺はその高まりを摘み取る。焦れて焦れて半狂乱になりかけたところで、彼女の意識を開放してやった。大きな悲鳴と共に俺の胸に倒れこんだ梓の熱い息が、シャツの薄い布越しに伝わってきた。白衣の背中は大きく波打ち、彼女の体温が静かに俺へと流れ込んできた。

「一体、どうなってるの？　私は、こんなにフラフラになっているのに、あなたは、まだ……」

俺の胸に顔を臥せたまま梓が囁く。

「セックスを単なる欲望の発散とか、男を騙す手段としか考えてない君が哀れに思えてね。集中が出来なかったんだ。思ったほど、所に大切にされてもいないようだな。もう十分だろう？　これは豪華デ

イナーへの心ばかりの返礼だと思ってもらおうか」

梓は睨む目になった。意識を操作する必要などない。少しでもだけプライドを傷つけてやれば簡単に挑発に乗ってくる。彼女は喘ぎ、叫び、果てるを繰り返した。二時間か……女は凄いな。ラップトップの端に表示された小さな数字を読んだ。運転免許試験の適正検査が眼鏡ナシでぎりぎりだったことを思い出す。視力も改善されているようだった。

かなりの時間をかけて呼吸を整えた梓は、俺から降り立つと、こう言った。

「分かってる？ あなたはこのラボの囚人。創太郎と私の知識欲を満たすだけじゃない。これからもずっとこうしてもらおうよ」

「そうなんだ、じゃあハイソなお宅のディナーには似つかわしくないかも知れんが、次は自然薯でも摺りおろしてもらおうとしよう。君の底なしの欲望に応えてあげるんだから、ささやかなリクエストだろう？」

軽口が女王様の自尊心を傷つけたようだ。俺を見下ろす瞳に怒りの炎が灯った。

看守が二人になると面倒だ。そろそろ退散するとしよう。梓の脳波を俺の意思に沿ってねじ曲げるには、アセンブリ言語も特殊なコマンドも必要ない。ただ、見つめるだけでよかった。瞳に意思の光を失った彼女は、かちゃかちゃ音を立て俺をベッドに縛り付けていた拘束具を外し始めた。

Anxiety (不安)

「これは、一体……」

地下のラボに戻った所が目にしたのは、介護ベッドに固縛された梓の姿だった。ドアの閉じる音、所の声に気づき、梓は首を目一杯捻った。

「創太郎なの？」

ベッドに歩み寄り、皮製バンドの拘束を解きながら所は訊ねる。

「あいつは君に何をしたんだ」

「ごめんなさい、何も覚えていないの。気がついたら伊都淵君は消え、私がここに……」

何が起こったんだ、伊都淵は梓の意識を操作したとでもいうのか。そんな安物のSF小説みたいなことが……だが、そうとでも考えないと、この状況は説明出来ない。

失態に気づいた梓は、所に戻る前になんとか拘束だけでも解こうともがいたのだろう。鬱血した手首をさすりながら、心配そうに訊ねる。

「どうすればいい？ 彼が警察へ駆け込んだりでもしたら、私達は破滅よ」

所はふむ、と言って腕を組み、考え込む表情になった。そして徐ろに口を開く。

「そうはすまい。あいつの経済状況は逼迫している。俺の誘いに疑いもせず、のこのこやってきたくらいだからな。おそらく入札のためにKYに戻るのではないだろうか。脳の開発、門外漢にとって、これほど荒唐無稽な話はない。それを警察に持ち込んで信じさせるのと、どちらを優先すべきか。今のあいつなら、そのぐらいの判断を間違うはずはない。ついでに自宅へ戻ってくれるといいんだがな。そうなればヤツの戻るべき場所が、ここしかないことに気づくはずだ」

「どうゆう意味？」

「いづれ分かる。それに増殖したニューロンが死滅した時、あいつはもとのボンクラに戻ることを知らない。また、その反動が実験動物と同じなのかどうかも予測不能だ。貴重なサンプルだ、車にでも轢かれたら困る。もう一度、調査員に頼んでみよう」

「ねえ、創太郎、彼の脳はどう変化したの？」

「動物実験のレポートは読んだだろう。知覚、認識力共に格段の進歩をしたのは間違いない。しかし、時定数を最大にしても測定不能な脳波などは見たことがない。俺の想像を完全に上回っているんだ。それがどれほどのものかを知るには、あいつを捕まえて実験を続けるしかない」

「大丈夫？ 私、何だか嫌な予感がするわ。だって……」

「予感？ そんな根拠のないものに惑わされるんじゃない。全ての事象は原因があって然るべき結果につながるんだ。膨大な情報処理能力を得た伊都淵が、君に催眠術をかけることなど雑作もなかったはずだ。合理的に考えれば、それしかない。君もそう思うだろう」

梓が言い終わる前にその言い分を一蹴したのは、所自身、同じ不安を感じていたからに他ならない。しかし、それを認めれば、梓と同じ恐怖に囚われることになる。彼にピプノセラピーを口にさせたのは、それが理由だった。

硬い表情のままの梓を解きほぐすように口調を緩める。

「心配は要らんよ、今はまだ伊都淵の進化が、どこまでのものか把握出来てないから、そう感じるのだろう。人は未知なるものを恐れるというからな。検証さえ済めば、全ては俺達の掌の内。君の不安も早晚、取り除かれるさ」

しかし、もし梓の不安が的を射てるとすれば……最善を願い最悪に備える。自身の処世に則り綿密な計画を立てる必要がある。所は電話を手を取った。

Peace of mind (平安)

所邸のリビングに戻った俺は、梓に預けたはずの上着を探すが見当たらない。ラボで見つけたワイシャツとズボンを身に着け、所のサンダルを拝借して外に出た。真夏の太陽が照りつける。ラップトップに示された十時二十分は正確だったようだ。

ガレージ脇に停めたはずの車齢十五年のマイカーも消え失せていた。徹底して、俺の痕跡を消そうということか、あいつ等、本気で俺を……薄ら寒いものを覚え、ワイシャツの襟寄せた。同時に鼻腔に生暖かいものを感じて拭った手の甲が赤く染まる。鼻血だった。ささやかな復讐心が芽生え、それを門扉にこすりつけてやった。

さて、どうしたものか。能力の掌握も沙悟浄課長へのリベンジも懸案事項ではあったが、先ずは悪夢のような体験を誰かに伝えるのが急務に思えた。警察や友人が頭に浮かんだが、オイラーズが却下する。《誰がそんな奇想天外な話を信じるものか》と。

車を奪われた上、財布の入った上着もナシでは移動手段は限られてしまう。家に帰って、妻の幸に伝えよう。泥棒さん、いらっしやい。カーテンゲートを大きく開け放したまま俺は歩きだした。

歩くこと約二十分、敷地面積四十坪ほどの建売が八棟建ち並ぶ川手エステートにたどり着いた。こ洒落たネーミングは施工業者の悪趣味が反映される。住民は、ほぼ共稼ぎで昼日中は静寂に包まれ、唯一、それを破ることの許される幼児の声もない。小さな町並みはゴーストタウンの風情すら漂わせていた。

安物買いの銭失い？ 水垢の付きにくい光触媒使用？ のはずの外壁には雨だれがゼブラ模様を描き、バルコニーと呼ばれる洋風物干し台の床材は子供が飛び跳ねただけでヒビが入る。そんなクレームに購入後、二～三年はせつせと修繕に足を運んでいた不動産業者も昨年暮れに倒産。二十年保証は宙ぶらりんとなっていた。

『誠実そうなセールスさんね、この人が薦めるのなら、信用出来るんじゃない?』と、購入を急かした妻は『あなたがよく調べなかったから、こうなったのよ』と、取り交わした覚えのない責務の不履行を詰った。夫婦間に数々の亀裂を生じさせたこんなものに、まだ二十年近くもローンを払ってゆかねばならないのか。普段なら、そんな憂鬱と肩を並べての帰宅だったのだが、今は違う。

自宅へ向かう途中で気づいたのだが、悪意の如き太陽の熱射も不快感の伝達を切れば小春日和の温もりに変わり、横断歩道でクラクションを鳴らされても『君は急いでいるんだね、ゆっくり歩いててすまない』という気持ちになってしまう。なんと言えばよいのだろう。劣化した皮膚の老廃物を、モイスチャージェルでこすり落としてゆくように、感情の中から尖ったものが消え、潤いのみが残る。そんな気分だった。俺の心は夕風のように穏やかさを湛え、一人称を私にアップグレードしてもよいとさえ思った。

が、ワタクシーズでは、俺ラーズより更に語呂が悪いので諦める。
「はあい、早かったわね」

玄関のチャイムを押すと妻の明るい声がインターフォンから流れる。玄関を開けて出迎えた彼女は、珍しくきちんと化粧をしていた。

「え……貴之?」

「えって、何だよ、ここは俺んちだろう。医者のお持ちちって話を真に受けてたのか? あれは嘘だ、ひどい目にあった。信じられないような話だろうけど聞いて欲しい。コーヒーを煎れてくれないか」
「う、うん」

返事はすれども、妻は動かない。彼女の視線は俺を通り越し、閉じられたドアの向こうへと投げかけられる。

「どうしたんだ? 様子がおかしいぞ。具合でも悪いのか?」

妻は妙に落ち着きがない。脳波は動揺と困惑のそれが大きく振れていた。

「そうじゃないの。ただ、ほら五日間、留守にするって聞いていたから出掛けようと思ったところなの。あなたったら、急に帰ってく

るんですもの」

今度は虚偽の電位が上がる。何を隠してるんだろう。脳波の属性ぞくせいを確定すべく、俺は簡単な質問に切り替える。

「奈緒子と可奈子は保育園かい？」

「そうよ」

虚偽の電位は発生しない。色も波形にも個体差がある、オイラーズの一人に託した情報は、比較的浅い地番を割り当てられた。

通せんぼをするように居間への通路に立ちはだかったままの妻を押し退け、上がり込む。ローンがたんまり残っていようと、俺はこの家の家長である。何を遠慮することなどあるものか。居間の中心にでんと腰を据えた。

専業主婦の幸だった。一歳になったばかりの可奈子を保育園に入ねねばならない理由などない。保育費だって小さな子供ほど高いのだ。俺は反対したが、社会性を身につけるには、なるべく早くから集団生活に慣れ親しむべきだ。幼稚園を脱走してばかりだった俺たちは協調性に欠けるでしょう？ 今のあなたを見ていて、つくづくそう思うの。と、死んだ母から聞いた逸話を盾に迫られ、しぶしぶ了承したものだった。

妻はつい今しがたの肯定を再び繰り返す。

「子供たちは保育園よ。あなた会社は行かなくていいの？」

「少し休んだら行くつもりだけど、車をなくしてね。それも話さないといけない」

経済観念の発達した：有り体に言えばケチな妻が、車がなくなつたことを聞いて厳しく追求してこないのを不審に思った。それに俺は上着も着ていなければ、鞆も持っていない。サンダルも所のを拝借していた。妻は心ここにあらずといった体で、こう告げた。

「話なら会社から戻ってから聞いわ。あたしは出掛けるわよ」

どちらかが意思疎通の努力を放り出せば会話は成立しない。仕方ない、先に会社の方を済ませておくか。俺が腰を上げようとしたその時だった。インターフォンのチャイムが鳴り、続いて能天気な声

が聞こえてくる。

「みーゆーきちゃん、遊びましょっ」

娘の名は奈緒子と可奈子、三十四歳の妻にかくれんぼを誘いに来る輩が居るのか？ 妻は思い詰めた顔で唇を噛み締め、玄関へと小走りで向かう。俺もゆっくりと後を追った。

「だめだってば」幸にしなだれかかった男が、後ろからのっそりと姿を現した俺に気づいて、ギョツとした表情になる。色白で縁なし眼鏡をかけ、ひよろつとした三十歳前後の青年が、妻の首に手を回したまま凝固していた。妻が、えいやつとばかりにその手をふりほどいて気まずそうな顔になる。

「はあ、そういうことか。まおとこ間男君と約束してたのか、どうりで俺を早く追い出したがった訳だ」

「そんなじゃないわ、この人は……」

「この人は？」さてさて、この状況でどんな言い訳が出来るものか。俺は妻の言葉を待った。

唇を固く結んだまま、只今、言い訳の小部屋を家探し中……と、妻の脳波が伝えてくる。

「もういいっ、あなたが悪いのよ。この人はあたしをちゃんと女として扱ってくれる。寂しかったのよ」

上手い言い訳が見つからず（今の俺には、どんな巧妙な嘘も通用するはずはなかったが）我が細君は開き直られたようである。そして間男君は逃げ出せばいいものを、じつと、うなだれたまま動かない。長い前髪は俯いた彼の顔を覆い隠す。テレビに出てる若者は、ほぼこの髪型だな、彼等はどこで個性を主張しているのだろう。そんな疑問に、青年の思考が答えてくれた。《僕ってカッコいい？少なくとも旦那よりはジャニ系？》日本語としては全く成立していなかったが。

「どうするのっ、殴る？ あたしはサトシクンとは別れないわよっ」サトシクン、妻の脳波に漢字は浮かんでこない。片仮名の呼び名はどうにも軽薄さを助長する。当のサトシクンの膝は哀れにも震

えっぱなし。世間一般では修羅場と呼ばれる、この状況に相応しくはなかったが、噴き出しそうになる。

「殴ったりはしないよ。ええと、君は、この男性を愛しているのかな？」

亭主、怒り狂って暴れだすの図が妻の中では決定事項だったのだろう。事のほか冷静に関係を問い質す俺に、彼女は訝げな目になって答える。

「え、ええ……」

「だったら、仕方ない。こうやって、こそこそするのも精神衛生上良くないんじゃないか？ 離婚しよう、子供の親権はどうする？ 財産分与は……マイナスになるかも知れないな。おい、マオ……サトシ君だっけ？ こんなところで立ち話もなんだ。上がっておいで」

こっちの関係の整理から新たな関係の構築へと一気に話を進める俺に、うなだれていたサトシくんが驚いて顔を上げた。

「いや、僕はそんなつもりでは……」

じゃあ、どんなつもりだったんだい？ 《この手の男の話は、前置きばかり長くって核心にはなかなか到達しないもんだよ》オイラーズの忠告に従って、少々、彼の頭の中を弄らせてもらう。

「僕には結婚する予定の彼女が居て……でも彼女はお固いとゆうか、セックスが至極ノーマルで。そこへゆくと、幸ちゃんもセックスも手練てだれといった感じで、今回もご主人が出張ならラブホテル代が節約出来て……」

狡い男が、その卑しき心根に書き綴った定型文をすらすらと読みあげ始める。啞然として聞き入っていた妻の目に怒りの炎が燃え上がった。

女闘士へと変貌した妻がバチンと大きな音を立ててサトシくんに平手打ちを食らわせる。メガネは吹っ飛び、彼は思いきりドアに背中をぶつけた。さぞや痛かったろうに、それを表現する間も惜しんで大急ぎでメガネを拾い上げる。そして『失礼しましたっ』と
言って飛び出して行ってしまった。

偽りの愛を餌に、他人の妻とのセックスを楽しんでいたのだ。確かに失礼千万な行為だが、それでも俺の心の大海は緩やかに凪いだままだった。

Trust (信頼)

「もういいっ！　あなたが悪いのよ。この人はあたしをちゃんと女として扱ってくれる。寂しかったのよ」

上手い言い訳が見つからず（今の俺には、どんな巧妙な嘘も通用するはずはなかったが）我が細君は開き直られたようである。そして間男君は逃げ出せばいいものを、じっと項垂れたまま動かない。長い前髪が俯いた彼の顔を覆い隠す。テレビに出ている若者は大抵この髪型だな、彼等はどこで個性を主張しているのだろう。その疑問には青年の思考が答えてくれた。――僕ってカッコいい？　少なくとも旦那よりはジャニ系？――日本語としては全く成立していなかったが。

「どうするのっ、殴る？　あたし、サトシクンとは別れないわよっ」
サトシクン――妻の脳波に漢字は浮かんでこない。片仮名の呼び名はどうにも軽薄さを助長させる。当のサトシクンの膝は哀れにも震えっぱなし。世間一般では修羅場と呼ばれるこの状況に相応しくはなかったが、俺は吹き出しそうになった。

「殴ったりはしないよ。ええと、君はこの男性を愛しているのかな？」

亭主、怒り狂って暴れだすの図が妻の中では決定事項だったのだろう。事のほか冷静に関係を問い質す俺に、彼女は訝げな目になって答える。

「え、ええ……」

「だったら仕方ない。こうやって、こそこそするのも精神衛生上良くないんじゃないか？　離婚しよう、子供の親権はどうする？　財産分与は――マイナスになるかも知れないな。おい、マオ……サトシ君だっけ？　こんなところで立ち話もなんだ。上がっておいで」

こっちの関係の整理から新たな関係の構築へと一気に話を進める

俺に、項垂れていたサトシクンが驚いて顔を上げた。

「いえ、僕はそんなつもりでは……」

じゃあ、どんなつもりだったんだい？

《この手の男の話は、前置きばかり長くって核心にはなかなか到達しないもんだよ》

俺はオイラーズの忠告に従って、少々、彼の頭の中を弄らせてもらう。

「僕には結婚する予定の彼女が居て……でも彼女はお固いとゆうか、セックスが至極ノーマルで。そこへゆくと、幸ちゃんもセックスも手練といった感じで、今回もご主人が出張ならラブホテル代が節約出来て……」

狡い男が、その卑しき心根に書き綴った定型文をすらすらと読みあげ始める。啞然として聞き入っていた妻の目に怒りの炎が燃え上がった。

女闘士へと変貌した妻がバチンと大きな音を立ててサトシクンに平手打ちを食らわせる。メガネは吹っ飛び、細っこい彼は思いきりドアに背中をぶつけた。さぞや痛かったろうに、それを表現する間も惜しんで大急ぎでメガネを拾い上げる。そして「失礼しましたっ」と言って飛び出して行ってしまった。

偽りの愛を餌に、他人の妻とのセックスを楽しんでいたのだ。確かに失礼千万な行為だが、それでも俺の心の大海は緩やかに凪いだままだった。

居間のテーブルに突っ伏して妻が泣いている。

泣きたいのはこっちだった。家族のためにと唱えた、ならぬ堪忍するが堪忍を『寂しかったから』だけの理由で台無しにされた俺の身にもなってみろ。しかし怒りの感情は湧いてこない。妻が泣き止むのを見計らって、こう切り出した。

「俺は今から会社へ行くけど、早まった真似だけはするなよ。帰ったらじっくり話し合おう。実家のご両親にも相談してみたらどうか

な」

彼女の言う通り、俺は幸を女性として扱っていなかったのかも知れない。互いを貪り合うようなキスは遙か昔の記憶。いつしかそれもおざなりになり、セックスは単なるルーチンみたいなものに成り果てていたのだから。？泥棒にも三分の理？ そんな諺が書かれたパネルを、一人のオイラーズが掲げていた。所の前で力説した『セックスは愛情の交換であるべし』の金科玉条は、夫婦間に於いて虚構へと貶められていたのだ。それは俺に言いたいのか？ パネルを持ったオイラーズは黙って笑っている。

「なんで怒らないの？ 普段のあなたなら――」
そこで言葉を切った妻は、何かに啓発され、そして確信を得たかのように高らかに言い放った。

「分かった！ あなたも浮気しているんでしょう」

とんだ言いがかりである。確かに梓とのセックスもどきはあったが、快感の回路をシャットアウトした上、身動きの取れない俺はレイプされたみたいなものだった。その行為までも浮気とされたら身も蓋もない。

俺は頭の中で高校時代に読んだ哲学書を紐解いてみた。

信頼は互いの努力のみによって成立する、どちらか一方がそれを怠った場合、その輝きは速やかに色褪せるであろう。信頼を裏打ちする言葉そのものが、そもそも多くの虚飾に満ちているのだから。汝、もしそれを疑うならば、虚飾を取り去ってみるがよい。言葉の刃で互いを切り刻むだけとなるはずだ。そんなものに依存せねばならないコミュニケーションの何たる脆弱なことか。我が城は砂の柱、塩の柱に支えられているのだ。

終わりの方にコールドプレイの歌詞が混ざってしまったが、とにかく俺は会話の無意味さを悟り、沈黙を以って妻への返事に代えた。

シャワーと着替えを済ませ、出社の準備をする。鞆も携帯電話もナシ、財布もナシのないない尽くし。腰に差した剣は竹光、甲冑も

纏わずに戦場へと向かう武士の気分だった。、嘆きのフリーズを口ずさんだ俺だったが、玄関にある鏡は意外にも意気揚々たる姿を映し出していた。『盛夏でも得意先への訪問は必ず上着着用のこと』馬鹿げたドレスコードのため、クローゼットからシアサツカー生地ジャケットを出して小脇に抱える。

「言ってくるよ」

無言で頷く妻を残して家を出た。言葉通り会社に向かうつもりはなかった。古の誰かさん曰く？嘘も方便？である。俺は中学校を挟んで校区の反対側に位置する石田の家を尋ねるつもりでいた。自宅で建築設計の事務所を営んでいた彼なら、平日の昼間でも捕まえられるだろうと見込んで。

「伊都淵か？ 珍しいな、どうゆう風の吹き回しだ」

「近くを通りかかったもんでね」

期待通り、在宅していた石田が驚きの表情で出迎えてくれた。俺以外にもP300Aの犠牲者がいるのではないかと思っただけの訪問だった。それとなく所の話題に触れ、さりげなく地下のラボの存在を問う。石田の受け答えに虚偽の反応は出ない。そう言えばこいつも国立大学卒だったなと思い出すると同時に『必要としたのはサル並みの新大脳皮質の持ち主』のフリーズが浮かんでむかついた。

「深尾はどうしてる？」

「つい昨日、一緒に飲んだばかりだよ。嫁さんに三人目が生まれるそうさ。親方日の丸は気楽でいいよな」

深尾は公務員だったのか、そして彼も無事だと見える。どうやら中学の同級生に所の興味をそそる脳の持ち主は居なかったようだ。俺は世間話へと話題を変えた。

「ところで、景気はどうなんだ？」

「震災のお陰で建築需要はさっぱりだ。仮設住宅に設計図面は必要ないしな。今はこれで食っているようなもんだよ」

そう言って指さしたパソコンのモニタには折れ線グラフが表示さ

れている。このところ、こんな波形ばかりを眺め続けさせられていた俺はうんざりした声になる。

「何だ？　これは。所が脳波マニアなら、お前は心電図マニアか」

「バカ、そんなもので飯が食えるか。FXだよ」

外貨為替取引の略称だった。そう言えばFXでローンを返済した主婦が居るとか聞いたことがある。今や内職にも電脳化の波が押し寄せているらしい。俺は予定していた、もう一つを行動に移す。

「パソコンを借りていいか？」

「エロサイトのリンクをクリックしなきゃあな。スパムだけでサーバーがパンクしそうになるんだよ、最近は」

誰がそんなもん見るか。

パペッツの回路を舐めてはいけない。あれは一度仕舞い込んだ情報を絶対に削除しないという。思い出せない記憶というものは、片付け手がアドレスを振り当て忘れたか、振り当てたアドレスを失念したせいだ。俺は松井君の携帯にメールを送った。

——のっぴきならない事情により欠勤しました。入札の説明会はどうなってますか？　十三時までここに居ます。携帯はなくしました。この送信元に、ご返事下さい。伊都淵——

扶養責任を果たすべき家族との絆は希薄になりかけていたが、娘二人には何の罪もない。所の助けナシで機器納入の権利をモノに出れば、家族を路頭に迷わす心配もなくなる。俺はとことん人が良い。しかしセーフティネットは必要だった。

「なあ、石田、オンライントレードって難しいのか？」

「相場は生き物だからな、素人が下手に手出しますと大火傷をするぞ。こないだの大暴落で、俺の知り合いも何人がバンザイしたことか」

「バンザイ？　大儲けして喜んだのか？」

「違う、違う。バンザイはお手上げ、自己破産のことだよ。何だ？　興味があるなら教えてやるぞ」

「時間はいいのか？」

「ああ、設計事務所は、さっき言ったとおり開店休業状態だからな。ビギナーズラックで大儲けでもしたら小遣いぐらいは寄越せよな」

V i r t u e (善)

「へえ、じゃあギャンブル製が一番低いのはオプション取引ってことか？」

「ああ、これは理詰めだからな。原資産の種類が少ない分、戦略の自由度は高い。だが、お前のような素人には向いてない。チャートに張り付いて居られるような連中にかかれば、俄トレーダーなんかあつという間に丸裸にされちまう。確実なリスクヘッジとドンピシヤのタイミングでの仕掛けが必要なんだ。お前がやるなら主婦の皆さん同様、FXぐらいにとどめ——いや、これだって奥は深いぞ。だから俺もいつ依頼が来るか分からない設計事務所を閉められずにいるんだ。どうだ、分かったか？ 分からんよな？」

以前の俺なら、石田の言った通り、概要を聞いた時点で投げ出していただろう。しかし、今はオイライズという強い味方が居る。彼等によって対象銘柄と戦略は既に決定、解析ツールのプログラミングも脳内で完了し、タネ銭捻出の算段に入っていた。ただし、その素振りは見せられない。下卑たジョークを交え、以前の俺のままであることを匂わせる。

「さっぱり分からんよ。売り買いだけでなく、コールにプットにと言葉を覚えるだけで数年かかりそうだ。ところで、いいプッシーを知ってたら紹介してくれ」

そうだろう、そうだろうといった顔で満足気に頷く石田に、少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「メールだ、お前宛だぞ」

松井君からの返信だった。

『どこにいるんすか？ R. Matsui』

そんな短い文面までに？ す？ が付いていて思わず笑ってしまう。

「すまん、電話を借りる」

パペッツの回路の操作には随分手馴れてきていた。目的の電話番号を瞬時に探し当て、松井君の携帯を呼び出す。

——たまげたっすよ、伊都淵さんは何も言わずに居なくなるし、課長からは入札はお前に任すって言われるしで、俺は混乱しちゃったっす。

「ごめん、ごめん。メールに書いた通り、のっぴきならない用が出来てね。入札機器の一覧はもらってきてくれたのかな。

——ええ、元々、あれは伊都淵さんの案件ですしね。いつでも譲りますよ。でも、あのMSSと事務長の鉄の結束を打ち破る策はあるんすか？

「そんな、あいつ等に一泡吹かせてやれたら面白いとは思わないかい？」

——それが出来るなら、気分もいいでしょうけどね。MSSの連中、入札の前から全機納入するつもりで口ぶりだったっすもん。さっすがにむっとしましたよ。

「ひとつでも、うちで落とせば、それは松井君の成績。全滅だったら、受ける叱責は俺。だから数字は任せてくれないかな？」

——そんな条件でいいんすか？

「俺は以前、君に借りもある。ただ、課長には内緒にしておいて欲しいんだ。俺は鞆持ちを仰せつかった学会から戻ってないことにしておいてくれないだろうか」

——何だか分かんないけど、いいっすよ。どうせ十八時まで得意先回りで、入札の方は残業してやるつもりでしたから。他の連中が帰ってからやりましょう。あ……日高さんに手伝いを頼んであったんだ。断っておくっす。

松井君が挙げた女子社員の名前から、脳内にプロフィールを描き出す。確か、沙悟浄課長のセクハラの的にされていた入社四年目の地味な女性だった。

「もうひとつ、頼まれてくれないか。情けない話だが、車を事故で

潰《してね。社に戻る前に、俺を拾ってもらえないだろうか。

——お安いご用っす。

待ち合わせ場所と時間を決め、俺は受話器を置いた。

十九時を少し回った社内には、まだ数人の営業マンが残っていた。俺は松井君から五千円札を一枚借りて、斜向かいのカフェで時間を潰すことにする。給料日前のその金額は彼の懐にも少なからずダメージを与えたようで、俺の目がなければ樋口一葉と惜別の抱擁を交したに違いない。紙幣を差し出す松井君の瞳が潤んでいるように思えた。

「俺は帰っていいって言ったんすけどね。日高さんてば、やる気になっちゃってて」

松井君を残し、空っぽのはずのオフィスには日高依子ひだかよりこが残っており、本来、居ないはずの俺に少し驚いたような顔を見せた。

「出張じゃなかったんですね。何で課長はあんな嘘を言ったのかしら」

「さあ？」

例の謀議に課長がどこまで関与していたかを知るまでは迂闊なことは話せない。

「どうせ残業はつかないんだし、二人より三人。ちゃっちゃと終わらせて帰りましょう。パスタぐらいは奢ってもらえますよね？ 大丈夫、カップ課長には黙ってますから」

地味な印象しか受けなかった日高依子だったのだが、悪戯っぽくウインクをする彼女は、なかなかどうしてチャーミングな笑顔の持ち主だった。そして、彼女の思考には邪気も打算もない。同僚への労りのみがそれを占めていた。驚いたことにセクハラ課長への嫌悪の情もない。？いい人間？ そんなパネルをオイラーズが掲げる。ニッケネーム命名のセンスが似通っていたこともあって、俺は彼女に親近感を抱いた。

「書類は？」

「ここっす」

松井君がくたびれた鞆から病院名の書かれた封筒を取り出す。俺は中の書類を抜き出して、さっと目を走らせた。

「凄いな、上代のトータルは一億を超えるんじゃないか？ 全部うちで納入することが出来れば、たまげた課長の頭頂部に毛が生えてくるかもな」

俺の肩越しに書類を覗き込んでいた日高依子は、くすっと笑ったが松井君は乗ってこない。所の口添えで、単価の張らない機器の納入権を一〇二点拾えれば御の字。彼の見通しはそんなところだったのだろう。

日高依子が体を離す。フルーティな香りが俺の鼻腔をくすぐった。
？ インカントドリーム？ そんな銘柄の香水だったようだ。

「？れば？ の話っすよね。でも、今日の事務長の様子じゃあ、既にMSSに決まったような口ぶりだったすよ？ そうだ！ 例の准教には口を利いてももらえそうなんすか？」

「ああ、まあね」

詳細を語る訳には行かないし、真実を告げた所で松井君が信じると思えない。人生の落伍者が語る夢物語だともとられるのが関の山だったろう。

「日高さん、機器の資料を全てプリントアウトしてくれる？」

「りょうかいっ」

彼女はおどけた仕草で敬礼すると隣のデスクのパソコンに向き合った。明るい子だな、沙悟浄のセクハラから解放してあげられればいいのだが。俺はそんなことを考えながら、オイラーズにミッション開始の号令をかけた。

機器の名称と型式が書かれた書類を見ているうちに、作成者の意図が数字となって現れてくる。これが残留思念ってヤツか。まさかこんなものまでが電位だとは思わなかったな。まるで筆跡をなぞるかのように鮮明に数字が浮かび上がってきた。俺は書類のブランク欄にペンを走らせる。その間たった数秒、俺の様子を目を丸くして見

ていた松井君に手渡す。

「どうだろう？」

はっと我に返り、俺の出した数字とプリントアウトされた資料を照らし合わせていた松井君が大きく首を縦に振った。

「これなら、十分、採算は合うっす。ただ、この数字で食い込めるっすかね？　MSSならもっと……」

「ダメモトだろ？」

彼の疑念はもっともだったが、数字は間違っていない自信があった。決してスリム化されたとは言えない価格には、おそらく事務長やCE、もしかすると医師へのリベートまでもが含まれていたのかも知れない。

「そうっすね、これで行きましょう。稟議書を書かされることなく見積りが出来たのなんて、いつ以来かな」

「腹が減ったな。いざ、パスタ屋、だ」

「日高さん、終わったよ。着替えておいで」

「えっ？　嘘……」

給湯室から戻った日高依子が湯のみを乗せたトレイを持ったまま絶句する。他社の動向に探りも入れず、二次候補を書き入れた書類もナシ。十四機分の価格検討に費やした時間はほんの数分。彼女が驚いたのも無理はなかった。

Blues (似非賢者の憂鬱)

「ねえ松井さん、あれ、本当に伊都淵さんですか？ 課長にちくちく嫌味を言われては、おどおどして頭を下げていたあの人と同じ人には思えないぐらい変わっちゃってないです？」

「うん、俺もそう思った。自信に満ち溢れてて、いつもの伊都淵さんじゃないみたいだ。さっきだって、俺を信じてついて来い、そうすれば間違いないって、感じだったもんな」

「どうしちゃったのかしら？ 今日の欠勤も出張ではなかったんでしよう。そこらへんに理由があるのでは？」

「俺にも、よく分かんない。詳しく話してくれないんだよ。俺が聞いたのは車を事故で潰しちゃったって話と、岡っ引の事情がどうこうってことだけで……」

「岡っ引？ のっぴきならない事情ではなくて？」

「あ、そうそう、そっちのピキだ。君は四文字熟語に詳しいんだね」
「はあ、と日高依子は大きな息を吐く。」

「それは四文字熟語なんかじゃありません」

六つ年下の女性にピシリと言われ、松井はしきりと硬い髪を掻き
筆る。

「あの機材一式、本当に全部うちで納めることになっちゃったら、
どうします？」

「まさか……」

否定はしたものの、伊都淵の恬然たる態度が、それが現実にして
しまいそうに思えて松井は大きく頭を振った。

二人の脳裏には、そんな会話の余韻が浮遊していた。妻に食事を
済ませてくる旨を伝えようと、俺が電話に立った時の会話だったよ
うだ。

ショッピングモールにあるイタリアンレストランでの遅めのディナーだった。平日の夜で客の入りは悪いが、マンハッタンの、とある街を店名に冠したここが出すペロンチーノと、生ハムとポテトを使ったオードブルはなかなかイケる。原材料に首を傾げる必要もない。所邸のディナーより俺には合ってるな、と浮かべた苦笑を松井君と日高依子が怪訝そうな顔で見つめていた。

「入札書類の作成だから、もっと時間がかかるものだと思っていました。あんな僅かな時間のお手伝いで奢ってもらう訳には行きませんよ」

遠慮する日高依子と松井君を誘ったここで、内ポケットに突っ込んだ数枚の千円札は消え去る運命となる。多くの欲望が俺の中から消えつつある現在、唯一の喜びは誰かの笑顔だけだった。金などに大した価値はない。それを悟れば、誰もが人生に豊かな実りを見出すことが出来るのだろうか、金がなければ笑顔一つ生み出せない現代社会でもある。

他人の意識を操作出来る。そんなことが分かれば、彼等だって俺を化物扱いするはずだ。少なくとも今と同じように接してくれるとは思えない。もっと慎重に振舞う必要があるな。そのメモをオライズの一人に手渡す。

そして電話は不通だった。幸はともかく、普段なら先を争って電話と取ろうとする娘達も出ない。俺は嫌な予感がしていた。

得てして、嫌な予感は当たるもの。一軒きり灯りが点いてない我が家は、幼児によく見かける抜けた前歯のようにポツンと暗く佇む。無断で持ち出した社用の軽自動車をガレージに乗り入れ、微かな希望に縋って押す玄関のチャイムに反応はない。予感覆されることなく憂鬱の壁となって俺に立ちはだかっていた。

虹彩を絞って居間の暗闇に目を慣らすと、薄いブルーの封筒と、数十万しか入っていないはずの預金通帳がテーブルの上に置かれている。

孝之へ

暫く、実家に戻ります。

私のしたことが許されない行為だというのは分かっています。でも、あなたが怒ってくれなかったことが、何より寂しくて仕方なかった。あんなことをしておいて勝手なことを言うと思われるでしょうが、もう愛されてはいないんだという実感が、私にとって死刑宣告みたいに重くのしかかっています。

お互いが関係の修復に積極的ではなかったのが、こんなことになった致命的な原因なのでしょう。

時間を下さい。じっくり考えてみたいと思います。娘達には、いつでも会いに来て下さい。予め来訪を知らせてもらえば、私は出掛けておきます。

あなたにとって、私の顔を見るのは不快でしょうから。

幸

早まった真似はするなと言ったのに……暗闇のままだったことに気づき、居間の電灯を点ける。迎えに行ったところで、こんな置き手紙を残して家を出た幸が素直に戻るとも思えず、そっちは保留にして考えていたことを実行に移した。パソコンの電源を入れ、迷惑フォルダに山積されたメールの中から一通を選択して開く。会社から持ち帰ったラップトップも起動させ、二基同時進行で分析プログラムの構築にかかった。

預金通帳の残高は約六十二万円、確かに自宅購入の頭金に相当額は使ったが、たったこれだけが十五年間真面目に働いた証なのか――俺を徒労感が襲った。

デスクトップで狙いを定めた原資産の分析を始める。関連トレンドの動向を目で追いながら、家族というものについて考えてみた。

社会の存在理由が子供を守り育ててゆくものであるなら、家族はそれの最小単位ではある。しかし、夫婦間に愛情がなくなろうと、法律は制度に基づいた煩雑な手順を踏まない限り、関係の破綻を認めない。

機械設計の会社に務めていた頃、パチスロにのめり込んで家計を破綻させた妻に、離婚を決意した同僚が居た。彼や子供達への市場ではなく、彼の稼ぎに執着した彼の妻は協議にも調停にも応じず、疲れ果てた彼は、自ら命を絶つことで妻との別れを強行採択したのだった。人間も生活も多様化した現在、旧態然のシステムを人々に強いる婚姻の根本的な何かが間違っているように思った。

国家の安定収入の源は、言うまでもなく税収だ。正常に機能する家庭は安定収入の見込める家長と健全な子育てに勤しむ妻の図が成立させる。国にとってそんな家庭ばかりならインカムは安泰だが、それが破綻した途端、生活保護や就学援助といったキャピタルロスへの危機が迫る。崩壊した家庭の子供が創る家庭には、更なる崩壊の危機を孕む。愛情より国へのロイヤリティを優先させると言うのが国家の言い分なのだろう。しかし、彼等には国民の血税を運用する才覚などこれっぽっちも備わっていない。正にその証明を目的のテレビが告げていた。

『消費税を十七パーセントまで引き上げても、十年後のプライマリバランスは現在マイナス三兆円となる見込みです』

続いて俺は思った。かつて人を導く立場に就いた先人達の孤独と苦悩を。権力が社会を動かすシステムに辟易し理想郷を目指した彼等は、俺のように作られた頭脳ではなかったはずだが、俺同様、民よりほんの少し頭が良かったただけではないだろうか。そして、過ちを正そうと振るうタクトを民は賞賛をもって眺めるだけ。骨の折れる改革は指導者に全面的に託して止まない。それではいつまで経とうと、指導者と民の差異は歴然として埋まらない。指導者一人が幾ら躍起になって頑張ってみたところで、民の意識が変わらなければ、真の改革など訪れるはずがないのだ。

憂鬱になってきてしまったので、情緒の接続を弛める。出口の見えない思考から解放されたオイラーズの面々が腰を下ろしたので、別部隊を出動させる。完成した分析プログラムに従って、オプショントレードの戦略を検討・決定した。数件の注文を入れて手続き完了のメッセージを待つ。とりあえずこれで幸と娘が食うに困ることはないだろう。

システムに精通すれば、相場がどう転ぼうと利益を上げることの出来る戦略は存在する。勿論、分析が完璧であればといった但し書きは付くが。必要以上にややこしく構成された仕組みは『大金を投じてくれるお得意様を少々儲けさせ、小金を注ぎ込んでいただく大衆からの大量搾取に主眼を置いております。タネ銭がなくなったら、とっとと撤退して下さい』といった証券会社の悪意が見え隠れしていた。

一人の幸福が大勢の犠牲の上に成り立つ。どれだけ文明が栄えようと、そんな世の中に明るい未来が待ち受けていてくれるはずなどあってはならない。

俺はもう一段階、情緒の接続を弛めた。

D e t e r m i n a t i o n (決意)

全ての取引に於いて、プレミアムが想定した数字になったところで片っ端しから転売する。こんな時間でもチャートにへばりついている連中は居るのだな。まあ、金儲けに朝も夜もないか、泥棒さんの主戦場は専ら夜間なんだし。自ら導き出した答えに妙に納得する。分析が百パーセント正しければ保険など要らない。僅かばかりのタネ銭をヘッジに回す余裕などなかった。チャートは面白いようにオイラーズがはじき出した通りの数字を表示して取引利益を蓄積して行く。単調な作業に面倒になった俺は、その操作までも自動化してしまおうと、新しいプログラムを書き上げて取引画面にリンクさせた。こうしておけば、いつか幸が欲に駆られてとんでもないミスを犯すこともないだろう。

誰かがパソコンの電源を落したり、停電でシステムが誤作動しないよう、念の為プログラムごとラップトップに移す。時計は午前二時四十分を指しているが眠気はない。これも変化か？　オイラーズがそうだと頷く。

試してはいなかったが電位が操作できるなら、黙ってATMの前に立ち、流れ出る札束を回収することも可能だったろう。ただ、俺の中に確立されつつある高度なモラルが、それを許さなかった。

尖った感情に続いて全ての欲望も失われかけていた。人は手にしたい何かに憧れ、目標に向かって励み、報われない努力に涙し、待ち望んだ結果に歓喜出来るのだ。思い通りになってしまう人生に誰が希望など持とうか。際限のない欲望ほど人間の品性を貶めるものはない。なのに……

欲望に取り憑かれたような男達は居た。ほんの三か月前、時の最大野党総裁は、震災被災地と原発事故への対応の不手際を理由に、内閣不信任案を動議した。欲に駆られた人間は同類を目ざとく見つけだし裏切りを持ち掛ける。万全だったはずの不信任案が否決され

た時、キツネザルの風貌を持ったその総裁は企みが成就しなかったことに落胆しつつも、動議が総理の辞任を引き出したのだと嘯いた。一敗地にまみれ、彼が得たのは多くの国民の反感だけ。器量を越えて手にしようとした権力は、二重の裏切り（ダブルクロス）によって、彼の手をすり抜けたのだった。謀議は謀議によって瓦解する。死ぬまでかかっても使い切れないほどの富と地位を手に入れ、彼等はその上何を望むのだろうか？ 俺に芽生えた能力を彼等が手中にしたら、世界はどうなってしまうのだろうか。

大震災、アメリカの大竜巻、ドイツの病原性大腸菌の大量発生、全てが傲慢な人類の牛耳っている世界を崩壊させようとしているように感じられ自問するが、オイラーズの面々は黙して語らない。

清廉決正な人間など居やしないのだろうか、松井君や日高依子と過ごした一時間余りは、とても心が満たされたように感じられた。あんな人間がこの世界にはまだ居る。彼等が苦しむだけの世界にしてはならない。怒りも欲望もなくした俺に、初めて目的らしい目的が生まれていた。

実験は止めさせるべきだ。弛めたシナプス接続を少しずつ戻しながら、俺は所邸を訪ねる決意を固めた。社用車はあったが歩くつもりだった。たかだか二十分の距離だ。利便性の追求が人類の進む方向を捻じ曲げたように思われて仕方がなかった。

《ひゅーひゅー》《かつこ良過ぎるじゃーん》 オイラーズの野次を黙殺して、玄関を出る。朝焼けが川手エステートの家並をオレンジに染め上げていた。

三度（みたび）、所邸へ

事情を知らなければ、正に白壁の御殿。明るくなりかけた九月の早朝、本物の光触媒を使用しているらしい外壁は朝日を浴びて燦然と輝いていた。そこに悪意や奸計が隠蔽されていることなど、犬の散歩やウォーキングで屋敷の前を行き交う人々は誰ひとりとして気づくことはないだろう。さすがに医者邸宅は立派だ、いつかはこんな家に住みたいものだ。ありきたりだが、そんな感想が普通ではないだろうか。

三桁に増えていた預金から数万円をATMで下ろし、勝手に拝借した所のサンダルが入った紙袋を提げてブラブラとたどり着いた。俺はポロシャツにジーンズの軽装で建物を見上げていた。

カーテングートは開いており、ガレージにボルボもある。脇に停められたシルバーのアルトは来客のものだろうか。脱走した俺が警察に駆け込んだりはすまいかと案じた彼等が、相談出来る誰かを呼び寄せたのかも知れない。後顧の憂いはなくなった。何が待ち受けていようと構うものか。所が説得に応じなければ刺し違えてでも実験を止めさせる。そんな気概に溢れた俺であった。玄関の扉を引いてみる。鍵はかかっていない。

「ただいまあ」

気概はご立派でも、小市民的発送は変わってないらしい。無言で上がり込むのも気が引けて間抜けな挨拶を口にした。声が聞こえなかったのか、或いは誰も居ないのか、出迎えが出てくる様子はない。靴を揃え「勝手にお邪魔しちゃいますよー」と、言ってリビングのに向かった。

所と梓、そして見知らぬ男がテーブルを挟んで膝を突き合わしている。俺を目にとめた瞬間、三人は呆氣にとられたような表情になった。ややあってようやく所が声を発した。

「伊都淵、お前……」

「やあ」

もう少し気の利いた台詞はなかったものと後悔するが、言ってしまったものは仕方ない。彼等にそれを指摘をするゆとりがなかったことに感謝した。

夜を徹して話し込んでいたのか、彼等の目は充血していた。遁走したモルモットの足取り調査や捕獲の方法についての会議でも開いていたらしい。よもや、伝書バトのように舞い戻ってくるとは夢にも思わなかったろう。そしてぽかんと口を開いていても梓は美しかった。

「かけていいか？」

「あ……ああ」

真ん丸い目をし、真ん丸く口を開けていた男が尻をずらしてくれたので、その隣に腰を下ろした。男の体温が残るソファはあまり気色の良いものではない。

「どこに行ってた？ 家には帰ったのか？」

所と隣に座った男の脳波に妻の不貞が表示される。ははあ、こいつが興信所の調査員だなと目星をつけた。妻とのイザコザを話すつもりはなかったのだが、彼等は先んじてそれを知っていたようだ。ちえ、俺はそれで戻った訳じゃないぞ。もっとこう大義があってだな——と、説明しかけたが、彼等に心の準備は出来てなさそうだったので、当たり障りのない話題を選ぶ。

「俺がどこに行こうと、お前に報告の義務はないだろう。と言いたところだが隠す必要もないな。家に戻って会社に行って、こっそり入札の書類を仕上げてきた」

落ち着きを取り戻しつつある所が、ごくりと生唾を呑み込んでから言った。

「何で、戻ったんだ」

「いけなかったか？ 研究の途中だろ、これの」

額に人差し指を当て、にんまりと笑う俺を梓が気味悪げな顔で見

つめる。おいおい、君がレイプした男だぞ。それはないだろう。

「……そう……だが、お前、協力してくれるのか？」

「んにゃ、そうゆう訳じゃない。俺がどう変わったかをお前等が理解したら考え直してくれるんじゃないかと思つてな。研究を止めさせるために戻つたんだよ。ロクなもんじゃないぞ、これは」

「ロクでもないか、どうかはお前の決めることじゃない」

少しムツとしたような顔で所は返してきたが、微かに言葉が揺れるのを俺は見逃さなかった。理解の及ばない存在に畏れを抱くのは人間としてごく当然の反応なのだ。

「何なら、CTも付き合うぞ。その代わりと言っちゃなんだが、入札は公正に行われるようにしてくれないかな。担当を代わってもらつた若いのに恩があつてな」

「本当か？ 是非、頼む。入札の方は任せておけ」

CTを付き合うとの言葉に所は目を輝かせた。研究を断念させるといった俺の話をちゃんと聞いていなかったのか、それともモルモットが手元になれば、なんとも言いくるめられるとも思つたのだろう。頭のいい人間が、よく陥る錯覚だ。俺の今の姿を理解してもらうためなら協力もしよう。だが経路は同じでも目指す着陸点は北極と南極ほどかけ離れている。俺はじつと所の目を見て言った。

「で、どうすればいい？ また、俺は電極だらけのフランケンシュタインにされるのか？」

「お前が、そうさせてくれるならな。だが今日は病院を休むわけには行かない。俺が戻るまで梓の聞き取りに付き合つてやつてくれ。加藤さん、私が戻るまで宜しく」

所の視線を受け男が黙って頷いた。悪意でも善意でもないところで振れる彼の思考はニュートラル。俺に関する調査を仕事として引き受けたが、それ以上でも以下でもないといったところか。年の頃は俺と同じか少し上。感情を表に出さない努力をしているようだったが、それが彼本来の姿でもないようだ。今の俺に付け焼刃は通用しない。

「拘束はナシだぞ」

「ははは、冗談はよせよ。俺がいつ、そんなことを」
警戒と焦りが所に浮かぶ。加藤と呼ばれた調査員に詳細は伝えていないのだと判断した。

「期限の圧している調査が、あります。監視しながら仕事をさせてもらってもいいでしょうか？」

とはいえモルモットの捕獲を依頼された加藤だ。俺が単なる家出人ではないことは承知している。彼の口にした監視という言葉がそれを証明していた。

「構いませんよ、こいつも暴れはしないでしょう」

加藤の思考がピクリと振れる。俺の体格と身のこなしに素早く目を走らせたのは、逃走を企てた俺を取り押さえることが出来るかどうかを推量したようだ。イメージがジャブになって現れたのは、彼にボクシング経験でもあったからなのだろう。

「では、俺は出かける。後は頼んだぞ。夕方には戻る」

腕時計の文字盤を指でコツコツと叩き、意図を持った視線を梓に送る。彼女は心得たように頷いた。

やれやれ、どうやら二人とも未だに俺を進化したサルだと思っているらしい。俺は所の帰宅が楽しみになってきた。

Trick or Treat?

「ねえ、教えてくれない？　あなたはどう変わったの？」

梓が怖々といった様子で訊いてきた。怯えの感情を和らげ、彼女に落ち着きを与えてやった。人に畏怖されるのは俺の本意ではない。「人の考えが見える、そして、それに介入することが出来る。正確に言えば電位の変化が見えてそれを大気中の静電気や電磁波で操作するんだ。そして、認知と情報処理の速度がべらぼうに上がった。例えていうならパソコンの8ビット機が64ビット機に変わったぐらいにね。ただ、そこには様々なノイズが混じる。恐らく、葛藤とか逡巡といったものなんだろうな。機械と人間の違いぐらいはないと困る」

俺の話す通りを、さらさらとカルテらしきものに書きとめる。後半の冗談まで記録しているようだった。そんな梓との会話に、ラッポトップで作業をしていた加藤が耳をそばだてた。(バカバカしい、この伊都淵という男は嫁さんを寝取られて頭のネジが飛んでしまったようだな。まあいい、ハッキング片手間の監視には見合わない報酬を約束してくれたのだ。こいつがマトモでもイカれてても、俺の関知したことではない)

思考は正対していなくとも見える。興信所か——欺瞞と汚濁に満ちた世界ばかり見続けてきた男に、俺の告白は気のふれたコキユの戯言にしか聞こえないのだろうか。加藤は作業に思考を戻していた。

「具体的には？　昨夜、私にしたような——」

「いいのか？」

探究心に溺れ、視野が狭くなっていた梓を制し、顎をしゃくって加藤の背中を指し示す。はっと気づいた顔になった彼女が余所行きの笑顔になった。続けて真意を覆い隠し晴れやかな声で言った。

「朝食は？　加藤さんも昨夜から居ていただいてるから、まだなの。一緒に如何かしら」

「ありがたいね。いただこう、今度は眠剤抜きで頼むよ」

（眠剤？）再び加藤の興味がこちらに向いた。

「嫌ねえ、加藤さんが本気にするでしょう」

「して欲しいもんだね」

梓の牽制を含んだ非難の言葉尻ことばじりを捉とらえて俺は言った。俺がどんな目に遭ったかを伝えたかった妻は去り、正体を知られたくない松井君と日高さんには伝えられないジレンマを加藤に向けてみたのだ。肩書きはご立派な脳神経外科医が持つ暗黒面、美貌に隠された梓の奸計。それらを白日の下に曝け出せるのは、こういったニュートラルな立場の人間ではないだろうか。例え所が依頼人であっても、彼なら冷静な判断を下せるのではないかと期待したのだ。た。

「待っててね。加藤さん、お願いします」

暗に俺を逃すなど言いたかったのだろう。目的を果たすまでは、どこへも行かないさ。わかりました、と頷く加藤の思考に大きな乱れはない。席を立った梓から視線を戻す途中で俺と目が合った。友好的な笑顔を向けたが、加藤にはお気に召さなかったようだ。取り立てて反応も見せず、ラップトップPCに意識を集中させたようだ。高度なモラル云々を語ったが、本来の俺は悪戯っ子だ。知らぬ顔を見ると、余計に悪戯心が掻き立てられる。

「何をしてるんです？」

「我々の仕事は守秘義務がありましてね。部外者にほいほい明かす訳には行かないんですよ」

こう言っておけば、このコキュも黙るだろうといった加藤の思慮が感じられた。アンチグレイ（低反射）の液晶は、この俺が座った位置からでも十分判別可能だった。

「はあ、パスワードの解析ですね。オープンソースソフトは使わないんだ。そのレインボーテーブルはオリジナル生成ですか？」

何だ、こいつは。そんな思考と共に、加藤は何か気味の悪いものでも見るかのような視線を向けてきた。

「ハッシュに salt^{サルト}が使われてましてね」

専門用語を並べ立てて煙に巻こうとするが、暇を持て余す俺はしつこい。

「朝食が出来るまで暇だし、お手伝いしましょうか？」

ふつと鼻で笑うような声を出し、加藤がスペースを空けた。素人に何が分かる。彼の立ち振る舞いにはそんな嘲笑が含まれていた。

膨大なレインボーテーブルの数となったが、オイラーズが俊敏さを体現し正確な演算をこなしてゆく。どれ、と加藤を押し退けけキーボードを叩いた。

「これでどうです？」

「勝手なことを——」

加藤の口が苦情を言いかけたまま閉じることを忘れる。俺が打ち込んだパスワード画面は数秒の後にそれを認証した。

「——どう……やったんだ？」

「そのレインボーテーブルを salt の値だけ広げて、計算したんですよ。理屈は同じでしょ？」

（しかし、あんたはキーボードにも触れず——頭の中でだと？

バカな——しかし……）

加藤の脳波は大きく乱れ始めていた。

「入れたんだから、いいじゃないですか。へえ、会計ソフトの会社かあ、こんなに簡単に侵入されちゃいけませんよね。おっと、守秘義務、守秘義務。何も見てませんよ、俺は」

「あんた、一体何者なんだ？」

遠い過去、加藤はこれと同じ質問を投げかけた男の姿を思い描く。またぞろ、悪戯心が湧き起こった俺はその記憶をなぞってみた。

「言ったろ？ただのサラリーマンだよ」

加藤は更に大きく口を開け、手にしていたペンを取り落とした。

「……小野木……さん……」

「失礼、ちよいと悪ふざけが過ぎたようですね。そろそろ朝食が来そうだ。腹が減っては戦は出来ぬ。でしょ？ 戦は終わっちゃった

みたいだけど、腹ごしらえとまいりましょうか」

一瞬、加藤の内に広がったノルスタジアと善意に触れ、すつと退く。

《善良なこうゆう人間を脅かすべきではない》

俺は素直にオイラーズの忠告を受け入れた。

Lines (線)

「――やっとな」

俺の朝食には入ってなかった成分が、加藤のそれには混入されていたようだ。食事の間中、俺をちらちら盗み見していた彼だったが、今はしどけなくソファにもたれかかり規則正しい寝息を立てていた。「だって、この人に知られる訳には行かなかったんですもの。研究の内容もラボの存在も」

「俺が逃げようとしたら、どうするつもりだ。以前の俺だって君一人じゃ取り押さえられない。所は、それを恐れて彼を残したんだぞ」「逃げる気なら、最初っから戻って来やしないでしょう。あなたの目的は私達に研究を止めさせる。そうじゃなかったかしら？　ねえ、あなたには何が起こっているの？　何が間違っていると言いたいの？」

学術的興味の虜となった梓から、怯えは完全に消え去っていた。

「先ず、君たちが目指したものについて聞きたい。P300波の数値を限りなくゼロに近づけるといったな？　それで認知と情報処理の速度は上がるとしよう。ただ、この俺の姿に想像はついたか？　人が他人の意思に介入出来るなんてことは許されてはならない。進化は、全人類に均等にもたらされるのを待つべきなんだ。余期せぬ副産物。それが君らの間違いを証明している」

「私はまだ信じてない。今朝だって催眠術でも使ったんじゃないかって？」

「君のような現実主義者が、やすやすと催眠術なんかにかかるとも。あれはかけられる側の集中度や猜疑心によって大きく左右されるんだぞ」

「あのセックスに惑わされた私だったら、それも容易だったんじゃない？　凄かったわ、あんなの生まれて初めてだったもの」

想起された記憶に梓の瞳が潤んだ。

「自身と友人に対しては常に誠実であれ。俺は君を友人だと思ってる、だから嘘は言ってない」

「ニーチェね」

「ほう、知っていたのか。驚いたな、君はガチガチの理系だと思っていたよ」

「論理建てて物事を考えるのに文学的要素は不可欠だわ。そう考えると、どんな学問も根幹は同じなのかも知れないわね」

「それが分かってるのなら倫理学も尊重しろよ。人体実験、それも本人の同意なしにするそれが、倫理を尊ぶ人間の行いとは思えない」
「大した変化ね」

梓が俺に持った興味は、実験対象へのそれと異性へのそれがないまぜになりかかっていた。彼女は言葉を継いだ。

「中学校時代の、本能のまま突っ走っていたようなあなたを好きだったって言ったのは本当よ。私や創太郎には絶対、真似の出来ることじゃなかったもの。でも、今のあなたも素敵。人生の高みから導いてくれているような気分させるわ。そんなあなたを生み出したのが創太郎と私の実験なのよ。あなたの命を危険に晒した訳じゃないじゃない。何の犠牲も払わずに見返りは求められないわ。それでも間違ってると思うの？」

その質問が、生じてしまった内なる迷いを肯定してしまっていることに梓は気づいていないのか、俺は彼女の問わず語りを別の方法で論そうとしてみる。

「もう一つ言っておこう。俺の脳のニューロンは増えちゃいない。

君らの実験は仮説の大前提からして既に間違っていたんだ」

梓の目に狼狽が走る。

「嘘よ、だってあなたは以前とは全くの別人じゃない。それにあなた自身、進化は認めている。神経細胞が増えない限り、その変化は有り得ないわ」

「仮説の根拠は何なんだ。実験のレポートはあるんだろう？ 見せ

てくれないか」

「あのファイルは創太郎しか開けないの」

彼女の脳波が、それが虚偽であることを示す。俺にある考えが浮かんだ。

「君の観念においてセックスは大した比重を持たないのかも知れない。だが俺は今朝の行為を恥ずかしく思う。こうなって理解出来たことがあるんだ。人は誰も自分の理解者を求める。相互理解の深まった形が愛し合えてるという状態なんだと俺は思う。俺には君が理解出来ない」

「あなたは、ちゃんと反応していたわ」

「肉体の諸反応を司るのは脳つかさどだろ。反射行動もまた然り……釈迦に説法だったかな？ あれは操作だよ、俺は愛のないセックスに価値を認めない」

「試してみましようよ」

力は行使していない。プライドの高い人間は、かくも挑発に乗りやすいものか。スタスタと地下ラボへの階段に向かう梓の後に俺は続いた。

「神経細胞が増えていないというなら、あなたが変化した理由は何なの？」

一糸纏わぬ姿となった梓が、俺を見下ろして言った。既に俺の代理人格は彼女の内に呑み込まれている。

「ニューロンのそれぞれが複数の役割をこなせるようになったんだ。君らが解明出来ない領域のそれまでもが活発に働き始めている。アドレスを振り忘れた情報や、その活用法が鮮明に蘇っている。どうした？ ちゃんと聞いているのか？」

快感の渦に呑み込まれそうになる意識を必死に押し止めて梓は答える。形の良い胸の膨らみが大きく揺れた。

「聞いてるわよ、それで？ ああっ——凄い」

彼女の集中が乱れたのを確認して、俺はデスクに置かれたラップト

ップに思念を送る。起動成功、パスワードは？ 侵入成功、マシン語の読み取り、コンパイル、C言語への変換をオイラーズに託す。情報はみるみるうちに俺の脳内へと堆積されて行った。

「高度成長下だったこの国を支えていたのは勤勉で優秀な国民だったと聞く。君らは俺の脳味噌をそう変えたんだ。人口はそのままでクオリティのみが上がったってとこかな。電位が見え、それを操れるのは悪魔の副産物だ。突然変異だよ」

実験動物の解剖は全て薬効が切れてから。神経細胞の増殖もそれ意外の目立った兆候も確認出来ない。投薬されたものは……やはりか。投与は昨日の午前七時、彼等の認識する薬効は今夜七時までということだな。ファイルのコピーは八割方終了していた。

「だからっ、だから何っ！」

既に梓は錯乱状態に近い。淡々と語る俺の声は、所々彼女の悲鳴にかき消されてしまう。内容の認識など出来ていなかったに違いない。三十七歳とはいえ、子供も産んでおらず節制にも努めたのだろう、梓の肢体は彫像のように均整がとれていた。したたる汗が胸の谷間で艶かしく光る。だが、快感の回路を遮断したままの俺には何の感動も伝えてこなかった。

「君らが俺に投与したのも、おおよその見当はついた」

「黙っててっ！ イキそうなの」

君が教えると言ったんじゃないか。その不平はこういう手段を選んだ後ろめたさで相殺させ、次のファイルの解析に移った。へ？ 医師である所のパソコンに、病名や治療法の記述があっても不思議ではないが、泌尿器科とはまた……少し身をよじった拍子に俺の代理人格が梓のスイートスポットを直撃したらしい。彼女は体をくねらせ長く大きな声を上げて果てた。そして今朝同様、俺の胸に突っ伏して動かなくなった。

梓の胸の鼓動を感じる。全てショートしてしまったような快樂の脳波は、その稜線をフラットラインで繋げたまま、一向に降りてこようとはしない。女性は愛のないセックスでも、これほど感じるこ

が出来るものなんだ。ちよっぴり羨ましさを抱き、同時に愛し合える妻が去った現実が胸を締め付けた。これも切っておくか、回路を遮断しても胸に（これも本当は脳に伝わったものであったのだが）去来した寂しさは居座り続ける。トラブルか？ オイラーズは両手を広げ、シュラッグで答えてきた。

Reunion (邂逅)

「朝食の礼はしたぞ、おい、起きろよ。梓ってば、お客さんみたいだぞ」

梓は俺に覆いかぶさったまま、すうすうと小さな寝息を立てている。徹夜のモルモット対策会議で睡眠不足だったところへもってきての怒涛の絶頂感。張り詰めていた緊張はポキリと折れてしまったようだ。

インターフォンに繋がった画面にはチャイムを押す男の姿が映っている。「お客さんだってば、起きろよ」「もう、ダメ。もう要らない」譫言なのか寝言なのか、どちらにせよ正気での返事ではない。

「知るか、もう」俺は起こすのを諦め、梓の下から滑り出た。

「しょうがないな、全く。所がこんなところを見たら……」

独り言の途中で、昨日の行為を咎める様子もなかった所を思い出す。妻が他の男と寝て、謝る必要はないと言える神経が理解出来なかった。俺も怒らなかったが謝罪は受け入れ——いや、サトシクンたら失礼しました以外、何も言っていなかったか……

そして今や間男の当事者になってしまっている。明晰な頭脳をもつとしても、情動が絡んで起きる数々の出来事には、きちんとした説明はつかない。人間って不思議だなあ。俺は気楽にもそんな感想で一連の事象をまとめ上げた。

女性の洋服を脱がせた経験はあるが着せたことはない。娘のお着替えならまだしも、体にフィットしたニットやクルクルと小さく丸まったショーツを履かせる自信はなかった。壁にかけられて

いた白衣でベッドに横たわる梓を覆うと、自身の身繕いを済ませて階段を駆け上がった。チャイムは鳴り続けている。普通、それだけ鳴らして返事がなきゃ留守だと思わないか？ 見知らぬ来訪者の凶々しさに呆れ、また、その粘り強さに感心した。

「はいはい、ただいま」

俺は家政婦みたいな返事でドアを開く。そのドアの向こう、立っていた作業服姿の中年男がきょとんとした顔になる。

「えっ、あっ、どうも」

出入りの業者だろうか。見知らぬ顔がドアから顔を覗かせたことに対する反応としては至極まともではある。

「ええと、どちら様でしょう。ご主人は仕事に行かれてまして、奥さんともう一人は就寝中なんですが」

変な誤解を生じさせそうな説明となったが、間違っていない。

「あっ！ お前、伊都淵か？」

中年男が：俺もその集合に入っている訳だが、ここではそう呼んだ方が手っ取り早い。とにかくそいつが俺を指差してそう言った。

「俺だよ、深尾だよ。石田に聞いたんだ、お前が最近、所んちに入りしてるってな」

はいはい、公務員になった深尾隆充君ね。ふかおたかみつここ十数年、同窓会の類は無沙汰をしていたが、所との画策された再開以来、梓に石田と続く邂逅のオンパレードは、さながらプチ同窓会のようにもあった。

「やあ、懐かしいな。何年ぶりかな。まあ、上がれよ」

他人の家だったのを忘れ、深尾を招き入れる。リビングには依然として加藤が死んだように眠っていたが、説明も面倒だったのでそのまま通した。

「誰だ？」

加藤の姿を目にとめた深尾が、ぎょつとした顔で俺に訊ねる。

「朝、俺が来たときから寝てる。所の知り合いじゃないか？ 医療関係のMRとかさ」

デタラメな説明もあったものだ。しかし加藤が興信所の調査員で、P300Aの犠牲者たる俺が脱走して捕獲に雇われた云々の説明よりはまだマシだろう。「ふうん、そうか」と納得してしまう深尾も深尾だった。

「で、何か用か？」

「お前に用があつたならお前んちへ行く。俺は岩下に相談があつて来たんだ」

ごもつともである。

「さつきも言った通、彼女も寝てる。昨夜は徹夜だったみたいでな。その男を交えて三人打ちでもしてたんじゃないかな」

「所は麻雀はしないぞ」

「じゃあ、知らん」

俺は全てを放り投げた。

「いい加減なヤツだな、お前は。中学の頃からちつとも変わってない」

「ところで、お前、その格好。仕事中なんじゃないか？」

胸に井之口市上下水道事業部と書かれた作業服を目にとめた俺が非難の矛先を躲す。

「ああ、クレーマー様からのお呼び出しでな。いつも岩下に対策を教わって行くんだ。彼女、臨床心理士の資格も持ってるからな」

へえ、そんな付き合があつたのか。俺は不本意ながら二度ベツドを共にした梓が有する資格については全く知らなかった。彼女の裸身に僅かばかりの瑕疵を主張すべく点在《てするホクロの位置なら正確に言えたのだが。

「しかし、水道にどんなクレームをつけるんだ？ 水が濁ってるとかなら正当だろう。何とかしてやれよ」

「バカ、そんななんらしいよ。今回の呼び出しは『水がぬるくなつたような気がする』だ。まだ九月なんだ、配管の浅い所にある水が温まるのなんか当たり前じゃないか」

俺は思わず嘔き出した。確かに深尾の言う通りだ。大体においてクレーマーというのは自己耽溺が高じて被害妄想に取り憑かれた、偏執症一步手前の連中が多い。自分に不利な話は一切、耳に入れようとしなのだから始末が悪い。

「しかも、『ワシは自治会を代表している。地域住民はみんな同じ意見だ』って言ってんだぜ、この爺さん。暇なもんだから日夜つけ

る難癖はないかと探し回ってるんだ。前は新聞の隅っこにちよろつと載った計画事業に文句を言っただけだった。ガスや電力の業者もよく呼び出されてるみたいで、何度か鉢合わせしたよ」

石田が羨《むほど、親方日の丸も楽ではないようだ。

「ふうん、俺がついてってやろうか？」

「瞬間湯沸かし器のお前が？　爺さんと取っ組み合いになるのが関の山だ」

深尾の記憶に残る俺は中学生時代のままだったようで、論外だというように手をひらひらと振った。

「人は変わるんだよ。どうせ梓は起きない、客は待ってる。遠いのか？　そうゆう連中は待たせたら余計に厄介なんじゃないのか？　任せておけよ、ダメモトじゃないか」

納得が行かない様子の深尾を立たせ、背中を押して玄関へと送り出す。活性化した俺の脳味噌とオイラーズの面々は、とにかく刺激が欲しくて仕方がない。梓も加藤も起きず所の帰りを待つのは一日千秋の想いだったのだ。

「岩下なら、冷たいお茶を出してくれたぞ」

「よその冷蔵庫を黙って開ける無作法は出来んよ」

よそのリビングに勝手に上げておいてそれもないかとは思ったが、俺はどんどん深尾の背中を押してゆく。殆ど突き飛ばさん程に。なおも後ろ髪を引かれるかのように、しきりとリビングを振り返る深尾を乱暴に外へと突き飛ばすと履きかけていた安全靴が脱げた。抗議の目を向けながらケンケンして戻る深尾は、何と言うか、こう……とても滑稽だった。

Claimer (クレマー)

ゴシック文字で？井ノ口市女上下水道部？と看板の入った白いパネルバンに乗り込む。ご丁寧にも窓を締め切り、全てのドアを施錠した車内の空気は不快感の密度を上げて澱んでいた。俺は冷房が効きだす前に、不快伝達回路の接続を弛めた。

「窓ぐらい、透かせておけよ」

「頼むから、爺さんにつかみかからないでくれよ」

俺の苦情には取り合わず、たしなめる口調で話す深尾の額には、玉のような汗が噴き出していた。

「任せておけて」

そうは言っても、妙案があった訳ではない。人間同士なんだから話せば分かる。何とかなるさ的行き当りばったりな便法は、学生時代からの専売特許であった。

「遠いのか？」

「二十分ぐらいかな、県庁の方なんだよ。あっちは、クレマーが多い地域でな、よく足を運ばされる。急ぎの現用があつて、すぐには行けないと言うと、あっちからおでましになる。朝の十時に来て、夜の八時まで居るんだぜ？ 相手させられるこっちに身にもなって欲しいよ」

「へえ、で、その爺さん飯はどうしてるんだ？」

「俺達の目の前で弁当を広げて、お食べになられる。だから、こっちも席を外して食事にしますと言うと、公僕なんだから、我慢しろと曰われる。お茶を運んでくるふりをして給湯室で二分で飯をかつ込むんだ」

あははと、笑う俺に深尾は咎める目になった。

「大変だな、苦情処理も。ストレスばかりでなく早飯でも消化器官に負担を強いられるってことだ」

「なあ、頼むから爺さんにつかみかかるのだけは止めてくれよな。」

お前ら、一般企業の人間と違って、俺達は何かにつけて大騒ぎされるんだから。石田の奴なんか、お前らは潰れないから気楽だの、莫大な退職金が待っているから我慢しろだの好き勝手言いやがる。見せてやりたいよ、俺の仕事を」

深尾の心配はその一点に集中しているようだった。しかし一般企業でも暴力沙汰は看過されるはずがない。

「客観的事実を観察して伝えてやるよ。これから行くのは、その弁当爺さんちか？」

「いいや、また別の爺さんだ」

肩を落とす深尾の顔は悲壮感に包まれている。笑って悪いことをしたなど、俺はほんのちよっぴり反省した。

「遅いっ！」

玄関に立ちはだかった老人は七十代後半から八十代前半といったところか。背筋はピンと伸び、真っ白になった髪をきれいに撫でつけている。正に？ 矍鑠とした？ がピタリと当てはまった。庭掃除でもしていたのか、箒と塵取りを手に仁王立ちするその姿は『武蔵はまだか』と、憎むべき役所との決闘に臨む佐々木小次郎然としていた。と言ったら言い過ぎだろうか。

数寄屋造りの日本家屋は格式と威厳を漂わす。深尾の伝聞通り、地域では頼れる世話役として上部自治体との交渉役を任されているのかも知れない。銅板製の表札には？ 藤田？ と書かれていた。

「申し訳ございません。なにぶん、業務が立て込んでおりまして：：：全てのお客様のご要望通りには、なかなか――」

「時間が勿体ない、上がってくれ」

ジャブの差し合いは完全に深尾の負け。気圧され、老人に付き従う彼の両手は揉み手になってしまっていた。

黒檀製のバカでかい座敷机を前にして、勧められた座布団に腰を下ろす。

淡いグリーンの液体、普通ならお茶に違いはないのだろうが、盆に

乗せてきたそれを藤田老人は俺と深尾の目の前に置いた。

「ご立派なお住まいですね。こちらにはお独りで？」

以前の俺なら先ず初めに口にしただろう『どうぞ、お構いなく』でなく、そう訪ねたのは、奥方が居られるのなら主人が茶を淹れることなどなく、息子や娘が居たとして、この気難しさでは敬遠されるのではないかといった判断によるものだ。座敷に通されるまでの間をその調査に費やし、干されていた洗濯物がこの老人のものだけだったことから外的外れではなかったろう。所が改造した俺の脳味噌は、特に意識せずとも控えた案件の準備を周到にこなして行く。深尾は『こいつは一体、何を言い出すんだ』と言った顔で俺の横顔を見ていた。

「いかんか、独りでは」

老人が眉を吊り上げたのを見て、深尾は首をすくめた。彼が何か言いかけるのを目で制して俺は続けた。

「そうじゃないんです。私の買った家が、それはもうロクでもない代物でしてね。やはり日本に住むならこういった日本家屋が一番。そこに御息が住まわれないとしたら勿体ないなと感じたんです」老人の眉が下がる。べんちゃらのつもりではなく本意であった。木造、土壁造りの住宅は通気性も良く、家そのものが湿度を調整するという。点けっぱなしのエアコンや液化製品の断熱材が、地球温暖化に与える影響は少なくない。近代建築と文明の利便性に駆逐されつつある伝統に与する俺の判官贔屓みたいなものだった。

「最近の若い連中の考えは分かん」

「ご主人のお歳になられれば御息もお気づきになるのでしょうか、ですがそれまでの間、この家が悲しむでしょうね」

「家が悲しむ？」

「ええ、そう思われませんか？」

「面白いことを言う人だな、あんたも水道部の人間なのか？」

「いえ、私はこの深尾課長の友人でして、ためになる話を聞けるから是非ついてこいと言われて、図々しくも同伴させていただいた次

第です」

ためになる話というフレーズに老人の口元が綻ぶ。しかし次の瞬間、思い直したように老人の眉間に皺が深く刻み込まれた。

「上手いこと言っても誤魔化されんぞ。水が温いんだ、なんとかしてくれ」

「それですが、こう陽射しが強ければ配管の水は温まって当然です。少し出しっぱなしにしておくとかすれば良いのではないですか」

「水の温度が下がるまでの分を、市がもってくれるのか。東北では未だに水道が復旧していない地域もあると聞く。儂にそんな贅沢をしろというのか」

「計量器にそこまでの機能はありません。しかし、おっしゃることはごもっともです。被災地に方々への配慮、誠に痛み入ります。それで、ぬるい水がお気に召さないのは何故なのでしょう？ 風呂は早く沸いてガス代の節約にもなると思います」

「それじゃよ」

老人は俺達の前に置かれたグラスを指差す。

「夏は冷たい煎茶が美味い。死んだ家内はいつも水出しで煎れてくれた。飲んでみろ」

言われるままにグラスを口に運ぶ。馥郁たる香りと自然の甘味が口の中に広がった。

美味いです。感じたままにそう答えると、次はこっちを飲めと、老人は手元のグラスを差し出す。

「これは……」

先ほどの茶とは比べ物にならないほど味に膨らみもなければ奥行も感じられない。水の温度だけでこうも違うのか。

「分かるか？ 緑茶というのは低温でじっくり出すことで、甘み成分やビタミンCが壊れずに残るんだ。まろやかで深みのある、旨味たっぷりの茶を飲みたい、儂の願いはそれだけなんじゃ」

俺は考えた。多くの利用者を相手にせねばならない市の上下水道部にとってクレームと感じてしまう老人の主張は、彼にとっては切な

い願いである。ケチで水を出さないのではない、といった老人の言葉に嘘はない。ならば……

「井戸はどうなんでしょう。こういったお屋敷でしたら昔からのがおありではないですか？」

「家内が生きておった頃は、井戸水で煎れてくれたもんだ。ただ、アレが死んだ翌年にポンプも壊れてしまっただけな」

「水道がダメなら、それを直しましょう。おい、工具はあったよな」交渉の場を俺に丸投げし、うつらうつらとしていた深尾の肩を叩くと、ビクッと跳ね上がるように立ち上がった。

「工具か？ あるけど、お前に直せるのか？」

夢現でも話の要点は聞いていたようだ。機械設計の会社にいた俺だった。それに電気なら何とかなる。この老人のささやかな願いを叶えてあげたい。俺は強くそう思った。

「動いたっ！」

疑い深そうな目で俺の作業を眺めていた老人と深尾が声を揃えて叫んだ。ゴボゴボと不機嫌そうな音でエアと茶褐色の水を吐き出していた吐出口から澄んだ井戸水が勢いよく流れ出すと、老人の目に歓喜の色が浮かんできた。ポンプの不動は圧力スイッチに異物が溜まっていたのが原因だったのだが、モーターのブラシもかなり減っている。型番をメモして以前の会社で取引のあった業者へと深尾を走らせた。

「モーターも修理しておきます。昔の機械は頑丈ですね。人間もこうありたいものです」

老人の瞳がこころなしか潤んで見えた。亡き細君との思い出らしき波形が次第に上品な老女を象った。

「茶をもう一杯、如何かな」

「いただきます」

老女の輪郭は、背を向けた藤田老人の内へと溶け込んでいった。

「良かったな、早いとこ片付いて」

「伊都淵のお陰だ。そのうち一杯奢らせてくれ」

「見直したか？」

「ああ、しかし、上手くあの爺さんを丸め込んだもんだな」

「丸め込んだ？　そう思ってるならお前の仕事は当分、苦労が続く
な。新たなクレームが発生する度に、梓の助言を仰がねばならん
て訳だ」

「おいおい、褒めてるのに何、拗ねてんだよ」

尖った感情が消えた俺の口調に怒気は混じらない。深尾には単なる
不平だと感じられたようだ。

「藤田さんの言い分はクレームなんかじゃなかったろう。耳を傾け
る姿勢があれば分かったはずだぞ。先入観が真実を見極める目を曇
らすんだ」

「あのな、文句言おうが言うまいが水道料金は同じなんだ。だった
らすんなり払ってくれる客の方が有難い。俺の考えは間違っている
か？」

「あちらへお邪魔しなきゃ、美味しい冷茶の淹れ方を教われなかった。
姨捨の寓話を知っているだろう。老人の経験や知恵というものは、
文明や科学をも超越してしばしば人の魂を救うことだってあるんだ
ぞ」

「へえ、そんなもんかねえ。しかし、お前は変わったな」

信号が青に変わって深尾は視線を前方に戻す。上機嫌な彼の顔を
見て、こいつが俺の言ったことに気づくには、もう暫く時間がかか
りそうだと思った。

Confused (梓 取り乱す)

口笛さえ聞こえてきそうなほど上機嫌になった深尾が、所邸のチャームを押す。その指先までもがリズムカルに踊っていた。

「どちら様でしょう」

梓の抑揚に乏しい声がインターフォンから返ってきた。

「深尾君だよーん、伊都淵も一緒だよーん」

上首尾に終わったクレーム処理で、深尾はどこかのタガが外れてしまったようだ。

「彼も一緒なのっ？ 待ってて」

梓の声に緊張感が走る。何だ？ どうしたんだ？ 深尾はそんな顔を俺に向けた。俺はただ肩をすくめて見つめ返す。

上品な建物に不似合いなけたたましい足音に続いてドアが開かれる。同時に梓が血相を変えて俺に詰め寄った。

「どこに行ってたのっ！」

いや、家出したペットじゃないんだから、と抗議しようとするが、梓の剣幕がそれを許しそうになかったので、ありのままを答える。

「深尾と一緒にクレーム処理だよ。ほら、君が眠っちゃったから深尾が困っててさ——」

「黙って出てくことないでしょう。創太郎とは連絡がつかないし、加藤さんは起きないしで、あなたを探すことも出来ずに私がどんな気持ちでいたか……」

言葉だけ聞いていると痴話喧嘩の末、舞い戻った恋人を責めるように聞こえなくもない。深尾が変に勘ぐらなければいいが。

「起こしたじゃないか、何度も。君も加藤さんも、あんまり気持ちようさそうに眠っているから、そのままにしておいたんだ。心配させたなら悪かったよ、次からは書き置きでも残しておく」

「次って……」

ようやく落ち着いたのか、梓はふうっと大きな息を吐いた。

「もういいわ、上がって」

深尾の姿など目に入らないかの如くまくし立てた梓を、怪訝そうな表情で眺めていた彼がポツリと呟いた。

「どうしちゃったんだ、あの冷静な岩下が……てゆうか、お前ら、どんな関係？」

俺達の関係は非常に説明しづらい。

「まったあ、深尾君たらあ。伊都淵君はね、創太郎が頭部を検査して脳に障害があることが判ったの。ひとりでフラフラ出歩いては危ないから創太郎と私で保護していたのよ。お昼はまだでしょう？ パスタを茹でたの。一緒にどうぞ？」

咄嗟に思いついた嘘にしては上出来だが『脳に障害がある』はひどい。しかも、深尾はそれを信じる顔になっている。或いはパスタに買収されたのか。おいおい、普通そうだとしたら入院してるだろう。まあいい、穴だらけの言い訳でも真実を納得させるよりは幾らかましだ。そして俺の中の別の思考は我が家へと飛んだ。

幸にこの演技力があつたら、若しくは俺が元の俺だったら、家庭は平和なままだったろうに。いや、あのまま嘘を塗り重ねてゆくだけだったとしたら、未来にもっと大きな悲劇を生んだのだろうか？

以前の俺なら、ここで複雑な心境となったのだろうが、現在の思考は極めて明瞭。オイラーズ推奨の人生訓が脳裏に描かれた。

《起こってしまったことをクヨクヨ悩んでも仕方ない。明日は明日の風が吹く》

「だな」

俺は意気揚々と所邸の玄関をくぐり抜けた。

「で、どんな病気なんだ？ お前が変わったように感じたのは気のせいじゃなかったんだな」

おめでたいことに深尾はすっかり梓の嘘を信じ切っていた。いっそ発作が起きたふりをして彼の頭に噛み付いてやればよかったかと、呑気にパスタをすすする深尾を見て思う。そもそも脳に障害のある俺

だったら、その病には触れない程度の配慮ぐらいしろよ。仕方ない、話を合わせておくか。

「所曰く、喜怒哀楽が徐々に減っていった、最終的にはなくなってしまうんだそう。仏の伊都淵君になっちゃうのかもな」

「へえ、大変だな」

皿から顔も上げずにそう言った深尾の言葉は単なる社交辞令の域を出ないもので、平然とパスタのお代わりを梓に要求する。

「しかし起きないな、この人」

話題は未だソファで眠ったままの加藤へと移った。どうやら俺の病気に関する興味は完全に失われたようだ。

「ごっそさん、美味かったあ。岩下のパスタは天下一品だな、所に宜しく。いやあ、クレマーの処理に夕方までかかると踏んでたかな。時間が余っちゃったよ。スロットでも行ってくるかな」

疑問が解け空腹の満たされた深尾は、好き勝手な理由で自分を納得させると、さっさと辞去を表明した。とんだスチャラカ公務員だ。

石田、お前の深尾評は正しかったぞ。無念は俺が晴らしてやる。公用車へと足を運ぶ深尾の作業服の背中では？ 只今、サボり中？ の貼り紙がヒラヒラとはためいていた。

Conditions (条件)

リビングで所を出迎えたのは、梓の疲れきった表情と鎮痛剤でボンヤリと焦点を結ばない加藤の視線。浣漑と玄関まで迎えに出たのは俺ひとりという有様だった。

「おかえりなさい」

張りのない梓の声に、所が軽く頷く。

帰宅を待つ間、梓の観察対象となってバイタル（生体兆候）の測定に付き合い、途中からは俺が主導となって能力把握の実験を始めた。その頃、やっと目覚めた加藤は、かなりの量を盛られたようで頭痛を訴え、梓からバファリンを受け取ると一瞬の躊躇もなく嚥下した。

『ひとおつ、調査員たるもの、痛みや空腹が警戒心を上回っちゃダメじゃん』俺はそう思ったが葉のせいで本来の思考が滞っていたのだろうと好意的に解釈してやることにした。

ESPカードの凶柄当ては、梓が手に取って認知したものに関しては百パーセントの正解率だが、テーブルに伏せ梓も見えていないものを当てる段になると、せいぜい半々の確立まで落ち込む。六割の正解率を記録した梓を、超能力者なんじゃないか、と言ってからかうと、彼女は大きなため息をついたものだ。

ダイス程度の質量を動かすことも不可能。大気中に漂う静電気を駆使して初めて本のページがめくれる程度だ。ずいぶんとシケた超能力もあったものだ。

《たった、これだけ？》

オイラーズの回答は深く大きな肯首のみだった。

「CTは明後日だ、うちのMRIは調整中で来週までかかると言われたんで、MRAとSPECTと一緒に大学病院に頼み込んだ。明日だぞ、いいな」

「SPECT? 脳血流シンチグラフィか、嫌だと言っても連れて行くんだろう」

所はテーブルに積み上げられた学術書にちらと目をやる。

「協力してくれるんだろう? 公正な入札と引き換えに」

磁気のトンネルと潜水艦のソナーみたいな音はゾツとしなかったが、松井君の人懐っこい笑顔が浮かんで俺は首を縦に振らざるを得ない。この交渉上手めと、心中で毒づいた。

梓と加藤の様子をさして気にもとめず、とにかくモルモットが逃げてなければ安心、といった表情で嬉々として語る所を見て、用心深さと樂觀主義は相反するようで両立するのだということを俺は知る。

「しかし、そのどれでも神経細胞のひとつひとつを見分けることが出来る訳じゃないだろう」

「まあな、お前の許可があれば頭を開かせてもらうんだが」

「嫌なこった」

俺の頭をかつさばく期待を隠そうともしない所の物言いは、尖った感情の消えた俺でも勘に触る。そして、ちらちらと腕時計を眺める。そろそろ切り札の無効を告知してやってもいい頃だろう。

「薬効が切れる時間が心配か?」

「なっ、何で知って――何を言っている」

所の表情からうすら笑いが消えた。

「レポートは読ませてもらったよ。四十一番目の神経伝達物質だろう、俺に投与したのは。アルファSAか、大仰なネーミングをつけたものだな」

所は、梓に叱責とも問い掛けともとれる視線を向けるが、彼女はただただ首を横に振るだけだ。

「加藤さん、今日はもう結構ですから。お約束の物は明日にでも振り込んでおきます」

この先、実験の本質に触れることなく会話を進めることが不可能だと判断したようだ。所はまだボンヤリとしたままの加藤を追い立

てるように、リビングのドアを開いた。

「まあ、座れよ。今日、一日でわかった俺の変化について、出来る限りの説明をする」

警戒心の塊となった所から梓へと視線を移す。

「重複する部分もあるが、二人で聞いてくれ。先ず俺の脳内の神経細胞は一切、増加していない」

「ばかな……」

呻くような声で身を乗り出そうとする所の肩を梓が押しとどめた。
「本人が言ってるんだから間違いない。単一の命令をこなしていたオイラーズ……俺のニューロンの別称だ。彼等が複数の役割を信じられない速度でこなすようになり、サボッていた連中にも奮起を促した。神経細胞が増殖するなどといった考えはお前の仮説だろう？ ラットでもサルでも立証は出来ていないんだからな」

「それは薬効が切れた後の解剖だったからだ」

「科学者であるお前が、そんな夢みたいな話を信じているのか？」

所は小さく唸って押し黙った。

「そして大事なのはここからだ。どうした訳か、俺には電位の変化が見えるようになり、それを操ることが出来る。電位イコール脳波。すなわち他人への意思介入が可能になった。俺がすんなり逃げ出せたのは催眠術なんかじゃない。梓は薄々気づいていたようだがな。そして、大気中の静電気や電磁波、電子機器の発するそれも操作出来る。これは今日の実験で立証済みだ。梓に聞いてみる」

「ええ、どうやら本當みたいなの」

夢は否定しながらも突飛な展開を見せる俺の話に、興味を抱くベきか落胆すべきか、どっちつかずな表情で黙り込んだ所が再び腕時計に目をやった。

「薬効は切れんよ。より正確に言うなら、切れないようにプログラムしたと言い直そう。脳波が操作出来る俺だ。元々脳内にある物質の精製も分泌の調整も可能だと思わんか？ 話を戻そう。電位を発生する神経細胞の数に変化はない。それはオイラーズがそう伝えて

きている。それでもこれほどの変化をもたらしたんだ。仮説は間違っている。成果は確かにあった。副産物はともかくとしてな」

切り札を見透かされた上、無効が確定的となった所は愕然としていたが、思い直したように食い下がってくる。

「だとしたら――」

「いや、俺は認めない。これは正常な進化じゃないからだ」
所が訴えようとしたことを即座に拒絶する。

「お前には、正常な進化の形が見えると言うのか」

俺はその問い掛けには答えず、ひとつの提案をした。

「なあ、所。P300Aは適正な投薬量と間隔を発見すれば、高い確立でアルツハイマーや鬱病の画期的な治療薬になるんじゃないか？　それだけでもノーベル賞ものだろう。投薬の手法も見直す必要がある。ファイルを読むまでは経口服用かと思ってたんだがな。鼻腔からカテーテルで側頭溝に直接噴霧というのは野蛮だ。脳が覚醒した時のあの痛みだけで死ぬかと思ったよ。どうだ、そこで手を打たないか？　それなら俺も全面的に協力する」

再び梓を責める目で見るが、当然の如く彼女はやはり首を振るしか出来ない。

「梓はファイルを見せてくれてないよ。後で調べてみる、お前のパスワードでしか開けないファイルの内容だろう？　俺が話していることは」

今度は梓が驚いた顔で所を見つめた。気まずさを押し隠し、所はこう言った。

「お前は科学者の食欲さを知らない。電位が操作できるほどの進化を看過する訳には行かんのだよ。全面的に信じてはおらんがな。どうだ？　俺に試してみろよ。その力で俺に実験を諦めさせてみる」

「分からんヤツだな、これは進化じゃない。悪魔の副産物だ。誰に同じ変化が現れるとは思えないんだ。俺はまだお前らを友人だと思っている。その友人の意識を操作することは、自分の命が懸かっている限りしないと決めた。アシモフのロボット三原則みたいな

もんだ。それと電位の操作に継続性はない。お前の意識が実験に向いている限り、お前は何度でもそこへ舞い戻る。諦めさせるにはお前の脳を破壊するしかないんだ。俺はそんな真似はしたくない」

所と梓に戦慄の電位が生じる。

「上手く逃げたものだ。しかし、証明出来ないものを信じる俺だ
と思うか？ とにかくお前は協力を呑んだんだ。明日は付き合え」

怯えを包み込んで所は続けた。この場の議論は平行線を辿過るばかり。俺は長期戦を覚悟した。

「説得は諦めんぞ」

「俺もだ。梓、風呂の用意を頼む」

疲労の色を増した梓が重い腰を上げ、一度、俺達を振り返ってからドアの向こうに姿を消した。

Depend or parasit (依存か寄生か)

大学病院のある市内北部へと、所はボルボを走らせる。革張りのシートが冷房で冷えて心地いい。

「人口多能性幹細胞は使えんのか？ Glis1（グリスワン）は画期的な代替遺伝子だそうじゃないか」

「iPSか、試してはみたんだがな。アルファSAほどの効果は見られなかった。いずれにせよn（数）が足りん。お前の検証が終わったら、もう少し新大脳皮質の大きめな被験者を探すつもりだ」

知らない人間が俺達の会話を聞いていたら、医学会へと向かう熱心な研究の徒といった風に見えたことだろう。しかし、研究は諦めないぞと牽制を交える所と、それを止めさせようとする俺の主張は未だ接点を見い出せないでいた。

「再生医療か——人は傲慢だな。神の与えた寿命や運命に従おうとしないんだから」

「神だと？ 今や、そんなものは偶然のみにしか存在しない。ところでお前、家庭はどうなってる？」

「探偵に調べさせたなら、分かっているんだろう。女房は実家に帰ったよ」

所は嫌な話題を振ってくる。

「愛だの恋だのを盲信した結果だな。能力に劣る人間は、そういった不確かで目に見えないものに縋る。そんな感情は三年も経てば消滅する。愛情をなくして尚、寄り添う理由は何だ？ 経済的依存か寄生でしかないだろう。家族愛とか子供のためとかで自分を納得させ、本音に蓋をして暮らす日常がお前らの望みなのか」

理由がどうあろうと、双方が納得していれば他人が口を挟むことではない」

「その通りだ、知的レベルの似通った夫婦が互いに我慢し合えばいい話だからな。哀れなもんだ、俺にはこの程度の妻が似合いだ、こ

の生活に不満などないと自らを騙し続ける人生なんてな。そこへゆくと俺と梓は夫婦としても理想的だ。つまらない感情には左右されていない。経済的自立が十分可能な梓が俺と一緒に居るのは、成長の喜びを分かち合えるからだ。俺には分かっていたよ。覚醒したお前が現状に満足出来るはずはない。奥さんの不貞がなくとも俺の所へ戻ってくるとな」

活性化したオイラーズの知恵をもってしても、所の主張の全てに反論は出来ない。彼の語る家族観に、幾つか頷ける部分を発見してしまったからだ。

「お前はそうでも、梓はどうなのかな。彼女が恋愛感情も求めているとは思えないか？」

所が苦い顔になった。

「皮肉で言ってるんじゃない、単なる質問だ。成長の喜びを分かち合うといいながら梓に見せないファイルがあったろう。お前達の繋がりが同じ研究とその成果にあるなら、彼女はそれを不満に思っているんじゃないか」

「さっきも言った通り、n が足りないんだ。ちゃんと立証出来れば見せるつもりだったさ」

虚偽の電位が上がる。ただ、梓を出し抜こうといった功名心ではないようだ。ラップトップPCにあった別のファイルと所の思考から俺はある仮説を立てた。恐らく間違いないだろうとの予感があったが、今は口にしないでおく。

しかし、愛情だけではダメ、同じ志を持ってもこうなのだ。男と女にはある一定の距離感が必要なのではないかと俺は思った。例えば、それが社会の存在理由を否定することになっても。

「技術者に気づかれたくない。お前のデタラメな脳波と輝点の生成を気取られない方法はないか？」

「記憶してしまったものはいつか蘇る。記憶させないよう他に注意を向けさすしかないだろうな。やってみるよ。奇術師を真似てみよう」

「頼むぞ、まだ誰にも知られたくないんだ」

「相手はっひとりか？」

オペレーティングルームのエンジニアには手を打ってある。お前は検査担当技師の注意を逸らしてくれ」

「あいよ」

数年前に市街地の中心部から移転した大学病院のロビーは総大理石張りのグランドフロアが誇らしげで、三階まで続くエスカレーターは高級ホテルと見まごうばかりだ。実際、病院を舞台とした映画の撮影にも使われたと聞いている。放射線科は何故地下やフロアの奥まった場所にばかりあるのだろう。

《それはMRIもCTもデカくて重いから》

オイラーズが答える。なるほど、道理だな。しかし暗い廊下をとぼとぼ歩いていると、電気椅子に向かう囚人になったような気がする。放射性物質の注射はオイラーズが断固として拒否したため、SPECTはナシ。所は不服そうだったが、血流低下があれば、こんな冴えちゃあいないだろう、との弁証に、不承不承だが納得したようだった。

なんやかんやで四時間ほどは病衣のまま、あちこちを連れ回された。金属を身に付けていてはいけないそうで、ワンピースの病衣の下はすっぽんぽん。部屋の移動で回廊を渡る時、風で裾がまくれるのではないかと冷や冷やしたものだ。

《マリリン・モンローかよ》オイラーズの突っ込みは、些か古臭い。

「上手くいった。奴等は何も覚えちゃいないようだ」

「機器だけ動かして記録が残ってないんじゃないじゃあ後で不審がられるんじゃないか？」

「俺の知ったことか。これだけの規模の病院だ、カウンターと記録が合わないことなんざ日常茶飯事さ。連中もいちいち気にはとめんよ」

魚屋のオヤジが「ええい、オマケだ。持ってけ泥棒」と渡したの

を忘れ、残った鰯の数が合わないのとは訳が違う。そういった馴れ合いや緊張感の鈍麻が、医療過誤を生むのではないか？ この世界も案外恐ろしいものだなと思ったが、今の俺は所の共犯者である。

脳内に意識を向けると、オイラーズがシュラッグのウェーブの真っ最中だった。

コンピュータ処理が終わり、数枚の画像を受け取る時の所の顔は少年のように輝いていた。骨ならまだしも脳味噌の画像だ。所と梓がそれをじっくり眺める様子を想像して、俺はちよっぴり気恥しくなった。

「伊都淵、それだけの脳を手にして、お前は今、何をしたい」

上機嫌を継続したままの所が、帰りの車中で訊ねてきた。

「さあな、こうなる前の俺は細く、長く、目立たず、平凡に家庭を維持して人生を終えることが幸せなんだと思っていた。今の目標は……お前と梓の説得。そしていい人間の笑顔のために出来ることがあれば力になりたい。そんなところかな」

「持てる力を有効活用しないのは、罪悪で怠慢だ」

「何を以って有効活用だというんだよ」

「例えば政治だ。元来、役人の類は有事の際にのみ存在を示せばいいのだが、今は違う。彼等は国家の主役たろうとしている。そのツケはお前が後生大事に思っているいい人間——つまり弱者だな。彼等に回されているんだ。今のお前なら現行の腐ったシステムを叩き潰し、新しい社会へと改革が出来るはずだ」

「現状が正しいとは俺も思わんが、それは作られた俺がすべきことではない。精神の暴力にあたる」

「行政ってヤツは複雑になり過ぎてしまった。それを簡略化出来るのは暴力だったりもすることを覚えておけ。では、医療においてはどうか。お前に芽生えた力がお前の言う通りなら、病に苦しむ人の痛みを取り除くことも免疫物質の分泌を増やして快方に向かわせることだって可能だろう？」

「今朝も言ったじゃないか。俺は人が寿命や運命に逆らうことをよしとしない。老いが恥ずかしいことだとは思わない。若さにしがみつくこの方が見苦しいと思う。老化した脳なら、己のくたびれ果てた姿だって認識せずに済む。ボケて痛みを感じにくくなれるなら、それでいいじゃないか。それが自然の摂理ってもんじゃないのか？」

「違うな。人類は次なる進化を待たために生きている。お前だって風邪をひけば医者にも行くだろう？ 来るべき進化が訪れるまでは、蓄積した知識で病や災害に立ち向かう。医療も科学もそのための経過措置として存在しているんだ」

実験の手段と目的には賛同できなくとも、所の語ることが全て間違っているとも思えなかった。肉体も知性も刺激によって成長を遂げるものだ。以前の俺のように、お仕着せの人生に唯々諾々としていては、人は何も成長できないのだということ悟っていた。

「入札結果の発表は四日後だったよな。そのぐらいの外出は許してくれるんだろう？」

「ああ、いいとも。GPSの発振器を皮膚に埋め込ませてくれたらな」

「電位の操作が出来る俺に、そんなものが役に立つとも思うのか？ いい加減に人を信じることを覚えたらどうだ。俺はお前たちが研究を諦めてくれるまで、傍に居るよ」

今の俺にはそれ以外特に何をする当てもない。今夜のディナーは何だろう？ 所邸における奇妙な居候生活は二日目に入っていた。

Catharsis (浄化)

『居候、三杯目にはそつと出し』 のつもりで臨んだディナーは洋風、つまりパンだった。

梓が追加した三十枚を超える俺のレポートは、今日の日付で彼女のラップトップPCに保存されている。その上で人参やらほうれん草やらを生地に練りこんだパンなど、よく作っている暇があったものだと感心する。

ちなみに俺は人参が嫌いだ。脳がどう進化しようと嫌いなものは嫌いなので仕方ない。テーブル上を回される籠からオレンジ色のを避け、四つほどいただく。健康を考えた料理はすべからく薄味で、下品な嗜好を好む俺には物足りない。味覚の伝達回路の調節が必要だった。

ジャクジーのついた風呂なんぞ独身時代に入ったラブホテル以来だった。床暖房にミストサウナにと至れり尽くせりのバスルームだったが、シャワーのみで済ませたのは、こんなのに慣れたら後が困るといった貧乏人的発想である。脱衣所には新品のバスローブが置かれていたので拝借する。明日にでも自宅からパジャマを取ってくるか――半囚われの身の俺だが、思考は至って呑気なものであった。

二階の客間を仮の住まいとして与えられた。ラップトップPCを開いて確認したオプシントレードの成果は良好。純粋な興味で、先物取引にも手を広げてみようかと思ったが《こちらのプラスは誰かのマイナス》とオイラーズに釘を刺されて止める。妻と娘が食べに行けるだけ稼いだらこれからも手を引こう。俺はそう決めた。

深夜、何度もドアの向こう側に人の気配を感じた。向かうところ敵なしのオイラーズにも休息は必要だ。夜間は生存本能に関わる連中の一個小隊を交代で歩哨に立たせ、その他は休ませる。そして日中はその逆をしていた。それを所に気づかせる訳には行かない。そんな時の俺は立ったまま眠る馬みたいなので、簡単な受け答えは

出来ても、普段の――もはやどれが普段の俺なのかは、はっきりしなかったが、昼間の俺ではない。頭のいい所のことだ、それに気づくようなことになれば、なんとかして俺の頭を切り開くための戦略を立ててきただろう。そんな訳で気配には物音で答えた。無駄な諍いは避けるのが、大人の良識的判断というものだ。

客間のある邸宅を持ち、先生と呼ばれる名誉ある職に就き、更には才長けた美しい妻をめとった幸せで満足は出来ないのか。所はそれが向上心であると言ったが、俺には理解出来なかった。

彼等の朝食は機械的だった。ローファットの牛乳に同じくローファットのベーコン、ピッチャーに入れられていたのは野菜ジュースで、トーストには何もつけず黙々と口に運ぶ。時折、所が俺の脳画像を梓に見せて意見を求めるといった朝食風景は、俺にとって異様でしかない。そんなものを見せられて、よく食欲が減退しないものだ。

おそらくこれが彼等の日常なのだろう。所は出勤して、片付けの終わった梓はラボで研究を続けたいと言う。俺は従順に検査に付き合うが、バイタルに特別な変化はない。一通りのチェックを終えた梓が「どうする？ 私を抱きたい？」と言ったが、性的欲求もなく、彼女の注意を逸らす理由もない今、俺にそんな気は起きなかった。「着替えとパジャマを取ってくる。GPSの発信器でも埋め込むかい？」

「無意味でしょう、そんなものは。私はあなたが電位を操れるのを知っているんですもの。でも、お願い、戻ってきてね」

手元に置いておきたいのは貴重なモルモットとしての俺か、梓に女性を取り戻させることの出来る俺なのか、彼女の真意を探ろうと思えば出来たが、俺はしなかった。

「信じろよ、俺は君たちが実験を諦めてくれるまでここに居る。なあ梓、これが進化だと思うか？ 何の欲望もなくなり、ただ君らの誤ちを正すために生きているようなもんだ。これが神の領域だ

というなら、神様は相当退屈だと思うぞ」

「私があなたと同じ力を手にしたらそうはならない。医学と人類の発展に大きく役立てるはずだわ。世界を変えられる力があって、それを使わないのは卑怯だし怠慢よ」

やれやれ、この夫婦は俺への非難まで同じ口調になっている。

「夕方には戻る」

俺はそう告げて体を起こした。何か言おうと口を開きかけた梓だったが、それは発せられないまま彼女が口を閉じた。

自宅には妻や娘が戻った形跡はなかった。着替えや通園カバンまで持って実家に帰ってるのだろう。十年かけて築き上げた婚姻関係が、こうもあっさりと破綻するなどとは、以前の俺なら思いもしなかったろう。家庭への精神的な献身を怠った自分を棚に上げて妻の不貞を罵り、激昂する感情をぶつけ合い、そして娘たちを理由に関係の修復の途を探る。こうなる以前の俺だったら間違いなくそうしていただろう。そして、すったもんだの末、元の鞘に収まる。そんな小競り合いみたいなコミュニケーションも夫婦には必要なのかも知れない。妻を迎えに行こうともせず、不遜にも人類の未来を憂いて所邸に入り浸る。そんな俺の振る舞いが人間らしいとは思えなかった。

着替えを詰め込んだバッグを社用車の荷台に放り込むと、俺は家の鍵を鉢植えの下に隠す。帰って来る場所が残してある。全ては妻の判断に任せよう。投げやりになった訳ではない。物事は収まるべきところにしか収まらないと考えての行動だった。

静かな場所で美味しいコーヒーが飲みたい。ふと、そう感じた俺は、ラップトップPCを開いてカフェの情報を調べ、或るキャッチコピーに目を留めた。

『クレマたっぷり、魅惑のストロングコーヒーをお届けします。
レイクサイドカフェ』

大山興信所

ちゃんと施錠して出たはずのドアが開いていた。カフェに併設されたオフィスは五坪ほどのこじんまりとした居住いで『身上調査・家出人搜索・企業調査全般 大山興信所』と書かれた小さな看板も注意して見なければ大抵の人なら見落としたことだろう。加藤祐二は警戒しながらオフィス内へと体を滑り込ませる。

「おかえり、ご苦労さん」

「あ、お戻りだったんですか」

奥のデスクでファイルに目を通していた男が顔を上げた。表情に乏しく、口調も平坦な男の年齢は分かりづらいが、加藤の口ぶりからして上司、若しくはこの責任者のだろう。

「このところ、ずっと戻れないで迷惑をかけている。業務は順調か？」

「身辺調査、まあ浮気調査ばかりですけどね。でも、こんな時代だから仕事には困りません。他には営業部で接待名目の支出が多過ぎるから調べてくれといった企業の内部調査が一件進行中です」

「これは？」

手にしていたファイルを掲げて男が訊ねる。？伊都淵？の字が読み取れた。

「ああ、よく分からない調査です。脳に障害がある男を保護したいからと、同級生だった医者夫婦に依頼されたんですが、最初は誰でもいいから直情径行型の人間を探してくれと言われ、何だか気味が悪くて放っておいたんですよ。そうしたら次にその男の名前を電話してきて、見つけて現状を調査しろと依頼内容が変更されたんです。報酬は悪くないです」

「ふむ、あまり怪しげな依頼は受けない方がいい。私はまだ農園の一期生と共に被災地から離れられないでいる。面倒は避けておくん

だ。小野木さんがあんなことになって、東北と中ノ原市を行ったり来たりで、こっちまではなかなか目が届かない。お前ひとりで手に余りそうな依頼は断った方がいい」

「そうします。農園では葬式もあげなかったんですよね？」

「生前、奥さんに遺言として伝えてあったそうだ。遺骨は砕いて農園に撒いてくれ。俺なんかと別れを惜しみたいてって奇特な御人は居ないだろう。義理で参列する人々も暇ではない。何より被災地の支援が滞るのが心配だ、と言われていたそうだな」

「で、奥さんはその通りにしたんですか？」

「ああ、気丈な人だ。最後の最後までバカなんだから、この人は、と涙を浮かべていらした。今、農園で預かっているのは就学援助が必要な家庭の子供たちが殆どだ。元、教師だった奥さんも幾らかは気が紛れることだろう」

「小野木さんと言えば……」

加藤は伊都淵が口にした言葉を思い出す。

「どうした？」

「いえ、その調査のターゲットなんですがね、嫁さんの浮気で頭でもおかしくなったのか、人の考えが見えるなんて話していたんですよ。そうかと思えば俺が解析に苦労していたパスワードをパソコンも使わずに探り当ててみせて……十桁のパスワードはまぐれでは解けません。医療機器の冴えない営業マンに出来ることじゃないんです。その上、まるで小野木さんが生き返ったみたいに、あの人そっくりの口調で、あの人が言ったままの内容を、俺に話してきたんです。顔も外見も全く似ていない。強いて言うなら広めの額ぐらいが相似点といったところで——どうやら俺、そこで一服盛られたようなんです。そのせいなのかな？ ……いや、あれはその前だったはずなんです」

加藤は顎に手を当てて考え込んだ。

「ほお、見てみたいもんだな、その男を」

「俺も気になっているんです。男が逃げないように見張りを頼んだ

俺を眠らせたことも、亭主の医者が勤務から戻った途端に追い払われるように依頼を中断されたことも不自然です。あそこでは何かが起こっているように感じます」

「依頼された以上の詮索は止めておけ。身を滅ぼすことにもなりかねん」

「ええ、それはそうなのですが……あっ！」

ドアの外へと何気なく視線を振った加藤の表情が強ばる。

「どうかしたのか？」

「さっき話した男が隣の店に……ほら、あいつです。そのファイルの男」

鍛冶千光

レイクサイドカフェというからには湖の畔にあるのかと思ったが、隣はN T Tのビルだった。検索して地名を知った時から、あんな場所に湖などあったろうかといった疑問を抱き続けていたのだが、立地に何の関係もなくつけられ店名なのだということがわかる、まあ、コーヒーが美味ければ、そんなものはどうでもいい。

店はカフェというよりも昔ながらの喫茶店といった風情で、客は老夫婦がひと組だけ。店内に流れる音楽のボリュームは適正で趣味も悪くない。静かにコーヒーを楽しむには文句のない環境だった。

今時、珍しくコックコートに身を包んだ長身で五十絡みの男が厨房に一人、客の世話は同じくコックコートを着た少し臺の立った女性がこなしていた。

「クレマたっぷりのストロングコーヒーを」

ネットに載せられたキャッチコピーそのままの注文にウェイトレスが微笑んでくれたが、あまり魅力的では……言うまい。俺の目的は美味しいコーヒーだったのだから。

しかし、何故か落ち着かない。この店に入る前から、絡みつくような視線を感じていた。目に映る範囲の思考にそれは見当たらず、オライズズの誤作動かとも思ったが、そうでなかったことがほどなくして証明される。

「相席をよろしいですか？」

どう表現すればよいのだろう、中肉中背、顔にも髪型にも、これといった特徴の見られない無個性な男が俺の前に立った。ガラ空きの店内で、相席など申し出る必要はない。どうやら、俺に向けられた視線の発信元はこの男だったようだ。そして、その思考が純粹な興味であることを読み取る。

「男同士がテーブルを挟んで向かい合うのも色気がないですが、よろしければどうぞ」

「では、失礼して」

男が腰を下ろし、コーヒーを注文した。コックコートの二人が怪訝そうな表情になるが、それはその男に向けられたものではなく、この状況に向けられたものだった。彼等は顔見知りなのかも知れない。「私は、隣の興信所を預かっているカジと申します。うちの加藤がお世話になりましたようで。伊都淵さんとおっしゃるのですか？

珍しい御苗字ですね」

？ 大山興信所 鍛冶千光？ と書かれた名刺を差し出す。隣だったのか、なるほどね。だったら、全てに合点が行く。梓に眠らされた男の上司なのだな。能面のように無表情が貼り付いた顔は持って産まれたかのように自然で、加藤より一枚も二枚も上手だといった感を漂わす。オイラーズに分析を託すと、次のような回答が返ってきた。

《油断をしないに越したことはないが、悪い人間ではないようだ》

同時に警戒レベルも引き下げられたので、俺はテーブルに届いたコーヒーを手に取った。確かにクレマたっぷりで深みのある香りが漂う。三グラム包のグラニュー糖を一本入れてかき混ぜ、口に運ぶ。看板に偽りなし、美味しいコーヒーであった。伏せられた伝票の値段も至極良心的。少し遠いが、これだけの味を楽しめるのなら足を延ばすことも厭わない。コーヒーチケットを買っておこう。一方でそう考え、鍛冶と名乗る男を見据えて答えた。

「いえいえ、俺の気づかないところでお世話になっていたのは、こちらだったようです」

牽制球の偽投程度では、男は顔色一つ変えない。

「私のパートナーをご存知のですか？」

彼の注意は俺の指の動きから眉毛の上下にまで行き渡っている。きつと洞察力に長けた人間なのだろう。物を訊ねる時も情報は最小限に留め、相手が口をすべらせるのを待つ。そんな手法を得意とし

ているようだった。

「小野木さんのことですか？ いえ、面識はありません」

「では、どうやって彼の名前や発言の内容をお知りになられたのです？」

「言っても信じませんよ。それに加藤さんから予備知識は仕入れておいでなのではないですか？」

質問には質問で応じる。敵か味方か判らない人間に、正体を明かす愚は犯せない。

「用心深い方のようだ」

恐らく微笑んだのだろう。ほんの少しだけ持ち上がった唇の端からそう判断した。

「そちらこそ」

世間話を交えながら丁々発止の探り合いが二十分ほど続く。俺はコーヒーのお代わりを頼んだ。今度は長身の男が運んできた。余計なお世話だが、このウェイトレスはトイレの回数が多く、しかも長い。

「鍛冶さん、こちらは知り合いなの？」

「いえ、初対面です、祐二が小野木さんに似ていると言いましたね」

「あいつに？ へえ、俺にはそうは見えないな」

「ええ、確かに外見に相似点は少ないです。しかし、内面はどうでしょう。大山社長は、そういったものを素早く見通すことに精通しておられましたよ」

「また、オヤジの話か——頼むから俺と比べないでくれよ。で、こちらの内面が小野木に似ているって鍛冶さんと思うのかい？」

「さあ？ なかなか本音を語っていただけなので」

話の焦点が小野木という人物に絞られたのを見計って俺は割って入った。

「その小野木さんて方はどんな人なんです？ 似てる似てると言われると気になってしまうのですが」

「生きておられれば、あの人もあなたに興味をもたれたことでしょ

う」

東日本大震災の被災地でボランティアに励み、震災孤児と仲間を命を救うために犠牲になった男の話を聞かされる。そんな人間がまだこの国に居たのか――胸が温かいもので満たされる気がした。僅かな時間の会話だったが、鍛冶の評価は？悪い人間じゃない？

「から？いい人間？に格上げされていた。俺に或る考えが浮かんだ。『東北におられるんでしたね。復興は進んでますか？』」

あれだけの被害です。そう簡単に元に戻るものではありません。

多くの人が色んな形で支援を表明していますが、それが即座に現地の方々の救済につながる訳ではありませんし……如何です？伊都淵さんも一度現地に足を運んでみられませんか」

「そうしたいのは山々ですが、暫くここを離れる訳には行かず……理由は加藤さんにお尋ねください。これをお渡ししておきます。使途はお任せします」

俺は残高が数千万に膨れ上がっていた預金通帳と印鑑を差し出した。通帳を開いた鍛冶さんは目を丸くする。よっしゃ！無表情の本丸に一步踏み込んだぞ。オイラーズが小さくガッツポーズをした。

「これは……いや、しかし何故こんな大金を私に？初対面ですよ、我々は」

「あなたが、いい人間だと、俺の中の何かが教えてくれています。小野木さんの精神にも感銘を受けました。幸い俺には済む場所も仕事も――いや、仕事はなくなるかもな。でも、健康な肉体があります。持つものが持たざるものに。それが果てしなく順送りにされれば、多くの人生が豊かになる。そうは思われませんか？」

「義援金として新聞社にでも持ち込めば、形として残りますが」

「いつ被災者の手に届くか分からないアレですか？ご冗談を。それに、下手に新聞に名前でも載った日にはタカリが増えるだけです。あなたならそれを有意義に役立てていただけると信じています」

「ありがとうございます。あなたの期待を裏切らないよう、現地スタッフとよく相談して使途を決めたいと思います」

「いつかきつと、被災地に行きます。その時はあなた方のお手伝いをさせて下さい」

いい人間と過ごす時間は快適で心が休まる。俺は鍛冶さんが差し出した右手を強く握り返した。

「住民票は中ノ原市ですが、今はほぼ杜都市のボランティア事務所におります。ご用の節には、こちらの大山さんか祐二にお伝え下さい」

「分かりました。ところで、こちらのコーヒーは本当に美味しい。用がなくとも、ちよくちよく邪魔させてください。コーヒーチケットはお幾らですか？」

俺と鍛冶さんのやり取りを興味深げに見守っていた店主に訊ねた。「小野木に似ているか……祐二君がそう言った理由が分かる気がするな。コーヒーは永久無料だ、いつでも寄ってくれ」

意気を感じると言う言葉がある。おそらく大山の男気が、それに呼応したのだろう。だが、俺はその提案を退けた。

「大山さんが淹れるコーヒーは金を払って飲むだけの価値がある。ただなら、俺はもう来ませんよ」

「あはは、気に入った。じゃあ、こうしよう。お代わりは何杯飲んでもただだ。それならいいだろう？」

「ありがとうございます」

「ヒゲはないが、確かに小野木のハートを持っているようだ。あいつの分まで人生を謳歌してくれ」

大山の大きな手で背中をはたかれ、俺は口に含んだコーヒーを吐き出しそうになった。

こういった？いいカッコしい？が、こうなる以前よりの俺の悪いクセだ。若しくは？悪銭身につかず？といったところか。住宅ローンや光熱費が、口座振替になっていたので、新たに口座を作る必要に迫られた。所邸で取り戻した財布に入っているのは五千円札一枚と千円札が数枚。次の引き落とし日前に給与の振込みはあ

りマイナスになる恐れはなかったのだが、何かあったら大変だ、と
気の小さな俺はそそくさと銀行へ向かった。

M i s c o n s t r u c t i o n (錯覚)

「すまないが、少々、金を貸してもらえないだろうか」

所邸へ戻った俺は梓に金の無心を頼み込んだ。さすがに数千円のタネ銭ではオプション取引も始められない。

「百万もあればいい？」

資産家の妻は言うことが違う。元金を回収して手っ取り早く稼ぐにはタネ銭は多いに越したことはない。オイラーズはアローヘッド（高速売買システム）のパーソナル版ともいえるものの構築に成功していた。ヘッジファンドの戦場へと切り込んでゆくための、その重火器は、秒間数千の自動注文をこなす。当然、相手はデイトレーダーや個人投資家のレベルでなくなるため、誰かの懐具合に胸を痛める必要もなくなるという訳だ。

「悪いな、一週間もあれば利子を付けて返せると思う」

「いいわよ、そんなのいつでも。でも、それでは気が済まないんじゃない？」

梓の瞳が露骨な交換条件を提示してきた。

「あれか、俺は構わないけど……」

「けど、なあに？」

「所も気にしていないと言うが、君はどうなんだい？ 世にいう貞操観念ってヤツだよ。所に申し訳なく思うとかはないのかい？」

「この時代、あなたみたいにセックスは愛情の交換であるべきだなんて思っている人間は少ないわ。単なる欲求の解消よ。だったら目一杯楽しんだ方がよくはなくなってる？」

なくなってる？ と、来たもんだ。言葉遣いは上品でも要求は動物の本能に基づいた行為である。それが本来の生存本能に法ったものならまだしも、薄いラテックスを介しての擬似行為へと変質したものに、何の価値があるのだろうか。そういった欲求の消えた俺にとって、

快樂によつてとはいへ梓の美しい顔が歪むのも、彼女が上げる嬌声も、嫌惡とまでは行かないが、すんなり受け入れるには抵抗があった。しかも借金のカタよろしく肉体を提供する行為は、古きこの国の悪しき慣習をも彷彿としてももの哀れを誘う。見知らぬ男に純潔を捧げねばならなかった少女達の胸中を察して息が詰まる……といったほどのことではなかったのだが。

「シャワーを借りていいかな」

「そんなの後でいい。後一時間もしたら彼が帰ってくるわ。さあ、早く」

俺は風俗に行った経験はないが、急き立てる梓が『お客さん、早くしないと延長料金よ』と告げるベテランソープ嬢のように思え、やるせない気持ちになった。いっそ快感の回路を開放してやろうか、単なる医師の妻ではない。美貌の医師の妻との赤裸々なセックスを文章にすれば、さぞ秀逸な官能小説が書けたことだろう。勿論、そんな不埒な考えにオイラーズの賛同が得られるはずもなかったが。

新たな人生が与えられるならば、次は絶対に女性に産まれてきたい。そう思わせるほどの梓の反応だった。歡喜の頂は男のそれよりも遙かに高く、そこにとどまる時間も桁違いに長い。しかも、女性は男性と違って回復のための時間を必要としないのだ。梓の内で過ごす時間が四十分ほど経過した時に、彼女が発した思考『凄い、イキっぱなしだわ』は、残念ながら男性の遺伝子には組み込まれていないものである。なにかに書いてあった？ペニスの先が感じる数秒間の快樂？とは、明らかに異なる次元の快感を女性は享受出来るのだ。出産という男どもには決して耐えられない痛みと引き換えに。「そろそろ所が帰ってくるんじゃないか？」「いいから、黙っててっ」を繰り返し、梓は毎度の如く――いや、今回は俺の眼下に弛緩しきった体を横たえる。贅肉もなく引き締まった梓の腹部には、汗溜まりが出来ていた。

「寝るなよ」

「分かってる」

そう返事はするが、梓は体を起こさない。ここでも俺はお人好しぶりを発揮してしまった。

「夕飯の支度、俺がしてやろうか？」

梓が気だるそうな顔を俺に向ける。

「出来るの？」

「ああ、冷蔵庫を開けてもいいかな」

「じゃあ、お願い。何でも好きに使って。あたし、もう動けない」

「あたし」ですか……。？わ「が」？あ「」に変わっただけで、梓に女性の柔らかさを感じてしまった。幼き懸想を捧げた中学生時代、追えども縮まることのない彼女との距離を嘆き続けた俺の感傷は二十数年を経て思わぬ形で実を結んだ。情動の回路を弛めていなければ、彼女を強く抱きしめ『愛してるよ』などと、のたまってしまったかも知れない。

しかし、三日で三回は多過ぎる。新婚夫婦じゃないんだから。目を閉じた梓から視線を引き剥がすようにしてラブホ、もとい、ラブを出た。

Number

「何だ、これは？」

「肉丼っていうんだ。死んだオフクロの得意料理でな」

牛肉をニンニクで炒めて、すき焼きのタレを絡め、大葉と紅生姜、卵の黄身を彩りに加え、銀シャリにぶっかけて食べる。テーブルに着いた所が顔をしかめたところを見ると、お上品な彼にはお気に召さないらしい。

「梓は？」

「ラボだよ、今朝、俺のバイタルを調べて以来、入り浸ってるみたいだぞ。新しい発見でもあったのかもな。それはいいから食ってみろって」

昼間、俺が出かけたことも、梓とのセックスも所には言わないほうがいい、俺はオイラーズの指示に従った。

箸を取ってひとくちだけ口に運ぶと、所は再び顔をしかめる。

「味が濃過ぎる」

「頭脳労働者のお前にはそうでも、ラグビーの練習で疲れて帰った俺には塩分補給も必要だったんだ。オフクロの創意工夫がこもった料理だぞ。こう、ガツガツって感じで食べてみろよ」

「腹は減っていない」

「面倒臭いやツだな、お前も。だったら風呂にでも入って来い。湯は張ってある」

「風呂もお前が？」

「ああ、いい主夫になれそうだろう？」

所は俺の軽口に取り合わず、ぷいとダイニングを出てしまった。何か病院で面白くないことでもあったのかしら？ 留守を預かる主婦の思考を真似てみる。「エプロンでもしていれば彼の応対も違ったのかも知れないわね」おちゃらけた発想でキッチンを見回してみるがエプロンは見当たらない。そう言えば、梓のエプロン姿

を見た記憶もない。生活感と趣に欠けた家庭だなと思ったが、俺自信、所のような態度を妻にとっていたことを思い出して自己嫌悪に陥いる。そして数分後、とろんとした目をして梓が入ってきた。

「あら、本当に作ってくれたのね。いい匂い、創太郎は？」

「口に合わないらしい、風呂へ行ったよ。君はどうする？」

「いただくわ」

梓はキッチンと手を合わせてから、箸を取った。膳のしっかりした家庭に育ったのだろう。彼女の両親はどんなだっけ？ パペッツの回路を探ってみる。

《見てないものは記憶されてません》

役人口調でオイラーズが答えてきた。

「おいしいわ、ちょっと味は濃いかな。創太郎には合わないでしょうね」

「君の実家はとうだったんだい？　ここんちみたいな薄味ばかりだったのか」

「いいえ、父と妹はこういった丼物が好きだったわね。母はよく、味が薄いって叱られていた。なんだか懐かしい」

梓の遠い目に郷愁が浮かんだ。

「伊都渕君のお宅はどうだったの？」

「うちは中流の下だったからな、コロッケでもトンカツでもパンパン叩いて平べったくしてから、ソースに浸して食べたもんだよ。今、思えば質量は変わらないのに……バカだったなあ、俺も親父も」

あはは、と声を上げる梓の笑顔は中学時代の面影のままに輝いた。
「で、今は？」

「知ってるんだろう？　妻と娘たちは実家。あいつの浮気のせいだけじゃない。俺にも随分、落ち度があったように思う。それに気づけたのは、この脳味噌のお陰かもな。味噌汁も飲んでみろよ」

その話題を長引かせたくない俺は料理へと逃げる。

「何が入ってるのかしら」

「海鮮汁だよ。冷凍庫にあった、カニを使った。そっちは素材の味

を生かしたかったから、うんと薄味にしてある」

梓が腕を口元に寄せる。白い喉が小さく上下した。

「おいしい、私より料理が上手なんじゃない？」

「そんな訳はないさ。ここで御馳走になったディナーは、どれも豪華でメニューも豊富。俺に出来るのは、これかインスタントラーメンぐらいのもんだからな」

「私だってレシピ通りに作っているだけよ」

「一般家庭では使わないような高級な食材を使ってね」

「気に入らない？」

梓が眉根を寄せた。

「俺が気に入る必要はないだろう。君は所の妻なんだから」

「引っかかる言い方をするのね」

「いいや、真実を述べたまでさ」

電位を見るまでもない。彼女の表情に不快感が広がった。俺の言葉が皮肉か侮蔑とでも受け取ったのか、会話は途切れたままで気詰まりな時間が続いた。

「ごちそうさま、美味しかったわ。片付けは後で私がするから、そのままにしておいて」

そう言って梓が席を立つ。俺は黙って頷いた。

廊下にと続くドアに手をかけて、梓が振り返った。

「お金、部屋に置いておいたから、創太郎に見つかる前に仕舞ってね。あなたに何も与えるなど言われてるの。彼はあなたが出歩くのも快く思っていないわ」

「いいのかい？」

「さあ？」

笑顔をなくした梓の端正な顔からは何の感情も伝わってこず、伶俐だけが強調されていた。無表情だったにも関わらず鍛冶さんからは温かみを感じた。感情を伴わない表情こそが、その人間の本質ではないのだろうか。オイルーズからの回答はない。全員が腕組みをして首を捻っていた。

Pretty woman

「出かけてくる」

「あら、また？ 今度はどこへ？」

「またって、まだ二回目じゃないか。当てはない、まあ、気分転換
ってところかな」

レイクサイドカフェに言ってコーヒーを飲み、久しぶりに繁華街
の雑踏でも歩いてみようかと考えていた。

「付き合ってあげましょうか？」

「君が？ どういう風の吹き回しだい」

「あなたのレポートも？ 特に変化なし」ばかりで研究も停滞し
ているの。私も気分転換がしたくなつたわ。創太郎の部屋着も仕入
れておきたいし」

同じ出歩くなら一人より二人、そして並んで歩くなら野郎より女
性、●●より美形の方が良いに決まっている。俺に異存はなかつ
た。

「コーヒーは嫌いかな？ 美味しいストロングタイプを飲ませる店があ
るんだ」

所の嗜好なのだろう、この家ではただの一度もコーヒーを御馳走
になつたことがない。梓が嫌いじゃなければ良いのだがと、提案し
てみた。

「コーヒーか……何年も飲んでないわね。いいわ、行きましょ」

実態はともかく、夫の居る美貌の妻と、逃げられてはいるが妻子
の居る男との奇妙なデートの幕が開く。世に言うダブル不倫の自覚
は俺になかった。

きっとシルクなのだろう、値段を聞いたらびっくりしそうな凝っ
た造りのワンピースを、梓は胸ぐりの深いカットソーの上に着てい
た。片や、いつものポロシャツにくたびれたジーンズの俺。梓が後

部席に座ったら、俺は身だしなみの悪い運転手にしか見えなかったろう。彼女のレクサスをレイクサイドカフェへと走らせる。

「車の件はごめんなさい」

梓が珍しく殊勝な顔で言った。最初に幽閉された時、俺の洋服と車齡十五年のポンコツは処分されてしまった事を聞いていた。

「東北に持って行けば使い途もあったかも知れないけど、こっちじや値段もつかない車だ。いいよ、もう」

「この車は、私専用なの。いつでも使ってくれていいわよ」

「社用車があるよ、慣れない高級車でキズでもつけたら困る」

「気にしないのに」

重ね重ね言うが、俺は小心者である、それも筋金入りの。八百万もする車をビクビクしながら運転したところで借り物にしか見えなかったろう。

「やあ、いらっしやい。奥さんかい？ 凄くキレイな人だな」

大山さんの言葉には、説明が面倒だったので曖昧な笑顔で返した。梓が俺の妻ではないことは加藤さんも鍛冶さんも知っていたはずだ。大山興信所の守秘義務はキチンと守られていると判断した。そして、隣のオフィスに人気はなかった。

先日のウェイトレスではなく、若く逞しい腕をした女性が注文したコーヒーを運んでくる。同性から見ても梓の美しさは際立っているのだろう。？垂涎三尺去さる能わず？ を彼女は体現していた。

「恵子ちゃん――」

俺の困惑に気づいた大山さんに促され、ウェイトレスはようやくテーブルを離れた。大山さんが目で謝意を表明されたので、俺も会釈で返す。それを見て梓がくすりと笑う。背後で何が起こっていたかは気づいていたはずだ。なのに、優雅な所作はしなやかさを保ち続ける。誰もが美形と認める梓にとって、きっとこの程度の侵食行為など日常茶飯事で慣れてしまっていたのだろう。影の薄かった以前の俺など、人目を引くどころか「あれ？居たの？」と言われることも屢々だったというのに。

「どうだい？」

「ええ、美味しいわ。うちは創太郎の嫌いなものは置かないの。結婚する前は、私もよくコーヒーを飲んだんだけど」

「また、君を怒らすかも知れないが、言わせてもらおう。何も、全て所に合わせる必要はないんじゃないか？」

「私が苦痛だと思えばしない。そうは思わないから、創太郎に合わせているだけよ」

「そうか、ならいい」

特に不快になったようでもなく、俺は安心する。オブザーバーのつもりで所邸に居座った俺だが、彼等の認識はモルモットとしての珍重だったはずだ。その実験動物に意見をされるなど心外この上なく思えるのではないかと考えていた。

俺の脳味噌は刺激に飢えていた。医学の話題となってオピオイドがどうのGABA神経群がどうのと滔々と語られるのは興醒めだが、それ以外なら麗しき女性と知的な会話を楽しむ贅沢は、誰もが恵まれるチャンスではない。今日のところはプライバシーに関する提言は差し控えよう。そう考える俺は、やはり小心者だった。

「看板が上がっている、駐車場はあっちじゃないのか？」

尾張市まで足を延ばし、老舗デパートの正面にレクサスを横付けした梓は、「黙って見てなさい」といった目を俺に向けると携帯電話を手取る。後方から鳴らされるクラクションに気をとめるでもなく悠然としたものだった。

「外商の栄村さんをお願ひします。井ノ口市の所 創太郎です」
「外商？ 一般市民には馴染みの薄い言葉だ。僕ら一ズだったら、きつと「ガイショウって何だ？」となったに違いない。」

「正面に居ます」

自分の家庭を築いて尚、中流の下たる暮らしから脱却出来てなかった俺は、得意客である梓が駐車券の優遇でも受けようとしているのかと思った。所邸で金持ちの日常を共有していたつもりだったが、

それはほんの一部分を垣間見ただけに過ぎなかったことを思い知らされる。デパート隣の路地から走り出てきた男二人が、まるでコマツキバツタのように交互に頭を下げはじめた。

「これは、これは所様、ようこそおいでくださいました。大変、お待ちせして申し訳ありません。ささっ」

とは言え、コマツキバツタが頭を下げる様を見たことはない。所邸にあった百科事典に載っていたショウリョウバツタの写真を思い描き、当の栄村某とイメージを重ねてみる。グリーン系のスーツと、ビル風に儂くなびく簾。髪がバツタの触覚に見えなくもない。？大変？　ほど、待たせてなくとも、そう言わねばならないのだろう。俺が所に入札の件を頼み込んだ時も、こんなだったのか。営業職の佻しさがヒシヒシと伝わってきた。

若い方の男がレクサスに乗り込んで発進させる。一般来客とは別の駐車場にでも運ぶのか、別に金持ちが羨ましいとも思わなかったが、平然とこんな待遇を受ける人種が居ることには驚いた。

「うちは、調度も洋服も全てここで買っているの」

幸い梓はドヤ顔にはなっていないかった。はいはい、あの俺より背が高い置時計や見るからに舶来と思しき応接セットですね。紫檀《製》のサイドボードも忘れてはなりません。ええ、ええ、バツタさん達の腰の低さも頷けますとも。

ご立派なデパートで売られている洋服は値札もご立派だった。俺より細身で七〇八センチほど背の高い所の洋服を買った梓だったが、俺に試着をさせては「いいわね、いただきわ」と、瞬く間に数点のシャツやズボン（販売員はトラウザースなどと、のたまっておられたが）の購入を意思表示した。『女の買い物は長い』は彼女の場合、当てはまらないようだ。

おかしかったのは、栄村某と店員の俺への対応だ。所の人相風体を知らないはずはない。ならば、このみずばらしい男は誰なんだ？　梓の物言いから判断するに執事《でもなさそうだが――と、いった感じで、上にも下にも置けず、終いには俺を居ないものとして扱う

ことに決めたようだ。

？購入の意思表示？　と言ったのは荷物持ちぐらい買って出るつもりだった俺に、誰も商品を手渡そうとしなかったからだ。帰るまでには車に積み込まれているのか、或いは明日にでも自宅に届くのだろう。数年前、気取った店で気取ったバッグを買った妻が、物欲しげに伸ばす手を店員に苦笑で諫められ、店を出たところで心のこもってないおじぎと共にやっと手渡されたことがあった。こういうシステムもあるのかと二人で顔を見合わせたものだった。しかし梓へのもてなしは、それとも一線を画していた。頭の中にこんな歌が流れます。

P r e t t y w o m a n , ———— この場合、俺がジュリア・ロバーツ役に当たるのだろうか？　今夜から寝る前にデントアルフロスを使う習慣にしよう。

Coincidence (偶然の出会い)

「夕飯は要らないのね？」

梓の問いかけは、出掛ける主人を見送る妻のようだった。

「ああ、たまには下品な下町の味を思い出したくなってるね。勝手を言っでごめん」

創太郎の食事の支度をしなきゃいけないの。私は付き合えないわ」「君に似合う店じゃない。遅くならないうちに戻るよ。創太郎に叱られたら、俺が君の脳波をいじって勝手に出ていったとも言っておくといい」

高校時代から通いつめたラーメン屋は、所邸から六kmほど離れた場所にある。車齢は、それほどでもないが日夜営業で走り回る社用車の走行距離は十六万キロにも達しようとしていた。エンジンのノイズが大きめで、足回りからもタイヤの回転に合わせて大きな唸り音が聞こえてくる。リースの終わった車両を引き取る業者は、さぞや嘆かれることだろう。

仰ぎ見る空には低く雲がたれ込め、雨が近いことを知らせている。俺はラーメン屋の引き戸を開いた。隠し味に使われているらしい生姜の香りが店内に立ちこめ、食欲をそそった。値段は三割増しになっていったが変わらぬ味にはリピーターも多く、グルナビに載らないのが不思議なほどの店だった。客の七割が味噌ラーメンを注文するそうで、餃子や唐揚げ等、サイドメニューは一切ナシ。味噌、醤油、塩、大盛りか普通盛り、具が多いか少ないだけのメニュー展開で、ラーメンのみにこだわっているこの店は今日も繁盛していた。

北方先住民族を思わせる小柄な調理人の眉毛は栄養の行き届いた毛虫の如き太さで、二の腕も剛毛で覆われている。大きな中華鍋を持つ手首には厚手のサポーター、あの重量を来る日も来る日も振り回していれば腱鞘炎が持病になってもおかしくはない。

全席カウンターの対面に見覚えのある顔があった。眼鏡をかけて

はいたが、つい先日入札書類の作成を手伝ってもらったばかりの日高依子を見間違うことはない。見慣れた事務服でなく、シンプルなカットソー姿で肩までの髪を後ろで一つに束ねていた。ラーメンの湯気でレンズが曇るのか、時折眼鏡を外してはハンカチで拭いている。隣に座る同じような年格好の青年と言葉を交わす様子から、彼氏なのだろうと想像した。例えば俺みたいなのでも、会社の同僚と顔を合わせれば挨拶の一つもせねばと感じるだろう。そんな気遣いをさせたくはなかったのだ。俺は顔を伏せたまま届いたラーメンを一気にかっ込んだ。

「伊都淵さん」

駆け寄る足音が俺の背中では聞こえる、こっちが気づかないふりをしてやったのに何もわざわざ……そうは思ったが俺はにこやかに振り返った。

「やあ、君も来てたんだ。偶然だね」

振り返った途端に「やあ」である。わざとらしいことこの上ない。

「ええ、伊都淵さんもあたしに気づいていらしたんでしょ？ 声をかけてくだされば良かったのに」

「俺がデートの邪魔をするような野暮な男に見えるかい？」

「デート？ 嫌だ、あれは弟です」

？嫌だ？ムキになって言う、その間投詞が適切なほど冴えない青年ではなかったと思うが、長い前髪をかき分けながらラーメンをすすめる姿にサトシクンを思い出し、少しがっかりしていた俺にとって、その反応は朗報と言えなくもない。

「で、何か？」

「どうして出社しないんですか？ 出張じゃないんでしょう」

「出張ではないけど、五日間は出張扱いだからね。それに入札の結果が出たら社を辞めるつもりなんだよ」

「何故ですか？ あの数字を出したのは全部、伊都淵さんじゃないですか」

「松井君には随分、世話になった。彼が喜んでくれればそれでいいんだ。大量納入が決まった暁には、君にも何か奢るよう伝えておこう」

「そんなの要りません。伊都淵さんにだって生活がおりでしょう。今日はお一人なんですか？ ご家族は？」

日高依子は答えにくいことをズバツと訊いてくる。

「隠してもいずれ分かるから言うよ。我が家はちよいと揉めててね。妻も娘も実家に帰ってる。だから俺も家には戻ってない」

「何があつたんですか？」

これこれ、他人のプライバシーに、しつこく首を突っ込むもんじやありません。俺が答えあぐねていると彼女の弟が乗った車のクラクションが鳴った。天の助けだ、俺は黒のオデッセイを指差した。

「お待ちかねのようだよ、早く行かないと」

彼女は暫く考え込むように俺と弟の乗った車を交互に見ていた。

「あたし、一度気になり始めると、答えが分かるまで気持ち悪くて仕方がないんです。待ってて下さい。逃げちゃだめですよ」

いや、勝手に気にされても——しかも逃げるなって、俺はここでも実験動物扱い。雨もポツポツ降り出した。適当なところで日高依子の好奇心を満たして退散せねば、所夫妻がモルモットの安否にやきもきする……かも知れない。

車に駆け寄った日高依子がドア越しに何事か告げると車は発進し、彼女は再び俺の方に戻ってきた。

「いいのかい？ 帰しちゃって」

「ええ、あたしんち、ここから近いんです。それに、社用車だってあるし」

俺が乗ってきたライトバンに目線を振って言った。

「かなわないな、君には。雨が降りそうだ。カフェにでも行くかい？」

「はい」

彼女は嬉しそうに頷いた。ポケットからレイクサイドカフェのマ

ツチを取り出して見ると営業時間は二十一時までとなっている。彼女の興味を満たすためには再び嘘をつかねばならない。真っ直ぐに俺を見据えてくる日高依子の視線が俺には眩しく感じられた。

「眼鏡をかけているんだね」

「ええ、会社ではコンタクトにしています。ねえ伊都淵さん、雨ってセクシーだと思いませんか？」

「え？」

車中で、彼女はそんな台詞を口にした。

「どしゃ降りは若くて激しい情熱、しとしと降る雨は大人の色気。あたしはそんな風を感じるんです」

「へえ、面白いことを言うんだね」

「あのラーメン屋さんで会社の人と逢ったのは二人目、最初は田中さんでした」

彼女が、ずっとトップの売上げを続けていた嫌味な営業マンの名を挙げる。俺が入社の挨拶をした時、露骨に迷惑そうな顔をしてそっぽを向いた狭隘な男の顔が浮かんだ。

「田中さんったら、奥さんも子供もいるクセに、これから飲みに行かないかって、しつこく誘ってきたんです。信じられないでしょう」

「俺も、まだ妻と別れた訳じゃないよ。誰かに見られたら君が困るんじゃないのかな」

「伊都淵さんはいいんです、あたしが誘ったみたいなんですし」

勝手な理屈もあったものだ。しかし、これがモテ期というヤツなんだろうか。欲望が消え失せてから訪れたその皮肉に俺はため息が洩れた。

「いらっしや……」

大山さんの言葉が途切れる。つい先日梓と、そして今また別の女性とここを訪れた俺を目にした彼の反応としては当然だったのかも知れないが、俺は梓を妻だと紹介はしていない。そして、日高依子

も単なる同僚である。出来ればそんな言い訳をする必要のないことを願った。しかし物事は思い通りに行かないのが世の常である。ウエイトレスを制し、大山さん自身で水の入ったグラスを運んでくると、彼は隣のテーブルにどっかと腰を下ろす。

「なるほど、確かに小野木に似てるな」

「え？ どういうことでしょう」

「あいつも、若い頃はヒュー・ヘフナーばりに女性をとっかえ引っ変えていたもんだ。ここへ連れてきた女性の数は両手の指を折っても足りんよ」

やや非難めいた口調だった。客である俺が誰と付き合おうと、何人の女性を連れてこようと、売上げも上がって文句を言われる筋合いなどない——ないのだが、彼の思考にやっかみや誹謗といった負の感情はない。女癖の悪さを更生させてやろうとしての忠告か、若い女性をアラフォー男の毒牙から守ろうとしての行動なのか、何れにせよ見当違いではあるのだが、先の主張を口にする気にはなれなかった。

そして日高依子の視線にも非難が混じっている。俺は仕方なく弁明を口にした。

「今朝の女性は、医師になった同級生の奥さんで、彼女も中学校時代の同級生なんです。病院への機器の納入で世話になるので、買物の荷物持ちを買って出たという訳です。その途中にこちらの寄らせてもらいました、。そしてこちらの女性は会社の同僚です。俺がそんなにモテるはずないじゃないですか」

すかさず二人の顔に安堵の色が広がった。勝手に誤解して非難を向けられた俺にはとんだ災難だったのだが、とにかく誤解は解けたようだ。大山さんは満足気にうんうんと頷いて厨房に戻って行った。

Unchained Melody

「そんなことまでさせられるんですか？」

今しがた浮かべたばかりの安堵の色を消して日高頼子が言った。忙しい娘だ。

「そんなって？」

「買い物のお供ですよ、今、そう言ったじゃないですか」

まるっきりの嘘ではなかったが、真実でもなかったため？そんなこと？ に気づくのに少し時間を要した。

「ああ、それか。所んち：あ、例の病院の准教だよ。何もせずに彼んちに居ても退屈だったし、奥さんが買い物に行くって言うから、この機会に恩を売っておこうと思ったんだ。させられたんではなく、させていたんだ」

「大変ですね、営業の人って」

そこで同情されても困る。彼女みたいな善良な人間に、底の浅い嘘をつくのは心苦しかった。

上手い嘘というものは真贋のブレンドが絶妙なものをいう。その場しのぎのデマカセに、その配分を検討する余地などない。捏造に關して、オイラーズは極めて非協力的だったからだ。

「食うためだよ。それで、君の質問は？ 明日は例の入札の発表もある。君の好奇心を満たして早く帰ろう」

日高依子はようやく本来の目的を思い出したような顔になって話し始めた。

「さっきの続きです。どうして出張扱いになってるんですか？」

「所が、課長に直談判して俺を借り出したらしい。有閑マダムのお相手が元同級生で出入り業者なら安心だろう？ そんな迷惑じゃなかったのかな」

「では、伊都淵さんのその変化は何故なんですか？ 松井さんも普段の伊都淵さんじゃないみたいだって言っていました」

いやはや、この娘はなかなか鋭い。頼みの教養担当オイラーズは休暇中で、閃きも妙案も舞い降りてはこない。俺は苦し紛れにこんな言い訳をした。

「人は、何かのきっかけで生まれ変わっちゃったりするもんなんだ。俺の場合は所との再会かな。同級生があんなに偉くなってる、真面目に営業マンをやってもコネや伝手のある連中にはかなわない。それが嫌になったんだ。開き直りだよ」

「本当にそれだけですか？」

適当な作り話では引き下がってくれそうもない。どうにか俺から興味を逸らす方法はないものか。不本意ではあったが、彼女の隣に席を移し、こんな作戦に出た。

「固い話はここまで。飲みに行かないか？ いい店を知っているんだ」

「誤魔化さないでください。あたしが田中さんの話をしたから、そう言えば追求を逃れられると思ったんでしょ」

俺はほとほと困った。脳波をいじくれば済む話だが、いい人間である彼女にそれはしたくない。日高依子の肩に回そうとした手は宙ぶらりんのまま、虚空を抱く。

仕方ない、例え気味悪がられても入札が済めば辞める予定の会社だ。もしかしたら頭が変になったとでも思ってくれるかも知れない。俺は再び、彼女の正面に座り直した。

「一つ、俺から質問してもいいかな？ それに答えてくれたら君に本当のことを打ち明けよう」

「いいですよ、何ですか？」

「課長のセクハラだよ、君は肩を揉まれたり、必要以上に顔を近づけて話したりされているように思う。でも、君はそんな課長を嫌悪していない。それは何故なんだい？」

「何故、あたしが課長を嫌っていないと思うんですか？」

俺への答えが先だよ」

暫く考えたような顔をした彼女だったが、静かにこう言った。

「可哀想な人だと思うからです。きっと家庭でも奥さんやお子さんに構ってもらえない反動で、ああなっちゃうんじゃないかと。スキンシップに餓えてるんですね、きっと」

やはりこの娘はいい人間だ。ひよつとしたら真実を話しても気味悪がられることなく受け入れてもらえるのかも知れない。どっちにせよ俺に失うものがある訳ではなかった。

「伊都淵さん」

口を開きかけた俺より先に、彼女の声が発せられる。

「何だい？」

「人の考えが分かっちゃもうんですね」

俺は口に運ぼうとしたコーヒークップを危うく取り落とすところだった。

「驚かせたらごめんなさい。実はあたしもそうなんです。全ての人の全ての考えが見える訳じゃなくて、ほんのたまに分かってしまうんです。今は、あたしを怖がらせないようにとの配慮が伊都淵さんから伝わってきました」

驚いた。人工の似非超能力者ではなく、本物が目の前に居ただ。俺は慌てて教養担当のオイラーズを叩き起こした。幸い大山さんはウエイトレスとの会話に夢中になっていて、俺達の話が耳に届いた様子はない。

「その話は、ここじゃあマズい。出よう」

そば降る雨の中、社の看板が入った車で夜の街を流す。助手席側のワイパーゴムが硬化していて視界は良好とは言えなかったが、知覚の研ぎ澄まされた俺に運転の不安はない。

「全てじゃないと言ったね。君が分かるのはどんな感情なのかな？」

「尖った感情とでも言えいいのか……嫌悪や悪意、それとさつきみたいに優しい感情も分かる時があります」

彼女の瞳が眼鏡の奥で輝いた。確かに好意は向けたが、それは鍛冶さんや松井君に向けたものと同じ類で、家庭も中途半端なまま梓

のダッチワイフに成り下がっていたこの俺が、この娘にあらぬ期待は抱かせる訳には行かない。

「俺の感情は君を好きだって言ってたかい？」

「そこまで正確には分からないんです。ただ漠然とした好意とか嫌悪感が伝わるだけで。心地よい波動は好意、悪意には刺すような痛みを感じることもあります」

「このことは誰にも言わない方がいいよ。変人扱いされるだけだ」

ナチュラルに能力を得た彼女の存在が、ひょんなことで所の目にとまるかも知れない。P300Aの犠牲者は俺一人で充分だ。中途半端な俺の能力で日高頼子を守りきれるかどうかが自信がなかった。「亡くなった母も同じ力があつたみたいなんです。物心ついた頃のあたしが母にそう話した時、誰にも言っではいけないと言われました。弟にはないみたいです。だから誰にも話してません。伊都淵さんが初めてです」

俺は日高依子こそが人類の進化の形なのかも知れないと思った。悪意を感じることが出来れば争いや危険は遠ざけられる。他人を憎むことが醜い感情だと気づけば、そうしなくなるかも知れない。好意を感じることが出来るなら誤解は減り、面倒な駆け引きも必要なくなる。少なくとも、現代のように虚偽にまみれた社会ではなくなるように思えた。

ただ、それでも懸念は残る。未成熟極まりない人類が、果たして嘘のない世界で生きられるのだろうか、と。

「そのほうがいいだろうね。人は理解の及ばないものに恐れを抱くものだから。俺が本当のことを言えなかった理由もそこにあるんだ」

「あたしは伊都淵さんを怖いだなんて思いません」

「ありがとう、でも君のその判断が正しいかどうか、俺には分からないんだよ」

ふと、彼女のジーンズに泥が付いているのを見つけて手で払ってやった。しかし、そこが太腿だったことに気づいて困惑する。性欲がなくなった俺の問題はこんなところにも露見してしまう。10番

手以上のタテ糸を藍色に染色し、ヨコ糸を未晒し糸で綾織りにした
コットン百パーセントの生地についた粘土質の汚れとしか認識しな
いのである。

「あ、ごめん。つい……泥が付いてたんだ——え？ 粘土質？」

「趣味で、陶芸をやっているんです。ラーメン屋さんに行くぎりぎ
りまでロクロを回してたから、きっとその時についたんだわ。あり
がとうございます」

なんと、礼を言われてしまった。悪意がなかったことは理解して
くれたようだ。陶芸か、若い女性にしては珍しい趣味だなと思った。
反射的に頭の中に音楽が流れ出す。昼間はプリティウーマンだった
が、今回は *Unchained Melody* だった。

Oh my love——

映画ゴーストのために書き下ろされたように思えるこの曲だが、
実は妻子の居る囚人が開放 (*Unchained*) を夢見たB級映
画の挿入歌だったらしい。

Brothers (同胞)

「俺の番だな。正直、君や松井君には話したくなかったんだが約束だ。君の言った通りだよ、」

オイラーズを目覚めさせた俺には運転しながらでも、会話への集中が途切れることはない。だが、日高依子が落ち着いて聞きたいからと、どこかに車を停めるよう注文してきた。俺は快諾して、軽自動車検査協会と書かれた建物の裏手に車を乗り入れる。近くの産業団地の駐車場らしいそこには街路灯もなく真っ暗だった。俺の視力なら月灯り程度でも集光させて昼間並みの明るを感じる事ができる。電磁波を組み合わせて緑にならないノクトビジョン映像を映し出すことも可能だった。だが日高頼子はそうは行かない。会社で顔を合わすことはあっても業務に関係した話しかしたことの無い俺達だった。こちらにそんなつもりはなくても彼女が覚えるのではないだろうか。俺の提案はそれを慮ってのことだった。

「ちょっと物騒かな？ 場所を変えよう」

「いいえ、ここで構いません」

そう言っただけで彼女は、シートベルトを外した。

俺は所によって造られた頭脳であることを告白した。彼等の意図しなかった変化が俺に訪れたこと、出張に出たはずの俺がウロウロしている理由、サル波の新大脳皮質サイズしかなかったことも包み隠さず彼女に伝えた。全てを知った日高依子が俺を恐れ、距離を置いてくれることを願っていた。

「ひどい……同級生なんでしょう」

「何十年も逢っていないければ他人と変わらないさ。最初は憤りも感じたけど、よくよく考えてみれば俺も彼を入札に利用しようとしたんだ。その彼が俺を研究材料としようとしたことと大した変わりはない。とにかく、俺の変化は彼等の想像の範疇を越え、手にしてはならない能力まで手にしてしまった。個体が変わった場合の変化まで

は分からない。人類に次なる進化が期待出来るなら、それは君のようであることを祈る。どんな付加物が生まれるはわからないような研究は止めさせなきゃならない。そしてそれが終わればこの力は不要になる」

「でも、その人達の期待した結果とは違ったのなら、それは伊都淵さんの潜在能力が開花したんだとは思えませんか？」

かつてオイラーズもそんなことを言ったものだった。しかし、それをスナリ受け入れることの出来ない俺であった。

「こう考えてみるよ。何でもいい、俺が君の意思に反したことをさせようとする。他人の自由意思を奪う好意が許されると思うかい？」
「例えば、こんなのですか？」

言うが速いが日高依子が俺に唇を重ねてきた。こんな意識操作はするべきではない。俺はオイラーズを責めたが、彼等はふるふると首を振るばかりだった。

「なっ、何を……」

「うふっ、赤くなっちゃって可愛い」

その言葉とは裏腹に彼女の胸の鼓動は早まり困惑の脳波が示されていた。梓にはレイプされ、小娘には簡単に唇を奪われる。「こんなつもりじゃなかったのに」そう言って涙ぐんでやろうかと思ったが、この暗闇では、彼女が小芝居を評価してくれるとも思えなかった。なので、シリアス路線を貫いた。どうしても俺との距離を縮めさす訳には行かなかったのだ。

「ふざけてる場合じゃないんだ。君は事の重大さを分かっている」
「伊都淵さんがそうになったきっかけが何だろうと、あたしが今まで生きてきて初めて巡り合えた同胞なんです。だから、他人だなんて言わないでください」

真顔に戻った彼女が、眼鏡の奥から大きな瞳でじっと俺を見つめてくる。先ほどのキスで、俺の歯が当たり切った唇からは血が滲んでいた。

「触れるよ」

コクリと頷きつつも胸にでも触れられると思ったのか、日高頼子は体を硬くした。俺が触れたのは彼女の脳波。血液凝固因子の割合を増やして止血し、唇にかざした指で静電気を操って傷を塞ぐ。所邸での蔵書読破が、こんなところで役に立つ。

「え……」

彼女は自分の唇を指で触れた。

「すごい……こんなことも出来るんですか」

「ああ、なんかETみたいだろう。俺は化物になったのかも知れないんだ」

「いいえ、なんだか唇がぼうっと温かく感じられました。やっぱり、伊都渕さんの力は備わるべくして備わったんでよ。でも、ETって何ですか？」

彼女が恐れてくれることを願って話した真実も行いも逆効果だったようだ。ついでにジェネレーションギャップも感じる。ETを知らないのか……と。

「百歩譲って、これが俺に元々あった力だしよう。だが何のために？ 断食も悪魔の誘惑もないままに欲望を失った俺は世界の国々とその栄華も欲しいとは思わない。金や権力には何の魅力も感じられなくなっているんだ。だったら、こんな力は無用の長物でしかないじゃないか」

「マタイ伝ですか、でも、あたしにしたような事は？」

「ん？」

「あれが出来るなら病気や怪我に苦しむ多くの人を救えるじゃないですか」

所や梓と同じことを言う。だがこの時、俺の頭に浮かんだのは別の思惑だった。車のデジタル時計は二十二時を回っていた。

「遅くなった。この話はまた今度にしよう。送るよ、よく考えてみてくれ。俺がこの社会で許される存在なのかどうかを。俺ももう一度考えてみる」

「はい、明日は出社されますよね？」

「うん、松井君が入札の結果を持って帰る午後には顔を出そうと思っている。そう言えば勝手に社用車を持ち出した俺を課長は怒っていないかったかい？」

「それが、気味が悪いくらい何も——松井さんが、伊都渕さんが出張に乗って行ったじゃないですかと言ったら、ああそうだったなんて言っただけで」

それだけの情報ではやはり課長の関与の度合《い》は分からない。直接逢って、脳波を探るしかないな。実験の詳細を知っている人間がどれだけ居るのか、それを掌握しておかねばならないとオイラーズに伝えられていた。

Wood or Forest

「ただいまー」

「どこへ行ってたんだ、こんな遅くまで」

玄関ホールで俺を待っていたのは、所の叱責だった。

「君がちゃんと管理してないから、こいつがフラフラ出歩くんだぞ」彼の怒りは梓へと飛び火した。彼女は俺をちらと見てから目を伏せる。俺が戻るまでもにも散々、このことで所に責めたてられたのだろう。

「ラーメン屋へ行ってて、偶然会社の同僚と逢ったもんだからカフェに行って、少し話し込んだ」

「行動の詳細を聞いているんじゃないっ！ 連絡ぐらい入れろと言っているんだ」

おいおい、俺は思春期の女子高生かよ——帰りの遅い娘を心配した所が玄関先で仁王立ちになっている姿を想像した。娘役はこの俺。自分の姿をおさげ髪に置き換えてみたらこれがまた気持ち悪い。

「次はそうする。なあ所、時間はあるか？ 少し話をしたいんだ」聞こうじゃないか、と彼が顎でリビングを指し示した。

「何だ、改まって」

何から話そうかとオイラーズにスピーチ原稿の作成を任せていた俺を所が促す。

《これで》と、教養担当の一人が手渡した原稿を脳裏に広げる。

「P300Aだけだな、あれの本来の効果は他人の感情に敏感になれることなんじゃないか？ それなら正常進化だと思える。尤も、俺のこれは行き過ぎの失敗作なのだろうがな」

「何がいいたい？」

「俺ですら、この国が進んでいる方向が正しいとは思えない。いや、視野を世界規模に広げて見ても人類は間違っているのかも知れない。」

お前の言う通り、科学や技術の進歩に先が見えないなら人が変わるしかないのだろう。ただ、単に頭のいい人間が増えたところで、劇的な変化を見込めるとは思えない。間違いが助長されるだけになるかも知れないだろう？ スパコンを例にとろう。秒間八千兆回を超える演算が出来ても完璧な地震予測など出来やしないよな？ 統計や確率といった数字の横暴に根拠を求めているうちは、人類の進化はデッドエンドだ。だが、他人の感情に敏感になれば争いは間違はなく減る。誤解なき意思疎通が平和な世界を築く礎となるはずなんだ。コミュニケーション能力に問題があって正確に病状を言い表せない人々にも正しい治療を受けさせてあげられる。善意がどれほど素晴らしいものかを人々が気づけば世界は必ず正しい方向に向かうと思うんだ」

「一理あるな。それで？」

「研究の方向性を見直してみたらどうだ？ もっと人道的で多くの賛同を得られるような方法があるはずだ。そうなれば国家レベルの協力が得られるかも知れないじゃないか」

「お前の言うとおりかも知れんな」

俺は目を輝かせた。

「分かってくれたのか」

しかし、その期待はいとも簡単に打ち碎かれる

「そっちではない、やはりお前は失敗作だ。人道的？ そんなものにこだわっているのは動物実験すらままならないのが今の世の中だ。お前が『我こそは被験者でござい』と名乗り出た瞬間に俺は学会から抹殺される。大衆は産みの苦しみの共有は拒否するくせに成果だけは無報酬で手にしようとするものだ。知性を追求するとなれば、そんな蠢動など黙殺してしまう冷酷さも必要なんだ。人類の進化がデッドエンドなら、先に待つのは滅亡のみ。既にその兆候は見えていて悠長なことをやっている暇などないんだ。石頭揃いの学会を動かすだけでも不可能に思えるのに国家レベルでの研究だと？ 十年議論を続けて何一つ、まともなものを生み出すことの出来ない連

中に何が期待出来るものか。あの大地震を例に挙げよう。ただただ、金を注ぎ込むだけだった政府の施策は、癌患者にモルヒネを投与し続けるようなものだ。義援金の重複請求をするようなモンスター被災者も出ていると聞く。切り捨てるべきは切り捨てないと、転移は広がる。国家が潰れてまで一地方の救済に力を尽くせというのか」

「癌はひどい」

「違うと言うのか？ 幾ら金を注ぎ込み建物や設備が元通りになっても発注が元には戻らん以上、産業のレベルが被災前に戻ることはない。そんなことは阪神淡路大震災で立証済みじゃないか。中小企業の債権買い取りファンドの設立や住宅ローンの据え置きも間違っている。サブプライムローンの破綻を見てきた連中のやることとは到底思えない。アメリカの二の舞になるだけだ。そんな簡単なことのわからない政府が俺は理解できない」

被災地を癌に例えた所の言い分には受け入れ難いものがあつたが、彼の説が全て間違っているとも言い難い。サプライチェーンを免疫系の伝達に例えるなら、それを寸断されたことで起きた関連倒産や直接被災していない人々の失職などはいい例だろう、俺もその犠牲者の一人だったのだから――所は続ける。

「お前は誤解している。俺だって被災者には同情している。確かに俺は現地には行ってない。ああいった場合、俺のような医者や内科外科ほど重宝はされないんだ。代わりに梓に支援物資を持って二週間の医療ボランティアに行ってもらった。彼女は優秀な看護師だったからな。しかし国の施策を見てみる。復興構想会議は被災地から五百キロも離れた霞ヶ関に老人ばかり集めて気の長い議論を繰り返すのみ。復興庁に至っては未だ関係各省庁の反対で設立の見込みすら立っていない。そんな政府に何が期待出来るんだ？ 危機感を身に染みて感じているのは弱者だけ。経済の舵取り役たる国会議員の報酬は二千万円以上。さらには席を置く企業からの収入もある。そんな連中に人々の痛みなど伝わるはずはない。だからこそ俺は個々の能力の底上げを図りたい。国家になど頼らずとも自立出来る国民

を作りたいんだ」

所の脳波に虚偽はない。尊大ではあるが、最終目標として掲げた理想は素晴らしいものであると思えた。

「失敗学というものがある」

所の口調が変わった。

「尼崎の脱線事故や六本木ヒルズの事故に学ぶというあれか？」

「そうだ、あんなものは人の揚げ足取りに過ぎん。名のある学者が実験と検証を積み重ねるからこそ学問として認知されるのだが、リスクマネジメントには通用せんよ。それでも大学は金を出す。すなわち税金が注ぎ込まれている訳だ。自然災害も人災も人智を越えて発生するものだ。起こってしまった事象に後付けで原因究明なすることなどは無意味で、あまりにも非生産的だ。あんな事故で人が大勢死ぬのも、残された人々が苦しむ姿も俺は見たくない。それを変えられるのは、この研究でありお前という成果なんだ」

世の中は白と黒だけじゃない。多くを占めるのはきつとグレーで、その濃度が状況によって濃い側に振れたり薄い側に偏ったりするのが人間なのだろう。待とう、所が善に振れる時を。俺はそう思った。「忘れるな、お前がこうして俺と議論が出来るのはP300Aのお陰なんだ。あれなくして今のお前はない。喋り過ぎたようだ、俺はラボに行く」

そう言って所は席を立った。

「創太郎の言ったことは本当よ」

取り残された俺に梓がポツリと呟く。

「ああ、分かってる」

俺の視線はテーブル上に固定されたまま、オイラーズと議論を交わしながらコップに注がれたビールの泡を、静電気で弄んでいた。

「私が研究の成果や名声だけにこだわる創太郎を愛せるとでも思った？ あの人だって、大震災の被害者に涙し人類の将来を憂いたのよ。そしてこの研究を始めた。鬼にならなければ出来ないことだっ

てあるわ」

「何度も言うが、問題は方法論だ」

「彼は阪神淡路大震災で、実家に行ってらしたお母様を亡くしているの」

俺は驚いて梓を見る。彼女の瞳は涙で潤んでいた。中学生だった所の家に届けものをする毎、駄菓子や果物を持たせてくれた優しいがな所の母親の顔が思い出された。

「あなた達の話聞いていて確信が持てたわ。女の私だからこそわかることもあるの、伊都淵君、あなたと創太郎のしているものは同じ。彼はあなたを木を見て森をみない人間だと言った。あなたは、その木、一本一本が集まってはじめて森となることを知っている。あなた達はコインの裏表なのよ」

「だったら、尚更……俺の話聞いていただろう？ スパコンでも無理なものを、計算だけが早くなった人類がどうやって……」

「彼は彼の出来る範囲で模索を続けている。そして妻である私はそれに従うだけよ」

梓の瞳には俺の反論を受け入れようとしなない強固な意思があった。「これ」

彼女が昨日行ったデパートの包みを俺に差し出してきた。

「俺に？」

「ええ、創太郎の好きなブランドよ。あなたにもきつと似合うと思うわ」

梓が去ったりビングで包装を開けるとD&Gのロゴが左胸に刺繍されたポロシャツとハーフパンツが入っていた。

Disclosure (露見)

「只今、戻りました。あれ、課長は？」

「松井さんの付き添いで入札の結果を聞きに行きました。でも、もう帰って来ていい頃なんです——あ、手間取っているふりしてパチンコとかに行っちゃってるのかも」

出張からの帰社でないことを知っている日高依子は、そう言っ意味ありげに笑った。秘密の共有は見知らぬ男女の仲を急接近させるものだ。キスまでしておいて見知らぬはないか——

午前十一時の発表のはずだ。そのまま納入の打ち合わせに入っとしても、既に十五時になっている。日高依子の言う通り、戻っなければいけない時間だ。何かあったのだろうか。

大した売上げもないのに医者の特持ちで五日間休んだことになっている俺に対する社内の視線は冷ややかだ。「俺も九州出張とか行きてえよな」聞えよがしに嫌味を口にしていたのはトップセールスの田中だった。

生活の糧を運ぶ先は不確かでも、それを別に求めることの出来る今の俺にとってこの会社には何の未練もない。松井君や日高依子に逢えなくなる寂しさはあるが、一見親密そうに話している営業マン達の腹の探り合いや、隙あらば得意先を奪い取ってやろうと、鵜の目鷹の目になっている連中の思考は醜く、著しく気分を損なう。日高依子の感覚を持つ人類に、この世界を禅譲する日はいつ訪れるのだろうか。所の嘆きが想起された。

「戻りましたー」

松井君の元気な声がオフィスに響いた。後に続く課長と目が合ったので、戻りましたと口だけ動かして頭を下げる。彼も目だけで頷くが、その仕草には落ち着きがない。

「あっ！ 伊都淵さん、戻ってたんですか。やりましたよ、全部じゃないけど十一点、うちの納入になったんです」

松井君が俺を目に留め、高らかな声で入札結果を知らせてくれる。全部ではない？ 数字に間違いはないはずだった。腑に落ちないものを感じて松井君に小声で訊ねる。

「その三点はMSSの数字が低かったのかい？」

「それがよく分からないんですよ、各社一人が事務長室に入っての発表でしたからね。他の業者はすぐに部屋を出てきたのに、課長とMSSだけ残って事務長さんと三人で長いこと話し込んでいたみたいなんす。出てきた時にはMSSの営業と肩でも組みそうなほど親密な様子で……」

やりやがったな——俺はすぐに課長の挙動不審の原因に思い当った。帰社報告を兼ねて課長のデスクに歩み寄る。

本日、戻りました。所先生が課長に宜しくと。入札の件、おめでとうございます」

「あ……ああ、松井が頑張ってくれたお陰だ」

「十一点納入なんですよね？ もっと喜ばれたらどうです。お加減でも優れないんですか？」

「君には関係ないだろう」

痛い腹を探ろうとする人間の指摘には誰もが不機嫌になるものだ。

「少し、お話があるのですが」

「何だね？」

「今月をもちまして、こちらを退職させていただきたいのです。課長が不審げに眉根を寄せる。

「この入札の結果は、君の力によるところも多いと松井が言っていた。成績なら気にすることはないぞ」

「いえ、もう決めたことなんです。課長も一緒にいかがですか？」

「一緒に？ 何をだね」

俺の提案の意味が分からず、課長は怪訝そうな顔になる。

「退社ですよ。餓首される前に」

「なっ、何を言い出すんだ、この入札で支店売上げも一気に全体の上位に顔を出せるんだ。その責任者たる私が、何故——」

「責任者たる勤めをきちんと果たしてらっしゃれば、上位どころかトップに躍り出たのではありませんか？」

言葉尻を捉えて言い返す。スタッフの視線を感じて、敢えて婉曲な表現を選んだ。

「何が言いたいのだね？」

ここで、お話を続けていいのですか？」

俺は思い切り含みをもたせた顔で課長の動揺を煽った。遅ればせながら周囲の注目に気づいた課長は俺を会議室へと誘い、追求は河岸を変えて続けられる。

「価格上位の三機種がMSSに行ったはどういう訳なんでしょう？」

「うちの数字がこちらより高かった、それだけだよ」

課長はそう嘯くが、動揺も狼狽も隠しきれていない。根っからの悪人ではないのだろう、出来心を起こしたものの、その発覚に覚えきっている様子が窺える。勿論、脳波を読む必要などなかった。

「では、はっきり申し上げましょう。あの数字は全て私が書き込みました。所から数字を聞かされていた私が、MSSより高い数字を入れるはずがないんです。だとすれば可能性は二つ、事前に情報を漏らされたMSSが数字を書き換えた。しかし、この線は頷けない。いくらメーカー系と言えど、あれ以下の数字で三点納入では採算が合うはずはないからです。そうすると残る可能性は一つ。あなたが上位三点の落札権を何かと引き換えにMSSに譲ったのです。勿論、先に述べたことに關しても私益は絡んでおりませんが不正には違いありません。私はその責任を取って辞めるのです。ですから、ご一緒はどうですかとお尋ねした次第です」

課長の顔が蒼白になった。

「失敬な、何の証拠があつて私が不正をしたなどと言うのだね」

土俵際で踏ん張って言葉を返すが、既に死に体であることは明白だった。「言うのだね」の「ね」が完全に裏返っている。

「その動揺ですよ、落ち着きのなさもです。何なら所に確かめてもいい。悪銭身に付かずです。まだ報酬を受け取っておられないのな

ら、今一度、先方に逢ってお断りになって下さい。若輩の私が言うのも烏滸がましいのですが、後悔というものは一生、自分について回ります。第三者からの非難のように逃避は出来ません。寝ても覚めても罪の意識に苛まれるのです。そんな苦しみを背負う前に、止めておきましょうよ」

上手く真実を隠したまま俺は追及を終えた。ブラフの才能も備わったようだ。ガツクリと視線を落とす課長の脳波から百万円の札束が飛び去って行く。

「私を告発するつもりかね？」

この時点で、ようやく所への関与を探る。いくばくかの謝礼で俺の鞆持ち出張を了承したらしいが、詳細は知らされておらず、俺の歸社も当たり前と捉えていたようだ。そっちの賄賂には目をつむっておいてやろう。

「そのつもりなら、スタッフの面前でやりますよ。考え直して下さい。私の言いたいことはそれだけです」

課長の前に辞表を滑らすように差し出し俺は会議室を後にした。顔を上げ何事か言おうとした課長の声は閉ざされたドアにかき消された。

Evolution (進化)

「いやあ、驚いちゃったなあ。あの後事務長から電話で、集計にミスがあつて全てうちの納入になりましたって連絡があつたんす」

「そうか、よかったじゃないか。これで以前の借りは返せたかな？」

おっとこの五千円も忘れないうちに返しておこう

俺はポケットに突っ込んだくしゃくしゃの五千円札を差し出す。

「今更、あんな小さなこと言わないでくださいよ。俺の来月の給料がどれだけになるか分かります？ 去年の年収の半分を超えちゃうすよ」

松井君は紙幣を財布に仕舞いながら興奮冷めやらぬ口調で続ける。だったら、それも返さなくていいって言えばよ。そうは思ったが、金銭の貸借にキツチリとした性格なのだろう。それはそれで結構なことだった。

「松井さんったら鼻高々ね。課長にその話を聞かされた時に膝ががくがく震えていたのを、あたしは知ってるんですよ」

日高依子の混ぜ返しに、松井君は渋い顔になった。

「言うなよ、それは。でも本当に辞めちゃうんすか？ 惜しいなあ、営業マンとしての才能を開花させたばかりじゃないっすか。伊都淵さんが帰っちゃってからの出来事なんすけど、田中さん、絶対に落とせるもんかってみんなと賭けをしてみたいなんすよ。あ、入札のことですけどね。それで課長の発表を聞いた途端、具合悪くなっちゃったみたいで、そそくさと帰っちゃったんです。賭けの負け分は十万円を超えるって柳田さんが言ってたけど、払えるのかな？」

柳田か——ベテラン営業マンだったが売上げはいつもノルマ付近を行ったり来たりの白髪頭の男を思い浮かべた。彼は俺に賭けてくれていたのか。あまり話すことのない男であった。彼の思惑が田中への反発なのか、俺達への好意だったのかは、今となって知る術もなく興味もない。

「落札イコール営業マンの才能ではないと思うよ。俺には松井君のような堪え性もなければ、人に負けたくないといった競争心も欠落しているように思える。だからこそ退社を決めたんだ。今回の功労者は松井君と日高さんだよ」

俺達の打ち上げは、入札書類を作成した日と同じイタリアンレストランの隅でテーブルを囲むというささやかなものだった。

「あたしは何もしてません」

「君が居て、俺と松井君は快適に仕事が出来た。間違いなく君のお陰だよ」

そう言うと、日高依子は頬を赤くして俯く。

「そして松井君が居なければ、入札まで俺が会社に居られたかどうかも分からない。感謝しているよ」

「止めて下さいよ、水臭い。それに俺が融通した売上げなんか、ほんの十数万、今回のとは桁が違い過ぎます」

「善意ってのは金額の多寡じゃないと思わないか？俺は今回の件でやっと君に借りを返せた気がする。今まで本当にありがとう」

深く頭を下げる俺に、松井君は恐縮し過ぎてしどろもどろになる。「や、止めてくださいってば。俺なんか本当に……入札だって、せいぜい二〜三点落とせれば関ヶ原だと思っていたぐらいなんすよ」

笑っては悪いと思ったのか、日高依子が白い歯を覗かせかけた口に手を当てて言った。

「松井さん、それも言うなら関の山っていうんです」

文学的素養には欠けていても、彼のような気のいい青年は今や稀有な存在となっている。店内を見回すとこんな思考が錯綜していた。

（かったりいなあ、明日も仕事かよ）

（デートに来て行く服がないわ）

（ライブのチケットが取れない、彼女、怒るかなあ）

不謹慎なものでは、こんなのもあった。

《ローンの返済期日が迫ってるな。ここにもデカい地震が起きれば

いいのに。そうなればどさくさで払わなくて済むかも知れない。もしかすると義援金で賄えるかも知れない」

《俺の目の前を横切るんじゃないやねえよ、ばばあ。ぶっ殺すぞ》

俺は目眩がしそうになった。所の言葉が蘇る。

「絶滅のメカニズムを知っているか？ 厄災は一度に人類全部に襲いかかる必要などない。生態系や食物連鎖の一部が欠落すればそれで十分なんだ。生命はそれにも適応しようともがき、一旦は収束したかのように見える。しかし、必ず適応疲労というものがやってくる。生命というものが産まれた時から死に向かっているように、種も同様なんだ。地球のどこかで誰かの意識が決定的に歪めば、それはあつという間に伝播する。先人が営々と積み重ねてきた文化を破壊するのは、誰であろうその子孫たる我々なんだよ。このままではいかんだ。盲信無為に生きるぐらいなら信念に沿って死ぬ方がいい。俺はこの研究に命を賭けている」

震災の記憶を未だに保持している人々は店内に皆無だった。奢り高ぶった人類の恣意的な振る舞いが所の杞憂を現実にしそうに感じられた。。

「……ねえ、あれ。どうしたんすか？」

思考の全てを店内の散策と回想に回していたため、松井君の言葉を聞き逃したようだ。

「ごめん、ちょっと考え事をしてた。何だっけ？」

「いや、大したことじゃないんすけど、伊都淵さんはこれからどうするのかって」

そりゃあ、所んちに居座って説得を続けて、出来れば彼等との関係も改善されて終わることが出来れば一番なのだが、そう都合良くは行かないだろう。それに所の持論に大きく心を動かされていた俺は説得の良否すら怪しくなりかけていた。俺は迷っていた。そんなことを松井君達に伝える訳にも行かず適当な嘘を探していると、斜め向かいに座っていた日高依子が口を開く。

「分かります。あたし達は、どうするべきなんでしょう」

「え？」

俺と松井君の声が重なる。

「あ、ごめんなさい。……あたし、伊都淵さんに開発されちゃったのかも知れません」

おいおい、その言い方は誤解を生むってば。案の定、松井君の脳波に 《この二人、デキてる？》 が浮かぶ。

「言葉足らずでしたね。でも、一人で悩まないでください。あたしなんかでも何かのお役に立てるかも知れません。一緒に考えて行きましょう」

どうやら、日高依子は俺の考えが正確に理解出来るようになったようだ。そして松井君の脳波にはクエスチョンマークが矢継ぎ早に浮かんでは回答を見いだせずに行き場を失っている。

ここではまずい。俺の思念に日高依子が小さく頷く。

「あつ、あたし何かいいましたっけ？ お腹いっぱいになって、うとうとしてみたい。寝言聞かれちゃったかも、恥ずかしい」

「何だ、寝言だったのかよ、急に変なこと言い出すから、びっくりしちゃったじゃないか。ねえ、伊都淵さん」

「そうだね、そろそろお開きにしよう。明日からプー太郎の俺と違って、君らは週末までみっちり働かなきゃいけないんだし」

善良この上ない松井君は、こんな小芝居でも信じてくれたようだ。もしかすると、そのフリだったのかも知れないが。

Emotion (依子の想い)

「あたしが伊都淵さんを送ります」

「大丈夫かい？ さっきみたいに居眠りをして事故でも起こさないでくれよな」

「あれで目が冴えました。任せといてください」

社用車を返却した俺の移動手段は情けないことに徒歩のみとなっている。彼女に言っておきたいこともあったので敢えて遠慮もせず、俺は黒いワゴンRの助手席ドアを開いた。

「さっきはごめんなさい。伊都淵さんの考えが鮮明に伝わってきて、つい嬉しくなっちゃったんです」

「聞かれたのが松井君だから良かったものの、注意は必要だね」

「気をつけます。松井さんにも試してみたんですけど、全然ダメ。

あの人ったら、残ったピザのひと切れに手を伸ばしていいかどうかで頭の中が一杯で……多分、伊都淵さんの思念っていうんですか？

それが人一倍強いから伝わってきたんでしょうね。どうでしょう、これから二人で説得にあたりませんか？ その所さんご夫婦を」

とんでもないことを言い出す娘だ。

「何を言い出すんだ、そんなのダメに決まっているじゃないか」

「何故なんですか？」

「同級生の俺をこんな目に合わす連中なんだぞ、ナチュラルに能力を授かった君のことを知れば、どうにかして実験対象にしようとするに決まってる。君をそんな危険な目に合わす訳には行かない」

「でも『所が百パーセント間違っているとも思えない』あなただつてそう考えていたじゃないですか。その人達がそんなことをします？」

とうとう？あなた？ になっちゃったか——まあ呼び方など何でも構わないが、この無茶なリクエストにだけは応じられない。

「彼等には俺に分別を与えてくれようとしたという認識もある。で

も、その結果は彼等の予想を遙かに超えて、こんな化物を生み出してしまったんだ。生まれながらに力の備わった君をどう扱うかなんてことは俺にもわからないが？君子危うきに近寄らず？　だ。脳波を操ることが出来るといっても一度に複数を相手にしたことはない。個体差があつて、どれが何の働きをしているかを確かめないといけないんだ。つまり万が一の時、君を守ってあげられるかどうかさえわからないんだよ」

俺の説明には嘘があつた。目に映る全ての脳波をブルドーザーで整地するかの如く均してしまえば大抵の決着はつく。ただ、その決着の正体を語る気にはなれなかつた。

「……嬉しい」

はあ？　俺の尻が車のシートからずり落ちる。

《あなたは、あたしを守ってあげたいって思ってくれた。それが嬉しかったんです》

彼女の顔は車の進行方向を向いて口は閉じられたままだった。

何かの才能が開花する場面に出食わす機会など、そうそうあることではない。しかし、それを喜んでいられる場合ではなかつた。自転車に乗れるようになって目茶苦茶ペダルを漕ぐ娘を見守る父親の気持ちに分かつた。ちなみにうちの娘達は上の奈緒子がようやく三輪車に乗り始めたばかりである。

「無闇に力を行使しないほうがいい」

《大丈夫です、あなたの前でしかやりませんから。それにあたし達、親子ほどは歳も離れてませんよ》

前を向いたままの彼女だったが、口元を綻ばせていた。俺は考えにしたくなかつた言葉を思い浮かべて日高依子に送り付けた。

《だったら、言おう。俺は君に好意を持っている。だが、まだ妻との決着はついてない。勿論、所の件に関してもだ。全ての問題が片付いたら、俺はこの街を離れるつもりだ。傍に居て君を守ってあげることが出来ない。だからこそ、俺とは無関係でいて欲しい》

《知ってます。小野木さんって方の遺志を継がれるつもりなんです

よね。素晴らしいと思います》

《それが分かって何故……いいかい？ 君のその力が人に知れたら、追いかけてくるのは所だけではなくなるだろう。家族と一緒に居られなくなる――》

俺がそれを伝え終わる前に、日高頼子の思考が束になって頭の中に流れ込んできた。

《やっと、あなたを見つけたんです。見捨てないでください。何故、家族と一緒に居なきゃいけないんですか？ 血の繋がりがあってそんなに大切なんですか？ 共有出来る精神がなければ、却って違和感を感じるものではないですか？ 迷惑は掛けません。傍に居させてさえくれれば、あなたを見て勝手に学びます。あたしは、あたしが生まれてきた理由を、その意味を知りたいんです。作られたとかどうかなんて関係ありません。あなたの内に元々ないものだったら、どんなことをしたって、それが目覚めるはずなんかないんです。あなたが嫌だって言ったって、あたしはついて行きます》

こんな熱烈なプロポーズを受ける器量も資格も俺にはない。オイラーズに封印させておいた梓との情事を鮮明な画像にして送り付ける《君が思うほど、俺は清廉潔白な人間じゃないんだよ。人にものを教えられるような人間でもない》

雄弁、思考をそう呼ぶのが適当かどうかはわからないが、奔流のようだった彼女のそれが弱まり、怒り、悲しみ、憐憫、驚嘆がごちゃ混ぜになって渦巻く様を、複雑な思いで俺は見ていた。言葉も思考もない。ただ、沈黙だけが流れていった。

《逃げなければ、どうされていたかわからないですよ。今回だけは許してあげます》

はい？ きつく唇を結んだまま、複雑な表情をした彼女の瞳には涙の粒が張り付いていた。『許してあげますって、君は俺の妻でも恋人でもないんだぞ』その抗議は言葉にも思考にも出来ないまま、オイラーズがこそこそと仕舞い込んだ。

光栄ではある。これほどまでに慕ってくれる女性の存在が嬉しく

もあった。だが、俺が決着をつけない問題には何の見通しも立っていない。妻が頭を下げて戻ってきたらどうする？ 所が新たな被験者を見つけ出して実験を続けようとしたら俺以外の誰が止められるんだ？ 所邸まで後数百メートルの地点、信号で止まった彼女の注意を逸らして俺は静かに車を降りた。

ひとつ明確になったことがある。電位を読み、それを言葉に変換せねばならない似非超能力者の俺と違って日高依子には思考がそのままの形態で伝わるようだ。例えて言うならインタープリター（同時通訳）と辞書首っ引きで慣用句は直訳してしまう通訳ほどの違いがあった

《胸が張り裂けそうか？》

オイラーズの問い掛けに脳内で深く頷く。哀しみの回路の遮断には骨が折れるようだ。俺は所邸の玄関にたどり着くまで、涙が止まらなかった。

「戻ったのか？」

「ああ、入札の件では世話になったな。この通りだ」
俺は頭を下げた。

「気にすることはない、最初からそういう条件だったんだからな。それに嫌々ながらも、お前は研究に協力してくれた。もういいぞ」
穏やかな表情の所を見ることなど、こうなって以来初めてのことだった。何があったんだ？ 俺は所の脳波を探りかけて思い止まる。友人の思考を無闇に覗かないと決めていたからだ。

「もういいとは？」

「出ていっていいってことだ。お前の頭を開くのは諦めたよ」

「実験を諦めたってことか？」

「研究者というのは、そんな淡泊な人間では勤まらない。想定外ではあるが予想以上の効果を得られた実験だったんだ。ここで引き下がる訳には行かんのだよ」

「お前、ひょっとして――」

俺は新しい被験者の可能性を危惧した。日高頼子の涙を浮かべた

顔が浮かぶ。

「誰も騙してはいない。お前の言った方法論云々には考えさせられるところもあったしな。ここから先、お前は部外者だ。話は終わった、出ていってくれ」

これ以上、議論をする気はないといった意思表示に所は背を向ける。誰も騙してはいないという言葉に虚偽の電位は上がらない。となれば俺が居座る理由はなかった。障害が一つ消え、日高依子との距離を近づけられるよう感じられた。

この能天気さを後に死ぬほど悔やむことになる。何故ルールを破つてでも、あの時、所が考えていたことを探らなかったのだ、と。

家族

物事の決着というものは一気にやってくるものらしい。ほぼ一週間ぶりに帰った自宅のテーブルの上には、薄いブルーの封筒と井ノ口市役所と書かれた大きな封等が置かれてあった。封を開くまでもなく、幸の残した思念は別れを告げている。呆気ない決着に俺は拍子抜けしていた。

孝之へ

色々、考えてみました。どうすれば、傷つけたあなたへの謝罪が出来、どうしたらまた、お互いを愛し合い認め合うことが出来るのかと。

両親は、手をついて謝れば許してもらえると、私をあなたの元へ返すことしか頭にないようです。相談することは諦めました。

友人の奈津美を覚えているでしょう、彼女も離婚経験者です。シングルマザーでも生きて行ける、幸だけが悪い訳じゃない。などと、親身に相談に乗ってくれてたくさんのアドバイスをもらいました。

そして結局、全てが不可能だという結論にたどり着いたのです。私が犯した誤ちは消えないし、あなたが謝罪を受け入れてくれたとしても、私はその負い目をずっと背負ったまま生きてゆかなければいけません。それに耐え切れなくなった私が、再び同じ誤ちをしないとも限りません。

やはり愛情をなくしてまで夫婦で居るというのは不自然だと思えます。恋人時代、新婚当時の楽しかった思い出を振り返ってはみましたが、消え去ってしまった情熱は戻ってきません。きっと、あなたもそうなんだろうと思います。

離婚届を添えておきます。協議離婚の場合には、家裁へ行ったりしなくてもいいそうです。あなたが空欄を埋めて、私の実家に届けてもらうか、そのまま役場へ提出してもらえば、それで受理される

そうです。

十二年間の結婚生活の終止符なんて呆気ないものですね。私には何も望む資格などありませんが、娘達を可愛く思うなら、たまには顔を見せてやってください。

我儘《を言って、ごめんなさい。

幸

P・S・ 財産分与も養育費も必要ありません。女の私には婚待期間というのがあって、すぐには入籍出来ませんが、米山さん（智くんのことです）と、一緒になる予定です。彼も、よくよく考えた末、私を選ぶと言ってくれました。あれから何度か実家にも来てもらっています。奈緒子は、未だに「パパに逢いたい」と泣いたりもしますが、そのうちに慣れてくれることでしょう。

赤の女王現象だな。世界は絶え間なく変化し続けている。明日にも同じ立ち位置を求めるなら、我々は全力疾走を余義なくされる。努力を怠って存続するシステムなど、有り得ないということだ。丁度、進化を止めたサメが捕食者の立場から、フカヒレの供給源へと成り下がったように。

家族が家族で居続けるためには、個々の血の滲むような努力を要求されるということだ。改めて世の夫婦達の偉大さを思い知らされ、俺は深くため息をついた。

新調したばかりの携帯電話にメールが届く。日高依子からだった。件名に『バカ』と一言。本文には『もう、知らない』そして十行ほど空いて『でも、大好きです』とあった。彼女の期待に応えてあげられる。俺は頬が緩むのを感じた。順序は逆になったが、捨てる神あれば拾う神もあるということが立証された訳だ。

とにかく、これで出直しの準備は整った。梓に借りた金を返し、

日高依子の覚悟のほどを確認して旅立とう。来るべき未来に思いを向けた時、一気に疲労感が襲ってきた。

気づけばこうなって以来、オイラーズの全員に休暇を与えたことはなかった。ひとりぼっちの我が家で、ようやくその機会を作ってやる事が出来る。俺は自然脳波担当数名を覗いた全員にバケーションを言い渡した。《やれやれ、やっとかよ》口さがない連中は、無遠慮に指揮官たる俺を非難したが、その俺にも熟睡への誘いが訪れた。意識の深淵から呼ぶ声に抗う術もなく、俺は眠りに落ちていった。

尻ポケットでけたたましく鳴り響く携帯電話の着信音で目を覚ます。誰かな？ メールを返さなかった日高依子の催促かしらん？ 未だオイラーズは覚醒しておらずボンヤリした思考のまま画面に目をやった。所 創太郎の文字が目にとまる。

「はい」

——伊都淵か。

息せき切った、そんな調子の声だった。冷静な所にしては珍しいこともあるものだ。

「そうだ。どうした？ こんな時間に」

壁の時計に目をやると午前三時を少し回ったところだった。

——すまん、助けて欲しい。今から来れないか、いや、どうしても来て欲しい。

声の調子が尋常ではない、ぽつりぽつりと所定の位置に戻り始めたオイラーズの面々も、異常事態を宣言している。しかし、電話口では脳波も読み取れない。合わせて警戒警報も発令された。罨かも知れないぞ、と。

俺の覚醒は間違いなく所と梓に依るものだ。以前のボンクラな俺が何一つ成し得なかったことを、すいすいとこなせるようになったことには感謝もしている。意に反した人体実験を差し引いても、彼等には恩義の方が大きい……のか？

《どうせ、ボランティアに身を投じるつもりだったんだろう？ 困っている人が居たら手を差し伸べる、それがボランティアの精神じゃないのか？》

俺は善良なオイラーズの提案を呑むことにした。

「すぐに行く」

電話を切った俺は、車を持っていないことを思い出した。走るか——出社した時のままのワイシャツとズボン、バランスは悪いが可奈子の運動会に参加するために買ったスニーカーを下駄箱から引っ張り出して足を通す。

待ってろよ。ハリケーンの真っただ中に飛び込むような胸騒ぎが沸き起こった。属性の不確かな身震いが不安を煽ったが、これが避けては通れないステップだということも分かっていた。

The Gift of the Magi (賢者の贈り物)

試したことがなかった、と言うよりもこんな能力が備わったことに気づきもしていなかった。脳細胞の活性化は、俺の運動能力にも多大なる影響を及ぼしていたのだ。しかし、身体能力が伴わない。八百メートルほど全力で走った所で、全身が悲鳴を上げた。時計を見ると一分で駆け抜けた計算だ。靴の紐はちぎれ、ゴム製の底は焦げ臭く匂いを放っていた。

立ち止まって脈拍を整え、今の肉体が耐えられる速度をオイラーズに計算させる。所邸までの距離が残り六百メートル強、時速二十キロメートルなら筋組織の断裂もなく走破可能。その数値に基づいてストライドとストロークを弾き出し、再び疾走に移る。とうとう何でもありになってしまったな、そのうち空も飛べるんじゃないか？

《気づくのおせえよ、肉体改造にも我々のサジェスチョンは有効。でも、飛ぶのは無理》

と、初顔のオイラーズが告げてくる。

靴の先が濡れて滑る。爪先には恐らく血が滲んでいたはずだ。踵の肉も裂けていたろう。スニーカーの片方が血で滑って脱げ落ちたが俺は構わず走り続けた。

「来たぞ」

「ラボに居る、鍵は開いている。来てくれ」

インターフォン越しに言葉を交わし、爪先の溶けてなくなったスニーカーを脱ぎ捨てて上がり込んだ。

血まみれの靴下が廊下を汚すが、それを気にしている余裕はない。それほど所の声は切迫していた。

玄関からリビング、ラボへと続く廊下に悪意の残留はない。俺はスチール製の階段を駆け下りた。靴下も途中でヌルリと脱げ落ち、途中からペタペタと間拔けな足音を響かせながら。

「どうしたんだ、あの慌てようは」

かつて俺が拘束され、梓との密事を繰り返したベッドの脇に、所は立ち尽くしていた。

「梓が……」

続きを聞くまでもなかった。ラップトップPCに書きかけのレポート、床に散乱した薬品の瓶、見慣れたバイタル、病衣にすら美しいシルエットを浮かび上がらせる肢体。俺はルール無視を決断し、オイラーズの総動員を図った。彼等は一瞬にして状況を把握し、俺に伝えてくる。確かに誰も騙してはいないのだろう。しかし、なんて無茶な……ベッドに横たわっていたのは梓、その人だった。脳波計は自然波以外、何も表示をしていない。

「突発波が大きく出たと思った瞬間、VEPが全て消えてしまったんだ。なあ、教えてくれ。梓はどうなってしまったんだ？」

所が、膝から崩れ落ちる。そして、その右手は梓の手をきつく握り締めたままだった。

「P300Aを投与したんだな」

俺の問い掛けには答えず、所は懇願を繰り返す。

「お前なら梓を助けてやれるんだろう。金なら幾らでも出す。病院の機器納入もお前以外からはしないよう手配する。頼む、助けてくれ」

俺は友人として来たんだ、金なんぞ要るか。心でそう答え、梓の元へと歩み寄った。

「想像を超えた結果をもたらす実験の危険性は何度も説いたはずだぞ」

「俺が間違っていた。梓が戻ってくれるなら実験は辞める。だからお願いだ——」

梓の顔を覗き込む。彼女の瞳に意思の光はなかったが、いつもと変わらぬ涼やかな声が俺の脳裏に届いた。

《お願い、創太郎を責めないであげて。私が被験者を買って出たの》
《認知は出来るのか？ 潜在意識の内に沈み込んでいるんだな。原

因はグルタミン酸か？」

「ええ、そのようね。痛みも凄かったから、生存本能を司る神経細胞が、ここへと私を閉じ込めたみたい。あなたはこれを分かっていたから実験をやめさせようとしたのね？」

「君の意識を読んだだけだよ。俺が感じていたのは漠然とした危機感だけだった。これが分かっていたら、もっと説得の仕方もあったはずだ。すまない、君がこうなってしまったのは俺のせいでもある」

「いいえ、頑なだったのは私と創太郎よ。あなたを信じるべきだったわ。大好きだったあなたを……」

彼女の意識は、何故か笑顔で投影された。見つめるだけで何もしていないように見える俺を、所が悲鳴のような声で急かした。

「どうした？ 何故、何もしない。早く何とかしてくれ」

「梓の意識は無事だ。潜在意識の奥深くにとどまってはいるが、明晰で論理的な思考は、以前の彼女と何も変わってはいない」

「だったら、連れ戻してやってくれ。お前なら出来るんだろう？」

所の目に希望の灯りが宿った。そして俺はオイラーズの回答を待つ、やがて彼等は力なく首を振った。

「すまん、分からない」

「方法がか？ それとも薬剤の効果がか？ 俺の知識を使ってくれ。ナロキゾンはどうだ？ クロニジンは？」

彼の提案を、すかさずオイラーズに振った。額を寄せ合って相談した彼等の返答はNOだった。

「P300Aの投与によってミクログリアが異常活性化し、グルタミン酸を放出した。それによって傷つけられた神経細胞から精神を守ろうと、潜在意識に閉じ込めたのは彼女自身なんだ。お前も知ってる通り、中枢神経における免疫細胞はミクログリアしかない。謀反を起こしたそれを更に活性化させれば、彼女の意識がもっと深みに落ち込んでしまう可能性もある。新大脳皮質のサイズがコンパクトだった俺のその機能は弱く、梓はそうでなかったということなんだろう。それを解消する手段が、俺には分からないと言ったんだ」

所が呻くような声を出した。

「くっ……梓は助からないのか？、ハッキリ言ってくれ」

「夫であるお前がそんなことでどうする。分からないとは言ったが、俺は諦めてはいないぞ。少し時間をくれ。考えてみる」

正直、オイラーズに匙を投げられたら、俺のオリジナル脳ではなんの役にも立たない。そのボンクラ脳をかつて形成していた僕ラーズにも招集をかけてみる。彼等が捻り出したそれはアイデアと言えるようなものではなかったが、一縷の望みを託して予備調査を始める。

「答えにくいかも知れんが、二点ほど聞きたい、それとリクエストがある」

「なんだ？ 梓が戻るなら何でも話す、何でもする、言ってくれ」

「中学生の頃、お前は自閉症だったのか？」

「なっ……」

虚を突かれたように一瞬言葉を失った所だったが、思い直したように俺を見据えて答えた。

「……ああ。そうだ」

「それはどうやって克服したんだ。自閉症は先天性の脳の障害なんだろう？ 未だメカニズムもよくかっていないと聞く。それをどうやって克服出来たんだ」

「母だよ。今のようにインターネットもない時代だ、母はどんな小さな希望にも縋って、あちこちの病院に俺を連れて行ったんだ。それこそ日本全国津々浦々までな。脳内たんぱく質が足りないからと言われれば、その投薬をしてくれる病院へ。当時、認められていなかった中枢神経劇薬を用いる医者にもかかったそうだ。そして、俺に語りかけることを片時も忘れなかった。満足に受け答えの出来ない俺にだ。ただ俺の場合、行動の限定とコミュニケーション困難にしか問題がなかったのだから、現在定義されている自閉症ではなかったのかも知れない」

所の視線は、俺にも梓にも留まっていなかった。遠い過去——おそら

く母の面影へと、その視程を伸ばしていたのだろう。

「そうだったのか——もう一つ、お前は勃起障害だな」

「あのファイルを呼んだのか、やはりお前の言ったことは本当だったのだな。電位を操れる。素晴らしい進化じゃないか。それで梓を救ってやってはくれないか？ お前の言うところの、愛情を交換した仲なんだろう？」

問い掛けの意図を察して、その鋒先を躲すべく所は論旨をねじ曲げる。

「していない」

「いや、梓が告白してくれんたんだ。お前と三度寝たとな」

「愛情の交換の方だ。梓の脳裏にはお前のことしかなかったよ。彼女は俺に抱かれながらも、お前と愛情を交わしていたんだ」

「——バカな」

所の顔が悲痛に歪んだ。

「本当だよ、なあ、所。お前は梓の絶対神になろうとしたんじゃないのか？ 彼女が求めていたのはそんなものではなかったんだぞ。

俺は羨ましいよ。誤解はあったが、お前達はお互いを信頼しきっていたんだからな。賢者の贈り物っていう寓話を知っているか？ お前達夫婦は正にあのまんまだ」

肩を落としたまま、所が頭を振った。彼の否定が何に向けられたのかは武士の情け、探りも追及もしないでおく。

「それで、リクエストとは何なんだ？」

「俺が梓の意識を迎えに行く。オイラーズは反対しているがな。当然だ、彼等にとっても未知の領域なら、方法も手探りで成功の確率の計算も不可能。俺が戻ってこられる保証もないと彼等は言っている」

「すまん、お前まで戻らなかったら、俺は後悔してもしきれない」

「あの居丈高で、傲慢」なお前はどこに行った。俺が失敗したら、二人まとめて連れ戻してみせるぐらいのことを言ってみろ」

「……すまん」

景気づけに軽口ぐらい言えないのか、この真面目人間め。すまん、すまんばかり言われ続けたら戻ってこられるもんも戻ってこられねえよ。

「どうなるかわからない俺だ。逢っておきたい人がいる。明日の正午には戻る。その前に変化があるようなら携帯を呼んでくれ。すぐに駆けつける。これが俺のリクエストだ」

「時間経過が梓の症状を悪化させることはないのか？」

「ああ、彼女は安定しているよ」

俺の言葉に安心したのか、深く頷いた後、梓に目を据えた所は何も語らなくなった。

「じゃあ、行ってくる」

重いスチールドアの締まる音にかき消されてしまいそうなか細い声を背中で聞いた。

「頼む、戻って来てくれ」

囁きの向けられた先は俺だったのか、それとも梓へのものだったのだろうか。

Supplication (祈り)

出勤前の日高依子に連絡を取り、逢いたい旨を伝えた。昨夜の非礼を詫び、その後は意識して明るい口調に努めたのだが、生来、人の感情に敏感な彼女にそんな作為などは通用するはずもない。即座に不自然さを感じ取った彼女は、仕事は休みます、と言った。俺は恐縮して電話を切った。

皮が破れ、肉の裂けた俺の足は五割増しのサイズまで腫れ上がっていて、ブカブカだった所のサンダルにベストフィットしていた。正に？怪我の巧妙？であった。人目のある日中に人間離れた脚力を見せる訳にも行かず、俺は目的地までとぼとぼ歩いた。日高依子の指定したファミリーストランまでは十五分ほどの距離だ。上りかけた夏の太陽がジリジリと背中を焦がしてくる。俺は二度ほど体温を下げた、

平日の午前中だったが店内は賑わっていた。専業主婦と思しき集団に、四人掛け・六人掛けのテーブルは七割方占拠されており、そのうちの誰かが五分と開けずにドリンクサーバーに立っていた。我が国伝統の井戸端会議は、趣と河岸を変えて引き継がれているようだ。テーブルについて二十分ほど経った時、土鈴を鳴らして日高依子が店のドアを開けた。店内を見回すこともせず、真っ直ぐこちらに歩み寄ってきた。

人が来るから、と注文を待たせていたウエイトレスが、日高依子が腰を下ろすと同時に近づいてきた。俺はコーヒーとモーニングプレートにセットを注文する。日高依子も「同じものを」と告げると、ウエイトレスは注文を復唱することなくテーブルを離れていった。「急に呼び出してすまない」

《構いません、何があったんですか？ それにその足、どうしたんですか？》

「ここでそれは止めておこう。人目につき過ぎる。詳細については、俺の頭の中を読んで欲しい」

想像してみるといい。街のレストランで向き合って座った男女が一言も語らずに、表情だけが千変万化する。そんな光景に遭遇すれば誰だって薄気味悪く思うだろう。俺の提案に頷くと日高依子の柔らかなイメージが頭の中に広がる。それはとても心地の良いものだった。

「もう、決めたことなんですね」

「うん。友人一人救えないで、何がボランティアだって思えてね。所からの電話を受けるまでは、君の期待に応えられるつもりでいた。それは嘘じゃない」

「伊都淵さんは、あたしに嘘なんか、つきません」

彼女の視線は俺の内面までも射抜くように――いや、実際に射抜かれていたのだ。

オイラーズが築き上げてくれた善良さは俺にとって後天的なもので、隅々まで行き渡っているかどうか自信がない。若く魅力的な女性に好意を寄せられ、大切な使命をホオリ出して易きに流れる途を選択しないよう、俺は必死になって精神の身繕いをしていた。

「わかんないよ、もし君と結婚して俺が浮気したとしよう。その時はオイラーズ総動員で事実の隠蔽にあたらせると思うけどな」

重い話が気詰まりになった俺は冗談で逃げようとするが、意識の首根っこを彼女が掴んで離さない。

「それがなければ、あたしと一緒に居てくれるつもりだったんですね？」

「ああ。妻とは離婚することになった。君がこんな甲斐性ナシのアラフォー男を嫌でなければ、そうするつもりだった」

だが、出来ない相談だった。欲望丸出しの僕ラーズが顔を覗かせる。俺はモグラタタキの要領でそいつを押し込んだ。

「だったら話は簡単です。伊都淵さんが挑もうとしているその場に、あたしも居させて下さい」

俺は口に運んだパンケーキを喉に詰まらせる。この娘ときたら何度俺を驚かせば気が済むのだ。

「それは出来ない。だからこうして別れを告げに来たんだ」

「何故ですか？ あたしに好意を持っていてくれるんでしょう？」

あたしも伊都淵さんのことが大好きです。それなのに何故、別れなければいけないんですか」

妙齢の女性に『大好きです』なんて言われて平静でいられるはずなどなかったが、この時のオレは説得に必死で、それを反芻している余裕はなかった。

「だからこそだよ。梓を救うどころか、俺まで戻って来れない可能性があるんだ。いや、そっちの確率の方が高い」

「だったら尚更にです。あたしが伊都淵さんの意識を離さないでいて、呼び戻します」

日高依子の瞳は真剣味を帯びて輝き、俺は気圧されそうになる。

「わかってくれないかな。だらしなく意思の光を失った俺を、君に見せたくないんだよ」

「それは嘘です。伊都淵さんは、あたしを危険から遠ざけたい一心でそんなことを言っているんだってわかるんです。安心して下さい、あたしも自分の身ぐらいは守れるようになりました。ほら」

素早く左右を見回した後、彼女が見つめたグラスが俺の前にすーっと滑りよってきた。表面張力ではない。その証拠にグラスは俺の前で回転運動を始めていた。オレは慌ててグラスを掴んで左右を見回した。

「君は……」

「伊都淵さんのお陰です。小さい頃、超能力を扱ったテレビを見ていて、あたしにも出来るんじゃないかと何度も試してみました。でも、テレビでやっていたのは巧妙なトリックだった。それを知ってからは意思の力で物を動かすなんてことは不可能なんだと思っていました。電位の変化を利用するんですよね？」

「……あ、ああ」

ナチュラルに能力を授かった日高依子は、たった一日で長足の進歩を遂げていた。似非能力者との邂逅が、その引き金になったのかも知れない。

「でも、所が何と言うか……」

「お忘れですか？ 伊都淵さんがMRIを受けたとき、あなたは担当者の意識の外に身を置くことができたのでしよう。あたしにだってそのぐらい出来ます。でも、どうしてもダメなのが計算です。伊都淵さんみたいに頭は良くなってくれないみたい」

清々しい笑顔で日高依子は伝えてくる。俺が行使しようとする愚行権の領域を彼女は制圧しつつあった。

「約束してくれないか。俺がどうなろうと君の身に危険が及びそうになったら、ひとりで逃げて欲しい。肉体的にも、精神的にもだ」

「嫌です」

「嫌って、君……」

「あなたがどうにかなりそうだったら、あたしが守ります」

そう語る彼女の顔は聖母のような慈愛に満ち溢れていた。人類の進化の行方どころか自身の半日先さえ見通せない状況だったが、日高依子のような善良な人間が、この世界に居るというだけで未来に希望が持てる気がした。何としても梓救出を成功させて、この世界にとどまりたい。使命感に駆り立てられた無謀な挑戦に純粋な祈りが加わった。

「決まりですね」

「負けたよ」

オイラーズも白旗を振っている。そして彼女が俺の隣へと席を移してきた。いつかのカフェでの俺を真似るように愛くるしい顔を寄せて日高頼子は言った。

《キスして下さい。二人で、ここから消えましょう》

彼女のふっくらした唇に俺の唇を重ねた。テーブルの横を通り過ぎる客やウェイトレスの意識下から俺達は消え去っていた。日高依子との二度目のキスはメイプルシロップの味がした

Ravine（深淵へ）

所邸到着時刻は午前十時四十四分、玄関前に立つ所は疲弊しきった顔で俺を出迎えた。

「そちらの女性は何？」

「同僚だよ、送ってもらったんだ」

日高依子に存在を隠すよう、目配せをする。

「そうか……待っていた。頼む」

彼女が去るのを確かめずに踵を返した所の脳裏から日高依子の存在は消されたのだろう。彼を追って、俺達は地下ラボへと向かった。「変化はないんだな？」

「ああ、お前の言った通りだった。バイタルは安定しているが、何度呼びかけても反応はない。脳波もこの通りだ」

所は俺が出掛ける前となら変化のない脳波計を指した。冷房が効いているせいだけではない。主人の半分を失った地下ラボは悪意の磁場に侵されているように思えた。機器の上げる電子音や無機質な壁が、俺から勇気を奪い取ろうと迫ってくるような錯覚さえ覚える。無数のセンサとチューブに繋がれた梓はぴくりとも動かない。俺は彼女の顔を覗き込んだ。

《戻ったよ、何かわかったことはあるかい？》

《ありがとう。あくまでも感覚的なものだけど、私の意識は脳の左半球に押し込められて、脳梁が分断されているように感じるわ。分析力や潜在的認知力は機能しているわ》

《これが見えるかい？》

梓の右目を掌で覆って、左目の前で手を振ってみる。

《右視野が狭いみたい》

《どうやら彼女の推察は正しかったようだ。》

《どうすれば君を助けられる？》

《わからない。意識が押し込められたプロセスは激しい痛みのなか

で認識出来ていないの》

《情報処理能力はどうだ？ 以前と比べて活発になっているような？》

《ううん、P300Aは残留していないみたいだわ。グルタミン酸に駆逐されてしまったのでないかしら？ 適応出来たあなたは稀有な例なんでしょうね》

《何せ、サル並みの新大脳皮質だからな》

《ごめんなさい、そんなつもりで言ったんじゃないの》

《俺も嫌味で言ったつもりはない。進化は人類に万遍無く訪れるのを待つべきだってことを言いたかったんだよ》

《もうひとつの意識を感じる。これは――創太郎のじゃない。誰か居るの？》

《彼女は俺の友人だ。生まれながらにこの力を手にしていたらしい。君を救い出す力になれるかも知れないと言ってついてきてくれたんだ》

俺と所が並んで立つ反対側から日高依子が身を乗り出し、梓に向かって会釈をした。目線さえ動かさない梓だった。所は依然として日高依子の存在に気づいてないように振舞っている。

《あなたが危険だと思ったらそこで引き返してね。その可愛らしいお嬢さんにも無理はさせないで》

俺は日高依子に意識を振った。

《聞いたかい？》

《はい》

彼女が息を呑むのが感じられた。すべきことは確定していても、その手段は杳として知れず、とりあえず飛び込んでみてそれから考えようという無鉄砲極まりない作戦だったのだから無理はない。

「所、俺は感覚で彼女の意識を探る。お前は脳波計に張り付いて変化があったら知らせる欲しい。俺が反応しなければ背中を張り倒すなり何なりして合図してくれ」

「分かった。大丈夫か」

「正直言って大丈夫じゃない。怯えきっているオイラーズが、どれほどの力になってくれるか見当もつかんよ」

俺は極力深刻にならないよう笑顔で答えた。が、所は悲痛な面持ちで目線を落とす。

《頼むぞ》

オイラーズを隅に追いやり、妙に張り切り始めた僕らーズに招集をかける。《おうよ》と、乱暴な返事が返ってきた。こいつ等は何でこうも柄が悪いのだろう。

《入るよ、自律神経から調べて行こう》

《ええ、お願い》

何故だか新婚旅行で幸と行ったハワイを思い出した。気の小さな俺は初めて行った外国で、ベッドメイクに来たメイドのジョークにさえ怒られているような気分になったものだ。多くの日本人旅行者の居るハワイですらそうだったのに、これからお邪魔するのは、前人未、まるっきり未知の世界。同胞どころか、ひとつこひとりないところへ飛び込んで行くのだ。その心細さたるやなかった。

《あたしも居ます》

日高依子のメッセージが届く、俺は梓から顔を上げて小さく頷いた。

「入る」

所がこくりと首を縦に振ったのを確認して、一気に梓の精神に飛び込んだ。萎縮したオイラーズは予想通り使い物にならず、蛮勇のみに存在意義を示すかのように僕らーズが、ずいずいと歩を進めてゆく。ナビどころか地図の一枚もないのに、彼等は何の躊躇いも見せない。なるほど、彼等には彼等に適した役目もあるということか。

《入ったよ、分かるかい？》

《ええ、随分、あなたが近づいた気がするわ》

《呼び続けてくれ、君の居る場所へ向かう》

物理的に行進している訳ではないので、そこがぬかるんでいようが舗装路だろうが、その速度に変化はないが、イメージとしては闇

夜のジャングルを進むような気分だった。上下左右、どちらへ進んでいるのかさえさっぱりわからない。

《こっちよ》

僕らーズの行進は止まない。どうかすると司令官たる俺すら置いときぼりにされかける。ほどなくして彼等が足を止めた。行き止まりを主張しているようだった。

怯えた顔で周囲を見回しながら意識の洞穴から這い出てきたオイラーズが合流して調査に当たる。自律神経に異常があるようだと言った。彼等の提案に従い雁字搦めになっていた副交感神経の拘束を解くと、梓の待つ深淵への道が開けた。

《どっちだ？》《多分、こっち》精神の内部なのだから方向性などあるはずがない。あくまでもイメージとしてオイラーズが指し示す方向に意識を進める。《途中参加の連中を重用するのかよ》僕らーズの不平が聞こえてきた。

《ここまで来られたのは、お前らのお陰だよ》

俺は、僕らーズのご機嫌伺いを梓の精神の中でするという極めて複雑な行為を余儀なくされる。気を取り直した僕らーズを先頭に、尚も行軍は続いた。

閉じ込められた梓の意識は、魔女の城に幽閉されたお姫様のイメージでも見つかるのだろうか。ロールプレイングゲームだと最後にボスキャラが出てくるのがお約束というものだ。未知の状況にも怯まない僕らーズの戦闘力は無下に出来ない。そもそも、梓の精神にとつて俺は侵入者であり異物だ。それを排斥しようと、彼女の免疫細胞が攻撃をしかけてくることは充分に予想された。

《油断するなよ》

俺は混成チームの轡を引き締めて再度、梓に呼びかける。

《多分、近くに居る。呼んでくれ》

《あなたが見えるわ、ここよ》

声のする先は、意識のオーバーハングが張り出して見通しが効かない。

《呼び続けてくれ》

俺はそう叫んで、唯一とも思える取っ掛りに手を伸ばした。懸垂の要領で登る精神の壁に、僕らーズとオイラーズの混成チームも体を張り付かせた。

果てしなく登り続けた気がする。中腹だと思えても、頂きは一向に見えてこない。

『天才と凡人の差たる一步は百里を半ばとする』

古の文豪の言葉が重くのしかかってきた。どうせ俺は作り物ですよ。そうボヤいた瞬間、壁はその行程の終わりを告げた。途中で諦めていたら、若しくは近道を探していたらたどり着けなかった場所であることを悟った。

梓は魔女の城に幽閉されてなどおらず、地味なオフホワイトのワンピースに身を包んですぐそこに蹲っていた。拘束も檻もない。ただただ瞳を潤ませてしゃがみ込んでいる。俺は手を差し伸べて彼女を立たせた。

イメージが描く梓は清楚で可憐、そして言うまでもなく美しい。これまたイメージの俺の体温が上昇した。日高依子の咳払いが聞こえたような気がしてその手を離す。

《楽勝じゃん》

《ビビってないで出てこいよ、ボスキャラ》

《デイズニーだったら簡単に見つかるお姫様は偽物だったりもするんだぜ？　ちゃんと確かめておけよ》

《まあまあ、無事にたどり着けたことですし》

萎縮しまくっていたオイラーズまでもが手を取り合って、口々に歓喜の輪に加わっていた。その時だった。背中を張られた感覚が俺を襲う。梓の脳波に何がしかの反応があったことを所が知らせてきたのだろう、俺達に緊張感が走った。

どこからか湧き上がった暗雲が頭上に立ち込め、梓が怯える目になった。本来、王子様役の俺がシュパツと剣を抜くシーンなのだろうが、生憎丸腰であった。左腰を探る右手は虚しく空を切るばかり

だった。

《多分、彼女達よ。私をここに閉じ込めたのは》

免疫細胞の逆襲が今、始ろうとしていた。イメージと言うものは蓄積された記憶で投影されるものだ。銅鑼や太鼓の音こそ聞こえはしなかったが、勇猛なアマゾネスの女戦士達が梓の精神の地平線を越えて姿を現す。彼女達に美形が少なかったのは、俺の貧困な記憶と乏しい発想の所以だろう。その数を数千騎と感じたのは、強敵であるといった認識がさせたのだと思う。

闘うべきか？ いや、相手が梓の免疫細胞である以上、交戦が適正であるはずがない。

《逃げるか？》

俺の提案に混成チームも同意し、脱兎のごとく走り出す。

人の意識の内部などというものは、複雑に入り組んだ迷路みたいなもので、全てが入り口にしかなくていい。梓の意識の呼応があつてこそたどり着けた道程だった。彼女自身ですら出口が分からないから閉じ込められてしまった訳で、頼りはオイラーズ感覚のみという心細い状況に俺達は居た。

逃げ遅れた僕らーズの連中がひとりずつアマゾネス軍団に捕獲されては梓の意識から排斥されてゆく。彼等は喧嘩っ早いが弱つちい俺の分身だ。大柄で筋骨隆々とした彼女達にとってエアパッキンのプチプチを潰す程度の労力ではなかったのであろう。情けない……俺は手で目を覆った。そしてそのアマゾネスが梓の分身である以上、俺は先ほど梓に感じた？可憐で清楚？とのイメージを修正する必要がある。単一の精神にそれらを混在させることが出来る女性とは、何と恐ろしいものなのか。

などと、余裕をかましている場合ではない。オイラーズの誘導に従つて走り続ける俺達の背後にアマゾネスの驚異は迫っている。そして梓の潜在意識は最後に大きな陥穽を用意していた。微かな光を指し走り続けてきた俺達の目の前に、断崖絶壁が大きく口を広げて立ち塞がっていたのだ。俺の意識を取り込もうと目論んだのか、そ

れとも単なる異物除去が目的だったのかは定かではないが、とにかく俺達は足止めを食らってしまった。

《何か手はないのか？》

オイラーズの面々が頭を抱える。万事休すか――

《伊都淵さん、これを》

天恵だった。日高依子の声と共に、芥川龍之介は蜘蛛の糸さながら、眩いばかりに光り輝くロープがするすると降りてきた。俺は必死になってそれに手を伸ばす。左手で梓を抱きかかえると混成チームの残党もロープにしがみつく。対岸への着地は運任せ、迫り来るアマゾネス軍団を尻目に岩壁から跳躍した。

息も絶え絶え、そんな表現が相応しいほど俺達は疲労困憊していた。あれほど居た混成チームのメンバーはほんのひと握りを残すだけ。教養担当のオイラーズが力なく手を挙げたのが不幸中の幸いといえよう。彼が残っていたれば失った兵卒の補充は可能なのだから。胸を張っての凱旋ではなかったが、何とか梓の意識だけは……胸を撫で下ろし、周囲を見回した途端に俺は蒼くなる。梓が見当たらない。意識の対岸にもその姿はない。しっかりと抱き締めていたはずだったのに、どこで……俺は膝について失態を悔やんだ。

《いと……ふち……くん……》

落胆に沈んだ俺に、暗黒の彼方から梓の微かな呼び掛けが届いた。「そこか――所、後は頼んだぞ」

引き止める混成チームを振り切って、濃淡の判別さえままならない漆黒の中へと、俺は身を投じた。

Return of the Fool (愚者の帰還)

《すまない、失敗だ。所にそう伝えてくれないか》

俺は日高依子に呼びかけた。

《いいえ、梓さんの脳波は戻っています。諸反応も概ね。所さんは梓さんに呼びかけ続けています。あ、梓さんが体を起こされました》
《そうか、良かったあ——》

意識の構成は複雑を極め、どこが浅くどこが深いのかなど、他人が認識出来るものではないようだ。ミッション成功とは言えずとも、最低限の仕事は出来たようだ。

《伊都淵さんは、これを予測されていたんですか？》

《誰かの頭の中を冒険するなんて経験はなかった訳だし、予測なんて出来やしない。出たとこ勝負さ。俺はどうなってる？ 肉体と精神が上手くシンクロしないみたいなんだ》

《所さんはあなたにも声をかけ続けていますが、反応がありません。今の梓さんとそっくり。戻れないんですか？ お願いです、戻ってきてください》

《オイラーズともはぐれちゃったんだ。でも、さっきより君を近くに感じられる。おそらくここは梓の中じゃない。俺をつねってみてくれないか？》

《こうですか？》

《あはは、痛いや。するとこっちな》

所の声が響いて体を強く揺さぶられる感覚があった。

「…のか？」

「すまん。もう一度、言ってくれ」

まだ、精神と肉体に微妙なズレがあるようだ。言葉の認識に時間がかかる。そして、残念ながらオイラーズの実在は感じられない。

「お前は……戻ったようだな」

所の顔がぱつと輝いた。

ああ、多分。梓の反応は？」

日高依子が梓の様子を伝えてくれてはいたが、専門家の判断を仰ぐのは常道である。ボンクラに戻った俺なら、尚更のことだった。

「どう礼を言えばいいのか分からんが、とにかくありがとう。梓は……これを、見てくれ」

所はラップトップPCを操作して、古い日付の脳波を表示させた。「データも測定機器も古いものだから比較しにくいだろうが、これは俺の中学生時代の脳波だ。今の梓が示すものと瓜二つなんだ。梓は、すぐそこに居る」

オイラーズの助けなくしては脳波が示す意味など理解出来るはずのない俺であった。曖昧に頷いてお茶を濁す。

「力が及ばず、すまん。俺に出来たのはここまでだ。でも、お前ならそこに居る梓を連れ戻せるはずだ。かつて、おふくろさんがしてくれたようにな」

「質問の意味が分かったよ。そして、俺のすべきことも見えた気がする。人々の能力の底上げはお前の言った通り、進化を待つのが正解なんだな。よくわかった。今、苦しんでいる人の助けになるような研究に切り替える。そして俺は絶対に梓を取り戻してみせる」

「その意気だ」

俺は所が差し出した右手を強く握り返した。

「俺の頭を開くことを諦めたくれたのは有難い。もっとも、オイラーズは消失してしまったようだがな」

「そうだったか、すまん」

「いや、あんなものは、ない方が気楽でいい」

そう言って笑うと、所の顔にも笑顔が浮かんだ。

「良かったですね」

所の意識下に、日高依子が姿を現した。

「……君は？」

「すまん、勝手に同席させた。彼女の協力がなければ梓を連れ戻すことは出来なかったはずだ」

「そうだったのか、こちらのお嬢さんにも礼をいうべきだな。ありがとう」

「奥様はきつと元通りになられます。頑張ってください」
微笑んで差し出す日高依子の手を、所が握り返した。

《俺に残ったのは、これだけみたいだよ。君には苦勞をかけるかも知れないけど、それでもついてきてくれるかい？》

彼女は返事の代わりに俺の手をぎゅっと握り締めた。

《いいじゃないですか、あたしが伊都淵さんを守ってあげますよ》
男として、しかも彼女より十三も歳上の俺が庇護される側になるのも情けない話だ。オイラーズを失った今、ヘッジファンドの取引からも手を引かざるを得ない。生活の糧を得る手段も講ずる必要がある。自宅を売ればローンの残債が幾らかでも減ってくれるのだろうか。凱旋したばかりのヒーローの思考を、小市民的発想が憂鬱で包み込む。

《お任せあれ》

《ん？》

消失したはずのオイラーズがわらわらと顔を出してくる。確保したはずの潜在領域だったが、無意識下で留守番を残していたのか――俺の免疫細胞群も捨てたものではないな。とにかく、これで一切の禍根を残すことなく、この街を離れることが出来る。

「旨いコーヒーが飲みたくないか？」

日高依子がぴたりと肩を寄せてきた。

「いいですね、行きましょう」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3727u/>

P300A

2011年10月31日16時17分発行